
ネットの恋人

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネットの恋人

【Nコード】

N2603B

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

ネットで知り合ったロビンとポンスケは1年を迎えていた。リアルでどうしても会いたいと願うポンスケに対して、ロビンはかたくなに拒否する。だがそれは、単に自分の容姿を気にしているからとか、恥ずかしいからだとか、そんな単純な理由ではなかった。ロビンはこの次元では存在するはずのない女性だったのだ。決して同じ世界でめぐり会うことのない二人の未来はどうなるのか。またその秘密の鍵を握る人物の登場で、物語は後半に向けて最高潮のクライマックスを迎える。(全67話まで)

第1話〜5話

第1話

まだ見ぬ彼女

ponsuke..あのさ・・そろそろ俺と一度会ってみない？

robin830..リアルで・・ってこと？

ponsuke..うん

robin830..約束違反だよ 最初に絶対会わないって決めたのに。

ponsuke..そうだけどさ もう知り合って1年もあるのにさ。

robin830..私は・・会いたくない。。このままじゃダメなの？

ponsuke..なんか不安なんだ。このまま何もリアルを知らないなんて。

robin830..最初はポンスケだってチャットだけの関係で満足だって言ってたじゃない。

ponsuke..そうだけど・・どうして会えないのか理由も教えてくれないからさ。

robin830..理由はリアル世界に関係してるから言えないの。ponsuke..ロビンは徹底して割り切ってるんだね。ネットとリアルを。

robin830..ごめんなさい。でも私、ポンスケのこと好きだよ。絶対ウソじゃない。

ponsuke..俺だってそうだけど・・でもさ。。

robin830..このままの方が楽しい時間を共有できると思うない？

ponsuke..でもさ、今はもう音声チャットの時代なんだよ。

せめて声くらい・・・

robin830…マイク買ってないもん。

ponsuke…それは買う気がないからだろ。ネット友達はあるボイスで会話してるんだぜ。

robin…・・・

ponsuke…1年も経つのにロビンの声さえ聞けないなんて。

robin830…わかったわ。じゃあマイク買ってくる。なら納得してくれる？

ponsuke…ホントに？本当にやっとな俺に声聞かせてくれるんだね？

robin830…うん。。でもこれだけは覚えておいて。

ponsuke…???

robin830…ネットにこうして存在してる人たちってみんな言えない事情があるものなのよ。

ponsuke…それはわかってるつもりだけど。

robin830…私はポンスケといつまでもいい関係でいたいのもそれを壊したくない。

ponsuke…あまり深く追求するなってことだね？

robin830…その方がいい場合もあるのよ。特にネットではね。

幸村一星はロビンとのチャットを終えてパソコンの電源を落とした。

確かに彼は最初の約束で、お互いのリアルなプライベートには触れないことでチャットで付き合い始めた。

だが当然のように付き合いも長くなると益々相手のことが知りたくなるのも心情だ。いらぬ想像もしてしまう。

一体、ロビンはどんな女性なのか。ネットでの彼女は充分に理解している。

なのにリアルでは謎だらけ。独身だとは聞いている。だから不倫を

しているわけではない。

単純に一星いっせいはこう思った。

「よっぽどブスなのか・・それとも俺と年齢差がありすぎるのか？
なら会わない理由もわかるけど。」

だが実際はそんな単純なことではなかった。

その理由を一星が知るのはまだまだ先のことになる。

「ま、いっか。次はボイスで話せるんだし、少しは進展したんだ。
ロビンの声がやっと聞ける日が来るんだ。」

一星は少しの満足感に納得してこの日の眠りに就いた。

第2話

チャットフレンド

みずぐちかずよ

水口和代がロビンと知り合ったのは、音楽カテゴリーのチャット部屋だった。

そこは通常カラオケルームで、参加者のほとんどはアカペラか弾き語りで歌いに来るのを楽しんでいた。

もちろん和代もこの部屋の常連で、自分のストレス発散の手段としても利用している。

だが、参加者が皆歌うというわけではない。

中には聴き専（歌わずに音楽を聴きに来るだけの専門）の者も数人いる。

そしてロビンもその中の一人で、最初に話しかけて来たのは彼女からだった。

ある日、和代がいつものようにカラオケ部屋で歌い終わると、突然パソコン画面上にPMプレイベートメッセージが開いた。

robin830..はじめまして。歌すごく上手ね。うらやましい。
kazuon|v..あ、はじめまして。ありがとう。あなたは歌
わないの？

robin830..ええ。聴き専で心を癒してるの。かずぽんさん
の歌に感動しちゃったからついPMしちゃったw

kazuon|v..（／／▽／／）そんなこと言われるとすごく
恥ずかしいよ。でも嬉しい。ありがとう。

robin830..もし良かったらお友達になってくれない？早い
かな？

kazuon|v..ううん。いいよ。あたしも家で寂しいときあ
るから色々話せたら楽しいし。

robin830..ほんとに？嬉しい！これからもよろしく願ひ
します。

kazuon|v..こちらこそよろしくね！

これがきっかけで、和代とロビンとは急速に親しくなり、親友と
も言うべき仲になった。

知り合ってまだ間もない期間にも関わらず、和代はロビンに相談も
含めて何でも話せるようになっていた。まさに意気投合とはこのこ
とだ。ロビンは親身になって受け入れてくれる。

失恋から3年、やっと立ち直りかけている和代にとって、かけがえ
のないネットフレンドだ。今まではこのネットの世界にすることが、
現実逃避しているような後ろめたさが少しはあった。

でも今は違う。ネットって本当に素晴らしいものだと思和代は実感し
ていた。

そんなある日のことだった。

いつものように、カラオケルームがお開きになったあと、和代はロ
ビンとPMでおしゃべりをしていた。

だがこのあと彼女はロビンから突拍子もない提案をされることになる。

robin830…かずぽん、あのね。言いづらいんだけど・・
お願いがあるの。

kazupon|v..なあに？

robin830…あたしね、ネット彼氏にリアルで会いたいって
言われたの。

kazupon|v..Σ(´◇´*エエッ！？例のポンスケさんて
人？

robin830…うん。でも・・会う勇気がないの。

kazupon|v..でも優しい人なんでしょ？相手はもう我慢で
きないでいるの？

robin830…いえ、まだそんな強引に誘われてはいないんだ
けど・・時間の問題だと思うの。

kazupon|v..ロビンは彼に会いたくないの？

robin830…あたし、ネットだけで充分だと思ってるから。

kazupon|v..そうなの？だってロビン独身でしょ？旦那さ
んがいるんだったら会えない理由もわかるけど。

robin830…実はあたし・・病気で長期入院してるの。いま
で隠しててごめんね。かずぽん。

kazupon|v..Σ(´◇´*エエッ！？そうだったんだあ。。
体大丈夫なの？

robin830…うん。今のところはね。これ以上は言えないの。
勘弁して。

kazupon|v..そんなの気にしないで。誰にだって人に言え
ない事情があるものよ。

robin830…こんなあたしを見たら彼もきつと気持ちが悪え
るわ。

kazupon|v..そうかなあ・・？

robin830…だって彼にはあたしが明るくて快活なイメージがあるもの。

kazupon|v…でもさ…このままどうするつもり？

robin830…だからどうしてもお願いがあるの。

kazupon|v…??

robin830…いずれ彼は必ずあたしに会わないと気がすまなくなるわ。だからそのときは。

kazupon|v…それってまさか…あたしに代役になれってこと？

robin830…ダメ？

kazupon|v…ひえー！(◎0◎)ダメよ絶対！！バレるって！！無理無理無理！！

robin830…一生のお願い！

kazupon|v…こんなこととしてロビンに何のメリットがあるの？益々自分が苦しくなるだけじゃない？

robin830…でも絶対会うのはイヤ！

kazupon|v…優しい人なら正直に言えばきつと事情を理解してくれるはずよ？

robin830…お願い！あたしの病気が治ったら必ず彼に正直に話すから。絶対治るように頑張るから！

kazupon|v…でも…声でバレない？

robin830…あたし、彼とまだボイスで話してないし、写真も送ってないの。

kazupon|v…そうなんだ。珍しいね。付き合ってるのに。てか、あたしもまだロビンの顔も声も知らなかったわw

robin830…ごめんね。でも最近マイク買ったから次はボイスで話せるよ。

kazupon|v…入院中に抜け出して買いに行けるの？

robin830…う…いえその…親に買って来てもらったの。kazupon|v…ああ、なるほどね。

robin830…とにかくもしもそんな時が来たらお願いするわね。かずぼんはあたしのたった一人の親友だもん。
kazupon|v…うん。でもロビンの彼のこと、もつと知らないとリアルデートのとき会話が成り立たないわ。
robin830…それは…これから色々教えてあげる。

ロビンとチャットを終えた水口和代は頭を抱えて悩んでしまった。
「人を騙すことになるのよね。ホントにそんなこととしていいのかな。」

良心の呵責に苛まれる和代であった。

「でもロビンは重い病気に苦しみながら必死に闘ってるんだし…このくらいのこととはしてあげるべきなのかな。」

彼女はこの日、朝まで眠れない夜を過ごすことになった。

真面目で人の良い和代は、もちろん親友のロビンの言うことも信じて疑わなかった。

ロビンが病気で入院している事実などないことも知らずに。。

第3話

ボイスチャット

幸村一星は仕事が終わるといつにもまして家路へ急いでいだ。

それもそのはず、今夜はついにロビンの生声が聴けるからだ。

約束の時間は夜10時だから、まだまだ時間に余裕はあるものの、

一星の逸る気持ちには余裕がなかったのである。

そんな息子の態度の変化に気づいたのか、帰宅後すぐに母親・静子が一星に問いかける。

「あんた随分慌ててるけど、これからどこか出かけるのかい？」

「ちよっと約束があるんだ。母さんメシまだ？」

「ん、あと30分くらい待って。」

「なんだ。。まだまだか。」

「約束した人と一緒に食事するんじゃないの？」

「いやその・・ネット友達だから。。」

「なあんだ。またパソコンの人なの。オタだねお前はホントに。」

「母さんは何もわからないからそんなこと言うんだ。ネットの方が全世界の誰とでも話せるんだぜ。こんな小さな街の人とくだらないおしゃべりしてるよりは、よっぽど世界が広いと思うけどね。」

「よく言うわ。母さんからあんたを見ればね、パソコンの前で一人でしゃべってる不気味な男にしか見えないわよ。」

「実の息子にそこまで言うか？」

「実の息子にだから言えるのよ。」

「ふんっ。母さんはアナログ人間だからな。デジタルなことなんか理解できないのさ。」

「はいはい。そうですよ。母さんにはどうせわかりませんよ。」

「だったら俺のすることには黙っててくれよ！」

「そんなことより彼女でも早く探さないよ。」

「あのね！！だからそれだってネットで・・ま、いいや。いずれわかる。」

一星は母親の理解など求めていなかった。だがいずれロビンとリアルで会って本当の交際がスタートしたら、その時はきちんと静子に報告するつもりでいた。

まるで飲み込むようなスピードで食事を終えた一星は、静子に早食いを嚴重注意されながらも、全く聞く耳も持たずに2階の自室へと戻った。

そして即効でパソコンを立ち上げ、チャット画面を開く。まだロビンはオンラインしていないことを確認する。

「ダメだ・・なんか落ち着かないや。」

1年の時を経て、ついにロビンとボイスできる現実を目の前にすると、一星の中で妙な緊張感が高まってきた。

聞こえたあああああ！！

robin830…(*v.v) 恥ずかしいよ。。。ボイスだと何
て言えいいのかわかんない。

ponsuke…いやいや、充分言ってるし。

robin830…でもポンスケがリードしてくんなきゃ話せない
よ。

ponsuke…おう！わかったわかった！

ロビンはまさに一星の理想としていた声だった。

彼女の声はやや控えめでありながら、優しくて明るい口調だ。

相当、照れながらボイスしているんだろう。画像はわからなくても、
パソコンの向こう側で明らかにハニカンデいるのがわかる。

ponsuke…俺以外誰も聴いてないんだからそんなに照れるこ
とないよ。

robin830…だってボイスしたの始めてなんだもん。

ponsuke…それが不思議だよな。ロビンすっげえ声可愛いじ
ゃん。何で今までしゃべらなかったのか理解できないよ。

robin830…マイク買いに行くのがめんどくさかったのよ。

そんな曖昧な理由が信じられるわけでもなかったが、とにかく今
の一星にとって、ロビンの声を生で聴けた感動の方が大きかった。
ponsuke…俺、ロビンの声も最高に好きになったよ。

さっきまで『声は二の次』と言っていた一星のはずが、あっさり
自論を撤回してしまった。

そう、彼もけっこう優柔不断な男かもしれない。

第4話

膨れ上がる願望

ロビンとボイスチャットをするようになってから1ヶ月が経っていた。

特に用事でもない限り、一星はまっすぐ職場から帰宅し、ロビンと毎日のように話している。

といってもそんなに話題が豊富にあるわけでもない。

パソコンに保存してある音楽や映画ファイルなんかを一緒に観たり聴いたりしていた。

一星にとってロビンの声を聴くことは日課になり、彼の心の安らぎにもなってる。

この日も一星は、お菓子を食べながらのボイチャだった。

一星には緊張もなく、ヘッドマイクをしながらポテチもバリバリ食べるし、時にはカップめんをすすっていることもある。

pon suke..ロビン、今日はこの音・・・ほら、何食べてると思う？

ro bin 830..えっとねえ・・・ひよつとして・・・から揚げ？

pon suke..Σ(□□；えっ？な、何でわかったの？

ro bin 830..てことは当たったのね。やったw

pon suke..すげえ、直感でも働いたのかい？

ro bin 830..そんな大げさなもんじゃないよ。ポンスケがなんとなくジュシーな感じでムシヤムシヤ食べてたから。

pon suke..へー。それにしてもすごいな。

ro bin 830..最近、音当てクイズばかりだねw

pon suke..もう飽きちゃった？

ro bin 830..ううん。楽しいよ。

pon suke..今度はPCカメラ着けてみない？

ro bin 830・・・それはヤダ。

pon suke..そっか。。やっぱダメか。。

何気に軽く言っってはみたが即答で返事をされてしまった。

一星はこう思う。

PCカメラの公開も無理ならリアルで会うことなんて尚更不可能に近いのではないかと。

しかしながら彼の胸のうちでは徐々にもどかしさが現れ始めていた。いくら最初にリアルでは会わないと約束したとはいえ、もう1年以上の付き合いになる。

その上、今は声も聴けるようになった。会いたい。。ロビンの顔が見たい。会って話したい。

でもこれは決して叶わない夢で終わってしまうのか？

一星はロビンに拒否られるのを覚悟でもう一度問いかけた。

pon su ke .. ねえ、どうしても会えないのかな？

ro bin 830

マイクの向こうでロビンがため息をついているかすかな音が聞こえた。

ro bin 830 .. ごめんねポンスケ。。

pon su ke .. あのだよ。もしね、もしもだよ。ロビンが顔や体のどこかにコンプレックスを持っていたとしても、俺は全然気にしないから。これは絶対ウソじゃない。

ro bin 830 .. どういうこと？

pon su ke .. どういうことって。。だからさ。。俺だって全然男前じゃないし、自分のルックスに自信なんてないよ。

ro bin 830 .. ああ、私がブスでも平気だってこと言いたいのね？

pon su ke .. いやその。。そんなはつきりとは。。；^|^A

アセアセ。。

ro bin 830 .. ポンスケは私をブスだと思ってるんだ。。
pon su ke .. ち、違うって。1番最初に浮かんだ理由を言った

pon su ke .. Σ (◊ ◊ * エエッ! ? ホントに? 期待しちゃつてもいいのかい?

ro bin 830 ..それは早すぎ。

pon su ke ..やっぱり (_ _) ;

ro bin 830 ..悪いけど今日はもう疲れちゃった。返事は明日まで待つて。

pon su ke ..も、もちろん。

ro bin 830 ..じゃあおやすみなさい。 \ (* 。 3 ^)

(★ チュパ

pon su ke ..おやすみロビン (* ◉ *) ぶっつちゅうううん♪

最後はログでお互いキスの顔文字で締めるのが二人の習慣だった。

一星はロビンに会える可能性が出て来たことに嬉しさを隠せなかった。

自分の部屋で体全体を使ってその嬉しさを表現していた。

枕を思い切り抱きしめたり、ベッドでゴロゴロのたうち回ってみたり、壁に頭を打ち付けてみたり。

そしてふとした瞬間、我に返るとドアから母の静子が覗いていた。

Σ — 1 1 (◊ ◊ ;) — 1 . . . 母さん。 (_ _ ◊ _ _ ;)

「お前・・バツカじゃないの?」

それからとっさにストレッチをしているしぐさに切り替えたものの。余計に白々しかった。

別にいいさ。母さんになんて思われようが。。俺にはロビンがいるんだ! 絶対会えるんだっ!

だが、幸村一星は知らなかった。
ここまですべてがロビンの計画通りに事が進んでいることを。。

第5話

代役の学習

水口和代は部屋で黙々と情報のおさらいをしていた。
5分程前にロビンとのチャットを終えたばかり。

そこでポンスケの特徴や性格。食わず嫌いなものや好きな歌など、
いわゆる彼の情報を伝授された。

そう、つまりロビンが和代を代役にいよいよポンスケとリアルデー
トをする決意をしたのである。

和代としては気乗りはしなかったが、一度承諾したからにはネッ
トの親友として裏切るわけにはいかないと思っていた。

さっき終わったチャットの中でもそのことは伝えた。

kazu|pon|v..ねえ、やっぱりやめない？うまいきつこ
な
いよ。

robin830..大丈夫よ。まだ面識ないんだし。

kazu|pon|v..なんか心苦しいな。。彼はあたしをロビンだ
と信じて来るんだよ。

robin830..そうだけど..仕方ないもん。

kazu|pon|v..正直に病気のことは言えないの？

robin830..それを言うくらいならもうネットもチャットも
やめる。パソコンも触らない。

kazu|pon|v..そう。。。

和代は府に落ちなかった。

それだけの覚悟があるくらい、自分の身の上を言いたくないものな

の？

何も病気は恥じゃない。正直に言って、それで無理ならそんな男なんて最初からいらぬ。

だが和代がそう思ったところでどうにもならない。ロビンが決めたことだ。

それに協力する返事もしってしまったんだし。

kazupon|v..ちよつと心配なのはね。

robin830..うん。なあに？

kazupon|v..もしよ、もし彼がアタシにキスとか迫って来たらどうすればいいのか。

robin830..最初のデートからそんなことしないよ。

kazupon|v..それはどうかなあ？だってネットで1年も付き合ってるんでしょ？

robin830..そうだよ。

kazupon|v..ならお互いの気持ちはわかってるはずでしょ？リアルで会ってしまったら・・もう行動するしかないっていうか。

robin830..ポンスケが我慢できなくなって野生化するんじゃないかってこと？

kazupon|v..うん。

robin830..それはあり得るかもね。

kazupon|v..Σ―ll(▽;)――1そ、そんな簡単に言わないでよ。困るでしょ。アタシもロビンも。

robin830..でもまだすぐにそこまでは。

kazupon|v..ちよつと聴きづらいんだけどさ。聞いていい？

robin830..遠慮なくていいよ。何でも聞いて。

kazupon|v..あのね。ロビンは彼と・・その。チャットエッチはしたの？

robin830…ああ・う、うん。。ボイスするようになってから・しちゃった。(＊v・v)

kazupon|vガ――ΣΣ(。D。;)――ン!! ショックうゝ!

robin830…ポンスケはやさしいリードだったよ。

kazupon|v…いえそうじゃなくて・・(へ|へ;) それだったら尚更リアルで会うとすぐにエッチってことにも成りかねないじゃないの!

robin830…そうよね。。その時はうまくごまかして。今生理だとか。

kazupon|v…その時はそれで良くてその次からはどうするのよ?

robin830…言い訳なんていくらでもあるわよ。すぐにエッチに走る人は体だけが目的みたいでヤダとか言えばいいのよ。

kazupon|v…な、なるほどね。。

robin830…体調の不調も訴えてもいいし、このあと別な約束があるって言うてもいいし。

kazupon|v…でもこれが続いて行くとなんか泥沼状態にならないかしら? 怖いわアタシ(――);

robin830…初めてみなきゃわかんないわ。とにかくポンスケの情報はちゃんと教えるから暗記してね。

kazupon|v…ホントにいいのね? これで。

robin830…うん。。

kazupon|v…じゃあ最後に1番気になることだけどね。

robin830…うん?

kazupon|v…最近ロビンはボイス始めたでしょ。彼はもう聴いてるけどアタシは知らない。

robin830…あ! そうだったよね。ごめんねかずぽん。今すぐボイスしょっか? 大丈夫?

kazupon|v…ヘッドセットがあるから聴くのは大丈夫だけ

ど、部屋に妹がいるからアタシはしゃべれない。

robin830..じゃあ私が話すね。これで安心するでしょ？
kazupon|v..てかね、アタシが心配なのはポンスケさんは
ロビンの声を知ってるわけだから、アタシとデートのときに声でバ
レるってことよ。

和代がそうログで打つや否や、いきなりロビン側からボイス回線
が開いた。

「ボイスでは初めまして。かずぽん。ロビンだよん。(＊・・・＊)
ウフフフ♪」

Σ(□；。。。この声。。。アタシそっくり。。。)

「どう？バレそうもないと思わない？」

「ええ・・まあ。。。(^□^；A」

こうしてチャットを終えた今、部屋でポンスケ情報を暗記してい
る和代がいた。

それにしてもあの声には驚いた。自分と区別のつかないような似具
合。。

こんな人と偶然にもめぐり合い、親友になれる確率なんてそうある
ものではない。

和代はロビンに不思議な親近感を覚えた。

だが和代は知らなかった。

ロビンが自分になるべく似た声質の女性をチャット内でくまなく
チェックし、ついに和代を探し出して近づいたことに。。

第6話〜10話

第6話

リアル初対面

幸村一星は、ロビンとの待ち合わせ場所で約束の時間よりも早めに到着して待機していた。

ここは待ち合わせ場所としてはメジャーな場所で、他にも数人の男や女が待ち人來たらずで、退屈そうにたたずんでいた。

なにせ、ロビンの顔は知らない。チャットでも顔写真の1枚でさえ見せてくれなかった。

逆に一星は自分の写真をロビンに数枚転送している。

つまり彼女の方から一星を見つけて話しかけてくれるまではどうしようもないのだ。

近くを女の子が通るたび、この子じゃないかと食い入るように見つめてしまう一星。

チラッと目が合った子がいた。首を少しかしげている。

あの子かな。。。？

一星はニコツと微笑んでみる。

すると、とたんにその子に『はあ？』みたいな顔をされてプイッとよそ見をされた。

ヤバ・・・人違いか。。。；　^　^　A

どうやらナンパ師だと思われたのかもしれない。

一星は少し反省してあまり辺りをジロジロ見ないことにした。

しばらくして、同じ場所で待機していた一人の女性からいきなり話かけられた。

「あのう・・・」

「え・・・？」

もしやこの人がロビン？と一星はとっさに思う。

「失礼ですけど。」

「はい。俺がポンスケですけど。」

「はあ？」

「はあってその・・・俺はポンスケで。。君はロビンじゃ？」

「ち、違いますけど（？|？）ただ、あなたのTシャツに値札がついてるもんだから気になって。」

「Σ（ノ。▽。）ノハウツ！値札がつ！！」

普段、着るものに興味の無いズボラな一星は、色のすすけたような何年も着ている服しか持っていなかったので、ここに来る前にユニクロで780円のTシャツを買い、試着室でそのまま着替えて来たのだった。

「お、教えてくれてありがとうございます。（^□^；A」

「いえ別に・・・あの、ポンスケって本名なんですか？」

「え？とんでもない。これはハンドルネームでして。。」

「ああ・・・そうだったんですかぁ。クスクス・・・」

この知らない女性に忍び笑いされて赤っ恥をかかされながらも、一星は再び冷静さを取り戻し、ロビンを待っていた。だが内心は当然のごとく鼓動が高鳴り、息苦しさまで感じるほどになっていた。

それにしても今どき携帯も持っていないなんて。。ロビンの家はよっぽど貧乏なんだろうか？

「（〇へーへ〇）　ウフツ。なんか変よね。」
「じゃリアルでは本名で呼び合う？」

こう聞かれて和代はハツとした。

そういえば、ロビンの本名なんて全然聞いてない。でも自分の本名を教えるわけにもいかない。

「そうねえ・・・どうしようかな。」

和代の中で一気に緊張が高まったが、できるだけ相手に悟られないように冷静さを装った。

「それはもっとお互い慣れてからにしない？急に呼び方変えちゃうとなんかよそよそしい感じしない？」

「まあそれもそうかもしれないな。。じゃあ、しばらくはこのままということで。」

「うん。」

和代は内心胸を撫で下ろしていた。

『εー（へ、へ；　ふう。最初からこれじゃまだまだ苦難の道がありそうだわ。。ホントにこんなことしていいのかなアタシ。』

一方、一星にしてみれば、この少しの会話で緊張が和らいだ気がした。

『よし、とりあえず嫌な顔もされてないし、お互い少し笑えたし、あとは俺がしっかりしなくちゃ。。』

決意も新たに一星は彼女に話を切り出す。

「ロビン、もう昼だからランチしようよ。」

「うん。そうだね。実は朝食べてないのアタシ。」

ここで一星は『何か食べたいものある？』とは聞かないと決めていた。

最初は男のリードが肝心だ。素早く主導権を握り、決断力が早い男だということを印象づけなければならぬ。

「今日もこんなに暑いしさ、冷たいものがないだろ？」

「うん。そうね。あまり汗はかきたくないかも。」

「じゃあロビンさ、ざるそばと冷やし中華、どっちが好き？」

「冷製パスタ。。」

「(ノ　|　|　)ノコケッ!!」

「(＊＾・＾＊)エヘッ。ごめんね。ボケちゃったw」

「いやいや、ヘーキヘーキ。でもパスタは全然思い浮かばなかったよ(＾|＾;)」

「おそばでいいよアタシ。ヘルシーだし。」

「ほんとに？無理に合わせなくていいんだよ？」

「ううん。ちっとも。」

「よしわかった。じゃ冷たいざるそば食べに行こう！」

「はい！」

一星は少し不思議に思った。1年間もリアルで会うのをあれほど嫌っていたロビンが、会っていきなりこれだけ親しみやすい話し方をしてくれる。

彼女に何か吹っ切れたものがあるのだろうか？

チャットでの彼女とは伝わってくるイメージが微妙に違っている。声もわずかにリアルの方が低いように感じる。

まあ・・・ネットのイメージは俺の固定観念だしな。今が本当の彼女なんだし。。

和代は一星に対して第1印象から親しみを覚えていた。

顔はジャニーズ系でもおっさんでもなく無難な感じ。でも発する言葉ひとつひとつに優しさがある。

『この人は悪い人じゃない。楽しく付き合えそう。。やっぱりアタ

シじゃなくロビンが会うべきだったのかも。』
一星に対する安堵感と同時に、自分がロビンを名乗っている後ろめたさも痛烈に感じていた。

『でも・・・これがロビンの希望なんだし。。仕方ないことなのよね。。』

こう割り切るしか今の和代にはすべがなかったのである。

第8話

ランチdeトーク

一星と和代はそば屋のテーブル席に對面して座っていた。

「ホント今日は蒸し暑いなあ。」

「うん。そうだね。ポンスケ君、すごい汗だよ。」

「ごめん。汗っかきなんだ俺。オヤジみたいで気持ち悪い?」

「ううん。そんなことないよ。人それぞれの体質だもんね。」

「はは・・そうなんだ。それに今日は緊張の汗もプラスしてるしさ。」

「へえ、そんなふうには見えないよ。アタシの方が手に汗びっしょりかいてるかも。」

「ほんとに?」

「うん。(＊＾・＾＊) わからないようにしてただけ。ほら。」

ロビンは両手の平をテーブルに差し出す。

「どれどれ・・」

一星は無造作に彼女の手のひらに自分の手を添えて汗を確かめる。

「ビクッ!? Σ(・”・;)」

いきなり手を触れられた和代に瞬間的な緊張が走る。

一星はそんな和代の表情の変化にハッと気づき、慌てて手を引っ込めた。

「ご、ごめんロビン。。いきなりじゃビククリするよな。」

「（へ□へ；A　い、いいの。気にしないで。男の人に手を触れたのってしばらくなかったから。」

「そっか。安心した。警戒されたらどうしようかと思ったよ。」

「ううん。全然。ポンスケ君こそ、そんなに過敏にならなくていいからね。」

「うん。ありがとう。でもホントにいきなりでごめんな。」

ロビンは待ち合わせ場所で会ったときから目をそらさずに話すし、緊張しているとは言え今もずっとそうだ。

それにこんな恥じらう一面もあると、一星の男心としてはグツとくる。

逆に上から下までくまなく観察されているような気もするが、自然で明るい話し方に好印象を得た。

「さ、メニュー決めようか。ロビンは何食べたい？」

二人はメニュー表を片手ずつで持ちながら目を通す。

「えっと・・・アタシこれがいい。」

和代は決めたメニューに指をさす。

「（・・・）　ほー。冷やしごまだれうどんかあ。。うまそうだな。」

「でしょ？アタシごま大好きなの。」

「じゃ俺はと・・・おっ！！」

一星の目に留まったのは夏季限定『夏野菜カレーうどん』だった。

「俺、これにしよっかなあ。。」

「（oへーへo）　ウフツ。じゃあそれで決まりね！すいませ〜ん。注文なんですけどお〜」

店の店員の女性が小走りにテーブルにやって来た。

「ご注文お決まりですね。どうぞ。」

「アタシ言っ方がいい？」

「いいよ。」

「うん。じゃあまず、冷やしごまだれうどん一つ。それと夏野菜カ

レーうどん・・・あ!!」

「（・！・）・・・ン？どうしたい？」

「ポンスケ君。これ冷たくないよ？熱熱だよ？いいの？」

「ああ、そうだけど俺、期間限定に弱いんだよロビン。はは・・・」

「その気持ちわかるわw　じゃそれをお願いします。」

「はい。ではご注文を繰り返します・・・」

店員はなぜか笑うのをこらえてたようで、注文を取り終わって俺たちのテーブルから少し離れると、同僚の店員と小声で話し出した。はつきりとは聞き取れなかったが、かすかに会話の中で『ポンスケとロビン』という言葉が聞こえてきたのは確かだった。

「なあロビン。店員の前でハンドルネーム言うのはやめよっか？なんか笑われてるようだし（へーへ；）」

「そうだね。。うかつだったわ。ごめんなさい。（一一；）」

「それにしてもさ、俺たちざるそば食べに来たのに結局二人とも別メニューになっちゃったなw」

「ああ。そういうばそうなっちゃったねw」

なごやかなムードの中、ここまでは順調な滑り出しだと二人とも思っていた。

お互いが好感触だった。

だが、水口和代にはロビンの身代わりになっていて、新たな不安も生まれてきた。

・・・もしアタシが本当にポンスケ君を本気で好きになってしまったらどうしよう。。

第9話

ひやあせもの

水口和代は一星とのデートから帰宅して胸を撫で下ろしていた。好感触はあったものの、たったひとつだけヘマを犯してしまったのだ。

もちろん彼に言い訳はした。なるべく自然な形で。

でも果たして彼は素直に受け流してくれているだろうか。。。和代の心に一抹の不安がよぎる。

「でも、終わったことだし、うじうじ考えてもしようがないもんね。。。」

一息深呼吸した和代は部屋で飼っているリスのテトに話しかけた。「テト、寂しくなかった？おなかすいたでしょ？今エサあげるからね。」

テトはしゃべれないからエサを欲しがっているのかわからないが、和代が近寄って来ると必ずカゴの外側まで顔を出す。

和代にとっては目に入れても痛くない可愛い相棒だった。

その後、彼女はベッドの上に仰向けにドスンと寝転がり、天井を見据えながら考え込んだ。

「あ。。。うかつだったなあ。。。大丈夫だと思うけど。。。」

和代が悩んでいる原因はそば屋の席で起きたほんのささいな出来事だった。

二人の注文したメニューが来るまでの手持ち無沙汰な時間でのこと。

どのテーブルにもあらかじめ、浅漬けのような大根ときゅうりの薄切りになった漬物が容器に入って備え付けられている。

和代はそれを小皿に取り分け一星に差し出した。

「はい、ポンスケさん。」

「あ、ありがとう。これ好きなんだ。」

「そうだったんだ。アタシここ初めてなの。ポンスケさんこの常連さんの？」

「常連までいかないけど、月1では来るかもね。」

そう言いながら一星は浅漬けをカリカリと良い音を立てて食べ始めた。

「アタシも食べよっと。」

和代も自分の小皿からつまんだ浅漬けを口に運ぶ。

「うん。おいしいねこれ。あっさりしてて食感もいい。」

「だろ？いけるんだよけっこう。」

「でもうどんが来るまでにお腹いっぱいにならないでねw」

「はは。そうだよな。ほどほどにしとかないとな>(；　^　ー　^)
」

ここまでの会話は普通だった。だが一星がふと思い出して言った言葉に和代は固まった。

「あれ？そういえばロビンさあ、大根が大嫌いじゃなかったっけ？」

「Σ(ー◇ー＊エェッ!？・・・(「」▽「」；)」

「何驚いてるんだよ？これ大根の漬物だろ？平気なの？」

「あの・・・あの・・・」

「ああ。。これカブにも見えるよな。ロビンはこれがカブだと思って食べたんだ？」

まさに助け舟とはこのことだ。一星が理由を考えてくれるなんて。

「そ、そうなの。。(　^　□　^　;　A　アタシ、カブは大好きだからてつきり。。。」

「(　@　^　▽　^　@　)　ノあはは。思い込みってすごいよな。俺、黙ってりゃ良かったかな？」

「ううん。いいの。ありがとう。でももう食べない。。。」

「そっか。なんか悪いことしちゃったみたいだな。ごめん。」

「そんな謝らないで。もういいの。うどん楽しみにしてるから。」

もちろん和代本人は大根が嫌いなはずはない。

学習不足の上、未熟な計画だった。和代もそしてロビン本人も。

一星に関する情報は、徹底的に叩き込んで来たものの、ロビンに関する情報はほとんど知らされていなかったのだ。

こうして現在、自分の部屋にいる和代は、ベッドから起き上がりテトに話しかけるようにつぶやいた。

「疑われてないよね？大丈夫だよ？うまくごまかせたよね？帰りにTシャツも買ってあげたんだし。」

と言ったところでテトはエサに夢中で答えてはくれない。。

一方、一星も自宅に戻ってから今日のデートを振り返り、反省点の多いことに悔やんでいた。

「随分、みっともないところを見せてしまった。ロビンは笑ってたけど。。内心は幻滅してたのかもしれない。」

そう、彼も失態を犯していた。

注文した『夏季限定・カレーうどん』を食べ終わり、添付されていたナプキンを使っていないのに気づいたときにはすでに遅かった。彼の胸の辺り一面は、カレーのルーが飛び散り、散々なTシャツに様変わりしていたのだ。

Σ（ノ。▽。）ノハウツ！マジかよっ！！

しかも今日、ここに来るときにユニクロで買ったばかりの780円のTシャツ。

色も真っ白なものだから飛び散ったカレーの色が見事に反映されている。

「俺ってホント、バカだわ。。（；´Д｀）トホホ。」

一星は和代の目を見るのが怖かった。軽蔑の眼差しを浴びせられ

それで怖かった。

だが、彼女の方から意外なセリフを聞かされた。

「（＊……＊）ウフフ♪それアートだよ。アートだと思えばいいじゃない。」

「ア、アートだったって。。（^| ^;）」

「そのTシャツの模様に、あと何色か混ぜたら夏祭りみたいだよ（＊^m^＊）ムフツ」

「ロビン・・・あんた変わった発想してるね。。（一一;）」

「うん。よく言われるの。」

取りあえず、無難にデートは済ませたものの、Tシャツは和代に買ってもらったことになった。

カレーの色や匂いが染みたTシャツを着たまま洋服屋になど入れるわけがなかったからだ。

一星は和代にお金を払おうとしたが、彼女が受け取らなかった。

こうして自宅に戻った一星は、次々頭の中に反省点がたっぷり浮かんで来たのだった。

『やっぱりあるとき、無理にでも金を受け取らせるんだったかなあ。。』

『行儀の悪い貧乏人に見られたかなあ。。』

『夏祭りみたいだって・・・あれは皮肉だったのかなあ。。』

『大根嫌いのことで突っ込み入れすぎたかなあ。。』

と、そこで一星はふと思った。

「ロビンはあれが本当に大根に見えなかったのかなあ？あの驚きようはハンパじゃなかったよな。」

一星はロビンの顔を思い浮かべながら今日の出来事を振り返る。特別な美人ではないが、笑顔がさわやかな清楚な人だと改めて思った。

だが正直、チャットでのロビンとは少し違和感があった。
話し方か・・・それとも別な何か・・・

(。○。;) ハッ!。。。。

一星はその違和感は何だったのかに気づいた。
それはロビンが一星に対する呼び方にあった。

ポンスケさん。。。

そう、この1年、チャットではポンスケと呼び捨てにされていた
一星が、突然今日のデートで『さんづけ』で呼ばれたことにある。

一体どういうことなのか？リアルでは初対面だから礼儀として丁
寧に呼んだだけなのか。。。

一抹の不安が一星の脳裏をよぎった。

第10話

結果報告

和代はいつものようにパソコンを立ち上げ、ロビンがオンするの
を待っていた。

とにかくすぐにポンスケとのデート内容を彼女に報告しなければな
らなかった。

ポンスケは今夜にでもロビンとチャットで話をするだろう。

その時には当然今日のリアルデートの話が出るのは必至。

ロビンにちゃんと細かく説明しなきゃ。。。

和代は今日のデートを順を追って思い返していた。

今日は二人で何を食べて、何を話して・・

そしてちょっとしたヘマをしでかしたことも教えておかないとあとで取り返しのつかないことになる。

その他は・・そう、彼の服装や自分の着て行った服装もロビンに教えておかないと。。

10分くらい経ったころだろうか、ロビンのIDが点灯した。

「来たっ！」

すぐさま和代はロビンにPプライベートメッセージMを送る。

すると、間もなくしてロビンから返信が来た。

robin830..ごめん。かずぽんと同時にポンスケからもPM来てるの。

kazupon|v..Σ(´◇｀)＊エエッ!?!でも彼と今すぐ話するのは危険でしょ?

robin830..うん。だからちょっと彼をごまかすからそのまま待ってて。

kazupon|v..うん。。。

その後1分ほど過ぎると、ロビンのID状態表示が『入浴中』に変わった。

「なるほどね。さすがロビン (o^ー^o) ウフツ」

そして入浴中などウソっぱちの彼女からすぐにPMが届いた。

robin830..かずぽんお待たせ。ごめんね。

kazupon|v..ううん。でも危なかったね。

robin830..ちよつとね。でも1時間はお風呂に入ってるか

らって彼に言っておいたからしばらくは大丈夫よ。

k a z u p o n | v .. (* ^ m ^ *) ムフツ

r o b i n 8 3 0 .. (* ' ' *) ウフフフ♪

和代はロビンに順序よく、待ち合わせから食事に行くまでの経過と、話した内容など、できるだけ綿密に伝えた。

k a z u p o n | v .. で、失敗したことは、彼の情報しか知識がなかったことなの。こういうことかわかるでしょ？

r o b i n 8 3 0 .. あ・・！そうだったわ。彼が知ってる私のこと、全然教えてなかったよね。

k a z u p o n | v .. そうなの。そこでちよいとヘマしちゃったのよ。

r o b i n 8 3 0 .. ど、どんな？

k a z u p o n | v .. ロビン、あなた大根食べれないでしょ？

r o b i n 8 3 0 .. ウツ！！ Σ (・ ” ・) ;)

k a z u p o n | v .. ほらあ。。アタシさあ、おそば屋さんの大根の浅漬け、思いっきり食べちゃったわよ。

r o b i n 8 3 0 .. Σ — 1 1 (∇ , ;) — 1 ・ ・ それで・・・どうしたの？

k a z u p o n | v .. それが意外でね、彼が『カブだと思って食べたんじゃない？』とか聞くから、思わず『実はそうなの』って調子合わせちゃったの。

r o b i n 8 3 0 .. あー良かった。。少しホッとしたわ。

k a z u p o n | v .. 白々しくなかったかな？

r o b i n 8 3 0 .. たぶん大丈夫よ。ポンスケはそんなこと深く考えられないもん。

k a z u p o n | v .. だといんだけど。。

r o b i n 8 3 0 .. あと、変わったことは？

k a z u p o n | v .. えと・・アタシね、彼にTシャツ買ってあげたの。カレーうどんの汁が飛び散ってひどかったから。

robin830…ナプキンはなかったの？

kazupon|v…使うの忘れてたみたい。

robin830…（ノ　　）ノコケッ！！

kazupon|v…でも全体的には楽しいデートだったよ。とてもいい人そうで。

robin830…襲われそうなムードにならなかった？w

kazupon|v…うん。全然。気さくな人だったよ。いつかロビンが本当に会えたらいいのにな。

robin830…。。。。いいの。。アタシはネットの女だから。kazupon|v…でも。。。

robin830…あ、それと今気づいたんだけど、かずぽんは彼のこと何て呼んだの？

kazupon|v…ポンスケさん。。。だけど？

robin830…Σ（ノ。▽。）ノハウッ！しまったあ！

kazupon|v…????

robin830…ごめん。私が悪いの。教えてなかったから。

kazupon|v…ハッ（□；）！！そういえばロビン、い

つも彼のこと呼び捨てだったわよね？

robin830…そうなのよ。。彼は何か言わなかった？

kazupon|v…そのことについては特に何も。。

robin830…そう。。。。まあ、私はチャットで何とか言い訳するからいいわ。安心して。

kazupon|v…うん。。。。完璧に他人を演じるのって・・・難しいわ。。

1時間後・・・

ponsuke…風呂入ってさっぱりした？

robin830…うん。気持ち良かったよ。

pon su ke…暑かったもんな。今日のデートは。

ro bin 830…だよねえ。でも楽しかったよ。今日はありがとう。ポンスケ。

pon su ke…う、うん。。

一星は妙な気分だった。今は呼び捨てにされてる。。

もちろん通常はこれでいいのだが、今日のデートでは丁寧に『ポンスケさん』と呼んでくれた。

一星はその理由を聞いてみようかと思いいぐねていた。

ロビンは一星のちよつとした言葉の間を見逃さなかった。

彼女はその理由をすぐに悟った。

ro bin 830…今日はね、私とても緊張しちゃってたの。家に帰って来て本当の自分に戻ったって感じ。

pon su ke…へえ。じゃあ昼間のロビンは猫かぶってたのかい？
w

ro bin 830…ん〜ん。。ちよつとだけそうかもwいつもより
礼儀正しかったかも。

pon su ke…どんなところが？

予測通りのポンスケの聞き返し。待ってましたと言わんばかりに
ロビンが言う。

ro bin 830…例えばあ、今日はポンスケのことを『ポンスケ
さん』って呼んだでしょう？

pon su ke…あ、ああ。。実は不思議だと思ってたんだ。

ro bin 830…でしょ？いくらなんでも初対面だし、馴れ馴れ
しいのも失礼だと思ったしね。

pon su ke…そうだったのか。うん、それなら納得したよ。で
もそんなに俺に気を使うなよ。いつものロビンでいいんだからな！
ro bin 830…うん。ありがとう。次からは遠慮しないからね

(o^ー^o) ウフツ

p o n s u k e .. かまわんかまわん (ー ー)

この場は何か丸くおさまりはしたが、ロビンにしてみてもこれから益々不安がつきまとうことになる。

「これで良かったのかしら。。。本当に。。。」

自問自答するロビン。でも彼女の目的のためには何としても一星を繋ぎとめておく必要があった。

誤算だったのは、彼がどうしてもリアルで会いたいと言ってきたことだった。

それさえなければ。。。。

ロビンは自分の置かれている境遇をあらためて痛感し、現在に至るまでの人生を過去から思いめぐらせていた。。。

第11話～15話

第10話

結果報告

和代はいつものようにパソコンを立ち上げ、ロビンがオンするのを待っていた。

とにかくすぐにポンスケとのデート内容を彼女に報告しなければならなかった。

ポンスケは今夜にでもロビンとチャットで話をするだろう。

その時には当然今日のリアルデートの話が出るのは必至。

ロビンにちゃんと細かく説明しなきゃ。。。。

和代は今日のデートを順を追って思い返していた。

今日は二人で何を食べて、何を話して・・

そしてちよっとしたヘマをしでかしたことも教えておかないとあとで取り返しのつかないことになる。

その他は・・そう、彼の服装や自分の着て行った服装もロビンに教えておかないと。。。

10分くらい経ったころだろうか、ロビンのIDが点灯した。

「来たっ！」

すぐさま和代はロビンにPMプライベートメッセージを送る。

すると、間もなくしてロビンから返信が来た。

robin830..ごめん。かずぽんと同時にポンスケからもPM

来てるの。

k a z u p o n | v .. Σ (ー ◇ ー * エ エ ヅ ! ?) でも彼と今すぐ話すのは危険でしょ？

r o b i n 8 3 0 .. うん。だからちょっと彼をごまかすからそのまま待ってて。

k a z u p o n | v .. うん。。。

その後1分ほど過ぎると、ロビンのID状態表示が『入浴中』に変わった。

「なるほどね。さすがロビン (o ^ _ ^ o) ウフツ」

そして入浴中などウソっぱちの彼女からすぐにPMが届いた。

r o b i n 8 3 0 .. かずぽんお待ちませ。ごめんね。

k a z u p o n | v .. ううん。でも危なかったね。

r o b i n 8 3 0 .. ちょっとね。でも1時間はお風呂に入ってるからって彼に言っておいたからしばらくは大丈夫よ。

k a z u p o n | v .. (* ^ m ^ *) ムフツ

r o b i n 8 3 0 .. (* ー ー *) ウフフ♪

和代はロビンに順序よく、待ち合わせから食事に行くまでの経過と、話した内容など、できるだけ綿密に伝えた。

k a z u p o n | v .. で、失敗したことは、彼の情報しか知識がなかったことなの。どういうことかわかるでしょ？

r o b i n 8 3 0 .. あ・・！そうだったわ。彼が知ってる私のこと、全然教えてなかったよね。。

k a z u p o n | v .. そうなの。そこでちよいとハマしちゃったのよ。

r o b i n 8 3 0 .. ど、どんな？

k a z u p o n | v .. ロビン、あなた大根食べれないでしょ？

r o b i n 8 3 0 .. ウツ!! Σ (・ ” ・ ;)

kazupon|v..ほらあ。アタシさあ、おそば屋さんの大根の浅漬け、思いっきり食べちゃったわよ。

robin830..Σ—11(▽;)—1..それで・・・どうしたの？

kazupon|v..それが意外でね、彼が『カブだと思って食べたんじゃない？』とか聞くから、思わず『実はそうなの』って調子合わせちゃったの。

robin830..あー良かった。少しホツとしたわ。

kazupon|v..白々しくなかったかな？

robin830..たぶん大丈夫よ。ポンスケはそんなこと深く考えるような人じゃないもん。

kazupon|v..だといんだけど。。

robin830..あと、変わったことは？

kazupon|v..えと・・・アタシね、彼にTシャツ買ってあげたの。カレーうどんの汁が飛び散ってひどかったから。

robin830..ナプキンはなかったの？

kazupon|v..使うの忘れてたみたい。

robin830..(ノ_|_)ノコケッ!!

kazupon|v..でも全体的には楽しいデートだったよ。とてもいい人そうで。

robin830..襲われそうなムードにならなかった？w

kazupon|v..ううん。全然。気さくな人だったよ。いつかロビンが本当に会えたらいいのにな。

robin830..・・・いいの。アタシはネットの女だから。

kazupon|v..でも。。

robin830..あ、それと今気づいたんだけど、かずぼんは彼のこと何て呼んだの？

kazupon|v..ポンスケさん・・・だけど？

robin830..Σ(ノ。▽。)ノハウッ!しまったあ!

kazupon|v..????

robin830…ごめん。私が悪いの。教えてなかったから。
kazupon|v…ハッ（□；）！！そういえばロビン、い
つも彼のこと呼び捨てだったわよね？

robin830…そうなのよ。。彼は何か言わなかった？

kazupon|v…そのことについては特に何も。。

robin830…そう。。まあ、私はチャットで何とか言い訳
するからいいわ。安心して。

kazupon|v…うん。。完璧に他人を演じるのって・・・難
しいわ。。

1時間後・・・

ponsuke…風呂入ってさっぱりした？

robin830…うん。気持ち良かったよ。

ponsuke…暑かったもんな。今日のデートは。

robin830…だよねえ。でも楽しかったよ。今日はありがと
うポンスケ。

ponsuke…う、うん。。

一星は妙な気分だった。今は呼び捨てにされてる。。

もちろん通常はこれでいいのだが、今日のデートでは丁寧に『ポ
ンスケさん』と呼んでくれた。

一星はその理由を聞いてみようかと思いあぐねていた。

ロビンは一星のちょっとした言葉の間を見逃さなかった。

彼女はその理由をすぐに悟った。

robin830…今日はね、私とても緊張しちゃってたの。家に
帰って来て本当の自分に戻ったって感じ。

ponsuke…へえ。じゃあ昼間のロビンは猫かぶってたのかい

?
w

robin830…んゝん。。ちよつとだけそうかもwいつもより
礼儀正しかったかも。

ponsuke…どんなところが？

予測通りのポンスケの聞き返し。待ってましたと言わんばかりに
ロビンが言う。

robin830…例えばあ、今日はポンスケのことを『ポンスケ
さん』って呼んだでしょう？

ponsuke…あ、ああ。。実は不思議だと思ってたんだ。

robin830…でしょ？いくらなんでも初対面だし、馴れ馴れ
しいのも失礼だと思ったしね。

ponsuke…そうだったのか。うん、それなら納得したよ。で
もそんなに俺に気を使うなよ。いつものロビンでいいんだからな！
robin830…うん。ありがとう。次からは遠慮しないからね

(o^ー^o) ウフツ

ponsuke…かまわんかまわん(ー、ー)

この場は何とか丸くおさまりはしたが、ロビンにしてみてもこれ
から益々不安がつきまとうことになる。

「これで良かったのかしら。。。。本当に。。。」

自問自答するロビン。でも彼女の目的のためには何としても一星を
繋ぎとめておく必要があった。

誤算だったのは、彼がどうしてもリアルで会いたいと言ってきかな
かったことだった。

それさえなければ。。。。

ロビンは自分の置かれている境遇をあらためて痛感し、現在に至
るまでの人生を過去から思いめぐらせていた。。。。

第11話

消えた過去の軌跡

もう何度泣いただろう。涙が枯れるまで泣いた。

あんなに楽しかった子供の頃の思い出、学生時代、そしてちょっとしただけのOL生活。

まさかこんな形で全てを失うとは思っても寄らなかった。

しかも1番辛いのは、今も果てしなく続いている先が見えない現状。

栗山いずみはこの現実を受け入れるまでかなりの時間を要した。

『私はどうなっちゃったの？家族はどこに行っちゃったの？今の私って何？』

自問自答を繰り返しながらも更に時が流れ、冷静に考えるようになっていた。

幾通りもの解釈を考え、確信らしきものも生まれた。

ただ、今の自分のままではどうしてもそれを確かめることができなかった。

だがついに、1年ほど前からひとつの巧妙が見つかったのだ。

ネットの世界。。。

やっと彼がこの世界に興味を持ってくれたおかげでコンタクトが取れるようになった。

最初はいずみ自身もそれができるとは思ってもみなかった。

自分には特に超能力なんてあるはずもないし、そんな家系でもない。だから彼がチャットを始めたときは様子を覗いているに過ぎなかった。

いずみはたいいてい部屋に引きこもりだった。

家の中を自由に動くことはできるが外へ出ることはできない。

この歯がゆさに何度絶望的になったことか。。。

でも今はこのネットを要して、応用も使える技も身につけた。

今日はポンスケとかずぼん、どっちが先に話しかけて来るだろうか。。

そう思っていた矢先、部屋のドアが開いた。

「εー（へ、へ；ふう・疲れたあゝ。」

一星が部屋に入るなり、自分のベッドの上で大の字になった。

いずみは『おかえりポンスケ』といつものように言ってはみるものの、彼に聞こえるはずもない。

彼にはいずみの存在が見えないのだ。

そう、今のいずみは肉体の持たない無の存在。

ずっと何年もそばにいるのに気づいてもらえない存在だった。

「あ、PC立ち上げとこ。」

一星はパソコンの電源を入れ、メッセージャーを起動する。

それを確認したいいずみは、彼にすぐさまメッセージを入れる。

不思議なことに、現実の世界ではコンタクトは不可能ないずみなのに、ネットとだけはなぜかリンクできることを発見していた。

頭で考えたことを相手へのメッセージ画面として送信できるのだ。

robin830…ポンスケお疲れ様。

ponsuke…おっ！ロビン。今日はONするの早いねえ。

robin830…うん。。なんか今日は寂しかったんだあ。。

ponsuke…何かあったのか？

robin830…色々ありすぎてね。。

ponsuke…こないだロビンと会ったときの笑顔はとてもさわやかだったのにな。

もちろん、このさわやかな笑顔というのは、いずみのことではなくて、代理になった水口和代のことである。

robin830..いつもそうじゃないもん。。

ponsuke..そりゃそうだけどさ・・でも俺の好みの顔だよ。

robin830..ウソお。ポンスケは『ほしのあき』が気に入
りでしょ！

ponsuke..へ？（。へ。）どうしてそれ知ってんの？

robin830..え？あ、あの・・たしか前に聞いた気がしたか
ら。。（へ―へ；）違った？

ponsuke..いや、違わないけど。。そか・・前に言っただけ
か。。

危なかった。いずみはヒヤリとした。

一星の部屋には『ほしのあき』のポスターやカレンダー、写真集も
ある。

当然、いずみも毎日それらが目に入るため、うかつな発言になっ
てしまった。

すぐさま、話題を変えようとするいずみ。

robin830..ねえポンスケ。突然変なこと聞くけど、デジヤ
ヴって経験ある？

ponsuke..はあ？ないよそんなの。

robin830..Σ（―◇―＊エエッ！？1回もないの？

ponsuke..ないよ。

robin830..最近のことじゃなくて、生まれてこれまで1回
もないの？

ponsuke..うーん。。。そう言われると・・・・・・・・ないなやっ
ぱり。

robin830（ノ―ω―）ノバタ

ponsuke..それが何か意味あるのかい？

robin830..聞いてみただけよ。

ponsuke..ふーん。変なの。

robin830..だから最初に変なこと聞くけどって言ったじゃない。

ponsuke..はは・・そうでした>(；　　^　　ー　　^)

だが、この質問はいずみにとって重要なことだった。

第12話

いずみのジレンマ

今の栗山いずみは姿形のない存在。食事やトイレに行くなどの生理的なことはしなくても平気だった。

だからこれまでも体力を使うこともなければ病気もしない。

一見、最高なことではないかと思うかもしれない。だが精神的な疲労は並大抵のものではなかった。

食事をする楽しみ。堪能する味覚。そして人や何かに触れる感触。これらすべてができない上に、自分の今の顔すらわからない。

こんな状況が続く中で、いずみはかつて気が狂いそうになったことが何度もある。

食べることも触れることも経験が1度もないのならまだマシだった。でもいずみにはかつて肉体があった。外で友達と遊んで食事をしたりもしていた。

そんな遠い昔の出来事に思いを巡らせていると辛さが倍増した。

それに一星が部屋でちよくちよくつまみ食いをしているのを見るとたまらなかった。

当初、いずみは自分が何らかの理由で死んでしまったのではないかと考えた。

自分は成仏のできない霊なのかとも思ったりもした。

あるいは透明人間に変換されたのでは？と空想的なこともイメージ

した。

でも透明人間だとしたら、姿が見えないだけで、服はちゃんと着れるはずだ。

いずみは服を着るどころか、物体に触れようとしてもすべてが貫通して触れるところではない。

どれも正しい答えとは思えなかった。

彼女が一星にデジャヴ経験について質問したのには決定的な理由がある。

それは、いずみが同じ時代を繰り返していることに気づいたからだ。今現在の年号と、いずみがかつて自分の肉体を持って生活していたときの年号が重なっている。

世の中の動きを一星の部屋のテレビでたまに観ても、やはり同じ事件、同じブームが繰り返されている。

いずみにとっては、今の現状全てがデジャヴなのだ。

と言っても彼女自身が以前とまた同じことができるはずもない。なにせ肉体がないのだから。

世の中には不思議な現象がいくつもあるものだ。

かつてはいずみもそんなミステリーな本が好きで、趣味としてよく買って読んでいた。

まさか自分がこんな夢物語の中心人物になるとは思ってもみなかった。

だが彼女は一星とのコンタクトで、漠然とではあるが希望が見え始めていた。

「私と彼の人生が取り違えられている。。。。」

いずみがそうつぶやくのも無理はなかった。

幸村一星の家族が住むこの家。。

ここは栗山いずみが生まれ育ち、長年住んでいる愛着の家でもあった。

「人は誰でもデジャヴを繰り返しているのだとしたら・・・私のデジャヴは彼に乗っ取られている。」

一星が風呂から上がってきた。素っ裸のまま片手に缶ビールを持っている。

さすがに見慣れてしまったいずみにとって、一星の全裸などに何も興味はなかった。

パンツ1丁でパソコンを立ち上げる一星。

p o n s u k e .. ロビン、いる？

r o b i n 8 3 0 .. 入浴中 (状態表示)

「なんだ。まだ風呂かぁ。。」

一星は片手に持っていた缶ビールを開けて飲み始めた。

この暑い夜。ゴクゴクのどを鳴らして飲む一星。おいしさが伝わってくる。

いずみはうらやましさと、憎たらしさで心が不安定になっていた。

『一星なんて大嫌い！絶対この家は私が取り返してみせるわ。。絶対！』

第13話

罪悪感から生まれたもの

和代と一星は、すでに4度目のリアルデートを重ねていた。

これまでの内容といえ、少し遠出のドライブに行ってみたり、二人で街の中をだらだらと当てもないショッピングを試みたり、極

々普通のデートだった。

一星はロビンから聞いているような『ちょいスケベ』的な素振り
はみじんも見せず、硬派そのものといったような爽やかな印象を和
代に与えた。

「ごめんね、ポンスケ。今日も買い物つき合わせちゃって。」

ロビンから指摘された注意事項をきちんと守り、和代は彼のハン
ドルネームを2回目のデートから呼び捨てに変更していた。

「平気平気。全然楽しいよ。ロビンと一緒にだもん。」

「でも男の人って、女の買い物に同行するのってすごく退屈なんで
しょ？」

「だからそんなことないって。ロビンが嬉しそうに小物を眺めてる
横顔を見てるのが特に好きなんだ。」

「（／＼／＼／＼）ええっ？ヤダ、そんなところ見てたのお？」

「うん。とても可愛いよ。」

「もう恥ずかしいから言わないでえ（／＼＊）」

和代は赤くなった自分の顔を手で覆いながら、無意識に一星の足
の外にもローキックをしてしまった。

「あいたっ！！（□；）！！イテテテテ・・・」

「Σ（ノ。▽。）ノハッ！ごめんなさあああい！」

「モロ入ったぞお・瞬間マヒじゃん。。（＾□＾；A」

「ほんとにごめんねえ・・アタシ学生時代にテコンドーしてたから。
」

「ツ、ツボは心得てるわけね。。（＾―＾；）」

「無意識に要所を蹴ってしまったみたい。。あゝアタシってなんて
ことを。。」

「いやいやロビン、気にしてないから大げさに考えるなよ。」

「全然気にしてないの？」

「全然でもないけどw」

「ほらあゝ（・T―T）うるうる。。アタシってホントバカよねえ。
」

「ウソウソw全然気にしてないってば。もう治ったしさ。こんな瞬間だけさ。」

「あゝ失敗しちゃったあ。。。」

和代は随分と凹んでしまったが、一星の優しい慰めに次第に立ち直り始めていた。

「でもロビンがテコンドーやってたなんて初耳だね？」

「え？ ああ・・そうかもね。今までそんな話題になったことないからよ。」

「ま、そうだよな。まだまだロビンについて知らないことがいっぱいありそうだね。楽しみだよ。」

「そんなこと言わないで。なんか怖いわ。」

和代は内心、穏やかではなかった。あくまで自分は代理。ヘマは絶対許されない。

不意に出たテコンドーの話も、帰宅したらすぐにロビンに教えておかなければならない。

ショッピングを終えた二人は予定のない次の時間をどうするか考えていた。

「夜といたって夏だからまだこんなに明るいしさ。まだ帰るのもつたいないよな？」

「え？ う、うん。。でもテトにエサあげなきゃ。。。」

「へ？ テトって？」

「うちでリス飼ってるの。すごく可愛いんだよ」

「そうなんだ。でもエサなら家族に連絡しておけば？」

「うん。。そう・・よね。じゃあお母さんにメールしとくかな。」

「そうしなよ。」

「で、これからどこ行くの？」

「ちよっとどっかで休んでく？」

「・・休むって。。どこで？」

「そりゃ・・部屋でゆっくりくつろげるところがいいだろ？」

「部屋・・・？あ、カラオケもいいよね！」

「（ノ　ω　）ノバタ。。。そっか、ロビンはカラオケしたいんだな。（へ、へ；）」

「うん。しばらく行ってないし。」

「じゃ決まり！行こう。」

和代はうまくこの場を切り抜けた。

一星がホテルに誘おうとしてるくらいすぐにわかったから、とっさに出た言い訳だった。

アタシはロビンの身代わりなのに・・・ポンスケと深い関係になっ
てはいけない。。

でも彼はとても優しいし・・・もしこのまま誘惑でもされたら断り
されるかしら。。

そう・・・和代は明らかに一星を好きになり始めていた。

ロビンとの友情の中で、一星と本気で付き合うのは裏切り行為。

友情が大事か、自分の恋が優先か、和代の頭の中は目まぐるしく
渦を巻いていた。

元はロビンが悪いのよ。。アタシがあれば代理役は無理だって
言ったのに頼みこんで来たんだから。。

和代は何か吹っ切れたように、一星と手を繋ぎ、はしゃぎ始めた。

「ポンスケがどんな曲歌うのか楽しみだわ。」

「俺の歌か？きつとしびれるぞw」

「Σ（・◇・＊エエッ！？そんなにうまいの？」

「しびれて倒れるほど雑音に聞こえるかもしれないってことさw」

「（　ー　）；そ、そう。。でもあたしたち歌手じゃないんだし、楽
しければいいのよ！」

「まあそうだけどな（ー）； ヒヤリ」

こうして二人の舞台は夜のカラオケBOXへと移行してゆくのだ
った。。。

第14話

カラオケルームにて

「あゝ顔が熱いゝ。」

「ロビン、飲むペース少し早くないか？悪酔いするぞ？」

「だってえゝすつごく楽しいんだもん。歌うのも久しぶりだし。」

「だからってさあ、1曲ごとに1杯飲んでんじゃん（へーへ；）」

「アタシ酔わないと歌えないの。しらふじゃ盛り上がれないのよ。」

「まあその気持ちはわかるけどな。」

「でしょでしょ？ポンスケも飲もうよお。」

「ちゃんと飲んでるから俺も（ー）；」

「次の曲入れる前にカシスソーダ注文しとこつと。」

「はは・・・（・ー・；）」

一星と和代はテーブルに差し向かえて座っていた。

ビッグサイズのミックスピザを二人で食べるものの、アルコールの量の方が圧倒的に多い。

和代はここまで6曲歌ってカクテルや酎ハイを6杯。一星は4杯飲んでいた。

彼女のペースの早さに最初は心配していた一星だったが、更にお互いもう1杯ずつ飲むようになると、『楽しけりゃいいじゃん』みたいな楽観的な思考が脳の大半を占めるようになっていた。

と同時に彼は、和代がうつろな目でソファに崩れかかった姿勢に妙な興奮を覚え始めていた。

ロビンのとなりに座ってそっと肩を抱いちゃおつか。。。

一星の頭の中は、いかにして和代に近づき、ごく自然な形で彼女に触れられるかということばかり渦巻いている。

警戒されてはダメだ。酔っているとはいえ、嫌われたら元も子もない。

一星は意外と小心者でもあった。慣れたら大胆不敵なことも平気でする彼ではあったが、肝心かなめのきっかけを作る『始まり』が苦手なのだ。

「ポンスケの飲んでるお酒なんだっけ？」

「（・・）ン？ テキーラジンジャーだよ。」

「ちよっと飲ませてもらってもいい？」

酔いがまわってうつろな目の和代が、更にゆっくりとしたセクシーな口調で話しかけてくる。一星の興奮度が倍増する。

「ああ・・いい、いいよ。」

ここまで言うのがやっとだった。下心があると思われては絶対にNGだと思っていたからだ。

「うん。おいしいねこれも。あ、ポンスケと間接キスしちゃった。

あは（@^▽^@）」

間接キス。。。 （*、ρ、）”

しばらく彼女もいなかった一星にとっては『間接キス』という言葉だけで脳に十分な刺激が送られた。まるで思春期の未成年のようなウブな自分に少し驚きもした。

「アタシのも飲んでみる？ ポンスケ」

「あ、ああ・・じゃちよつとだけ。。。」

と、いかにも平静さを装ってはいるが、気持ちは今にもはちきれんばかり。

でもここは、大人としてごく自然にグラスを受け取って飲まなければならぬ。

いや待てよ・・逆にめっちゃ明るく、お笑い系のノリでジョークっぽく振舞ったらどうだろう？ 例えば。。。

『おっ！ ロビン、ここに口紅ついてるぞ。じゃ俺もここで飲もつと（ー、）フッフ。』

ダメだ。。志村けんのコントみたいだ。。それに変態ぽいし。。。

結局あれこれ考えすぎたあげく、感情の押し殺して普通に飲んだだけだった。

「ポンスケ？ どうしたの？ 真剣な顔して。」

「いやあの・・そうそう、ちょっとトイレ。」

そう言う和一星は部屋から一旦出て深呼吸をついた。

洗面所で軽く顔を洗った一星は、緊張から少し解きほぐれた気がした。

こうなると思考回路も少しは働くようになる。

そうだ！ 部屋に戻ったときにごく自然にロビンの隣に座ればいいじゃない！ 二人で一緒に歌おうか？ なんて聞いちゃったりしてさ！ そうだよ。よしこれで決まり！

こうしていいいよささやかな行動が実行された。

一星は和代のとなりに座り、すぐさま『一緒に歌える曲選ぼうか？』と問いかける。

「うん、そうだね。なんか探そ。」

二人は少し前かがみでリストを眺める。

しばらく検索したあと、二人同時に「あっ！これっ！」と声が出た。お互いがびっくりして不意に顔と顔をみつめ合わせる。しかもその距離わずか10センチ。

よしっ！今だっ！キスできるっ！

一星は瞬間的に思った。ロビンの目も半分閉じかかっている。受け入れ態勢が整っている証拠だ。

一方、和代の方も今か今かと一星の誘いを待ちわびていた。ロビンへの後ろめたさも消えたわけではないが、酔いの勢いにまかせて気持ちは少し大胆になっていた。

でも決して自分からは誘わないと決めていた。軽い女に見られたくないからだ。

そして今ようやく彼が行動に出ようとしている。トイレから帰って来てすぐ自分の隣にいきなり座った。

お互い見詰め合い・・・そしてお互いが求め合っている。

彼の目がアタシを誘っている。。素直になろう。。アタシもポンスケとキスしたい。。

二人の唇が触れるか触れないかの直前、ドアにノックの音がした。「お飲み物お持ちしました。」

ハッと我に返って距離を置く和代と一星。

「カルアミルクですね。どうぞごゆっくり。」

店員はぶっきらぼうな事務的な口調で早々に部屋をあとにする。

「ごめんねポンスケ。そういえば飲み物頼んじやったの。。」

「いや、いいんだ別に。何度でもチャレンジできるだろ？」

「（・・）エッ・・・？」

すでに小心者の一星は露と消え、大胆な一星が顔を覗かせていた。ロビンの受け入れ態勢が確認できた以上、一星の不安など吹っ飛んでしまったからだ。

俺もバカだよな。冷静に考えればロビンとはもうチャットエッチもしてるんだし、何もおじけづくことはないんだ。

「ロビン・ずっと好きだよ。こうしてリアルで会うようになっても全然気持ちは変わらないよ。」

「アタシもポンスケが好き。キスして。(＊v・v)」
「うん。」

一星は和代の肩をそっと抱き、顔を少しだけ右に傾けながら彼女の唇に触れようとした。と、まさにその瞬間だった。

「おーい！幸村じゃねえかあ！こんなところで会うなんてなあー！」いきなりドアが開いて、顔見知りの旧友が酔った勢いのデカイ声を張り上げて入って来た。

「お前っ！権現京二ごんげんきやうじかつ！」

「おうそうよ！たまたまドアの窓からちょっと覗いてみたらなんとまあ！」

「なんとまあじゃねえよ！見てわかったら声かけないのが普通だろが！」

「いやさ、その彼女が嫌がってたら事件になると思ってさ。未前に防ぐのも大事だろ？」

「俺は犯罪者じゃねえぞこら！ムードぶち壊しやがって！」
「ならいいんだ。じゃまたいつかな！」

権現京二は反省も何もないまま、鼻歌を歌いながらどこかの部屋に消えて行った。

「あのバカ野郎！・・ごめんなロビン。。もうしらけちゃっただろ？」

「うん。。あまりに突然だもの。。めっちゃ失礼だよねあの人。友達なの？」

「いや、単なる知り合いだ。俺は友達とは思っていない。あいつはどうか知らんけど。」

「そう・・あまり関わり合いにはなりたくないわ。」

「大丈夫さ。こんなの偶然に過ぎない。次に会うのは20年後かもしれないし、もう会わないかもしれないし。」

「それだけ付き合いがない人ってことね？」

「ああ。ただの知り合いだし、知り合いたくもなかったw」

だが、一星の考えは甘かった。

権現京二と再び会うハメになるのは、そんな長い先の話ではなかったのである。

第15話

迷惑な訪問者

和代とカラオケで楽しんで帰宅した幸村一星は、風呂から上がった部屋でくつろいでいた。

そしてすかさずパソコンを立ち上げる。

『きつとロビンも部屋で落ち着いてる頃だろう。』

さっきまで話してたとは言え、チャットはまた違った感覚がある。リアルで言えなかったことや言いそびれたことなど、改めてネットの中で補足することができる。

今日は権現京二のせいでデートの後半はしらけてしまった。しかも1番盛り上がり上ろうとしているムードの中で邪魔されたのだ。一言ロビンにもう1度だけ謝っておこうと一星は思っていた。

案の定、ロビンも現在オンラインになっている。
フレイベートメッセージ
すぐにPMを飛ばす一星。

ponsuke..お帰りロビン。もう寝てる？

ここで栗山いずみは手痛いミスを犯した。

和代と先にコンタクトをとって、デートの内容を聞く方が先だった。
なのに一星のPMにすかさず反応してしまった。

robin830..あ、ポンスケもお帰りなさい。今日は楽しかったよ。

ponsuke..ホントに？あんな邪魔が入ってしらけちゃったのに。。

robin830..う、ううん。。全然気にしてないよ。

本当のロビンこと、栗山いずみはここで初めてハッと気づく。

早く代理のかずぼんに今日のデート内容を詳しく聞かなければ、一星から何を言われても訳がわからない。

ponsuke..じゃあ次のデートでは人に邪魔されない場所に行こう。

robin830..そ..そうね。そうしましょう。

ponsuke..テトは大丈夫だったかい？

robin830..(・|・)エッ..・・・？

またまた困ったいずみ。テトって何のことかさっぱりわからない。
少し油断もあった。だが反省しても後の祭り。

ponsuke..まさか死んでなかったよね？

robin830..ま、まさかあ(^□^;A

ponsuke..アハハ。だよな。1食くらい抜いたってなw
robin830..うんうん。。(?????)

pon su ke.. 今度見せてくれよ俺にも。

ro bin 830.. え? ど、どうかなあ。。 そんな人に見せるもんじゃ。。

pon su ke.. は?

一星は不思議に思った。リスって人に見せれないものなのか? それとも俺がロビンの家に行くことを警戒してるのか?

そんな時、部屋の外から母の静子の呼ぶ声が聞こえた。

「ん? なんだい? 母さん。」

ドアが開いて静子が顔を覗かせた。

「一星、友達みたいな人が来てるよ。」

「はあ? 誰だよ?」

「ごんげん? とか言ってたかしら? 変な名前ね。」

「工エエエ (ㇿ) エエエ工! なんだあいつがっ!!」

「終電に間に合わなかったみたいだね。1晩でいいから泊めて欲しいんだって。」

「((ノ | ω |) ノバタ。タクシーで帰ればいいじゃんか。」

「お母さんに言ったってしょうがないでしょ! 自分で言っ来なさいよ。」

「ヤダよ。母さん頼むよ。断ってくれよ。母さんだってこんな夜中に客が来るのって迷惑だろ?」

「まあそうだけどね。」

「じゃ頼むよ。お願いだから。」

「しょうがないわね。もう。」

その2分後、部屋に権現京二が静子と一緒に現れた。言葉をなくす一星。

「・・・ (_ _ _ ∇ _ _ _ ;) なんてだよ?」

「知り合いなんでしょ! 1晩くらい部屋で寝かせてあげなさい。可

哀想でしょ！」

「幸村のお母さん、ありがとうございます。何てお礼を言っているのやら。(T◇T) うおおおお！！！」

いかにも芝居じみた演技に一星はため息をついた。

「泣くか叫ぶかどっちかにしろよコラ！」

この光景は肉体的存在のない、いずみも当然見ていた。

権現が部屋に入って来て顔を確認すると、どこか見覚えのある顔のように思われた。

と同時にいずみは一瞬、度肝を抜かれた感覚に陥った。

1、2秒くらいのわずかな時間ではあるが、権現がいずみと目があつたように感じられたからだ。

肉体の存在がないいずみだから、目と目があうなんてことは通常ではあり得ない。

「お、幸村。いいもん飲んでるじゃん。俺の分もある？」

「来て早々、図々しい奴だな。ったくもう。。じゃここで待ってる！」

そう言うで一星はビールを取りに部屋から出て行った。

母の静子も一緒に部屋から退散した。

部屋にひとり残された権現京二を眺めながらいずみは異様な緊張感に包まれていた。

彼は床にあぐらをかいて座り、上着を脱いで伸びをした。

「εー（へ、へ；　ふう。。少し落ち着いたよ。良かった泊まれて。。」

そう言うのと、テーブルに無造作に置かれていたポテトチップスコンソメ味の袋を開けた。

「うん、うまいっ！久々にポテチなんて食べたなあ。。」

この男は独り言をよく言う人間なんだろうかといずみは思った。だが、それはいずみの勘違いであることがすぐにわかった。

「なあ、さっきから突っ立ってないで何とか言ったらどうなんだい？」

権現京二がいきなり鋭い目でいずみの方へ振り向いた。

「えっ・・・？」

「俺と高校で一緒だったろう？栗山いずみ！！」

Σ—11（□；）—1

第16話〜20話

第16話

いずみと権現ごんげん

「なんで？なんであんたが私を見えるわけ？私の声も聞こえるの？」
「ああ。姿形も見える。」

「Σ（・◇・＊エエッ！？姿形って・・・私は鏡にも映らない存在なんだよ？」

「でも見えるんだよ。」

「そんなことはあり得ない。私だって自分の今の顔がわからないのに。」

「そうなんだ？足の先までちゃんと見えてるぞ。」

「そんな・・・信じられない。。私どんな服着てる？」

「すっぽんぽんだ。」

「ガ——ΣΣ（。∩。；）——ン！！！！ウソおおおお？！」

「ウソだよ。」

「（ノ——）ノケッ！！何よ！びっくりさせないで！もうっ！」

「ごめん。俺今、酔っぱだからw」

「じゃあ私は何を着てるの？」

「紺の・・・いかにも地味な会社の事務服みたいだ。」

「それって私が勤めてた会社の制服よ。私ったらそんなの着てるんだ。。」

「コスプレ好きなのか？」

「違うわよっ！私にケンカ売ってんの？」

「別に。思ったことを隠しておけないたちなんだ。」

「それで一体あなた何者？」

「だからお前の同級生だって。忘れてんのか？」

「それは思い出したけど。。そんなことじゃなくて、ひょっとして私がどうしてこうなったのかあなたにはわかってるの？」

「いや、わからない。でもずっと不思議だとは思ってたんだ。」

「ずっとって、いつから？」

「俺がお前と同じクラスになっていたはずだった時さ。」

「???? よくわかんない。『はずだった』って？」

「あ、幸村が戻って来る。もう無視するからな。話せないぞ。」

「ちよっと待って！じゃあ権現君、チャットすることある？」

「たまにはするけどな。」

「良かった。じゃあID教えて。お願い。まだまだ聞きたいことがいっぱいあるの。」

「いいけど、栗山はパソコンに触れることもできないだろうが？」

「そうなんだけどね、それが不思議とネットの中だけは頭の中の文字を流し込むことができるの。」

「(・。・) ほー。不思議っちゃあ不思議だな。」

一星がだるそうに缶ビールを手にとって部屋に戻って来た。

「ほら、飲めよ。つまみはないからな。」

「もう食ってるよ。ポテチのコンソメうまいな。」

「(ノ　　) ノコケッ！！俺のお菓子を許可なく食いやがって！！」

「気にすんなよ。アハハ。」

「お前が言うな！」

「飲んだらすぐ寝るからよ。んで朝になったら帰るわ。」

「当たり前だ！俺だって明日は仕事だ。俺の出勤前にさっさと帰れよ。」

「俺の朝めしは？」

「ナメてんのか？権現(一(；」

結局、この夜は、いずみと権現が再び会話できる余地は全くなかった。

翌朝、一星が起きてトイレか洗面所に出て行った瞬間をとらえて、
いずみは権現に話しかけた。

「ねえ、起きてよ。聞きたいことが山ほどあるんだってばっ！」

「（――）（――）（～〇～）ファ：なんだあ？もう朝かよ。」

「ゆうべの続きよ。私と同じクラスのはずだったって？」

「ああ、その話か。長くなるからまた今度なあ。」

「それじゃ困るのよ！ここまで何年も私、こんな宙に浮いたような
存在で我慢してきたの。もうたくさん！」

「でも話の途中で幸村が来てしまうしさ。」

「じゃ昨日言ったように、チャットのID教えて。今夜ネット上で
話しよう。」

「ああ、わかったわかった。まだ眠いなあ。。。」

「こんな私を見てよく落ち着いてられるわね？」

「なんか俺、昔から霊能力があるってか・・変なものばかり見える
んだ。」

「変なもので悪かったわね！ゞ（ε´）ノ」

「まあまあ、俺が昨日ここに来たのはわさとだから。」

「えっ？」

「確かめに来たんだよ。」

「私がここにいて知ってたってこと？」

「それはわからなかったけど、幸村に何か秘密があるとはずっと思
ってたんだ。」

「じゃなんでもっと早く確かめに来なかったのよ！」

「うちにも家庭の事情とかあったんだよ。卒業してから間もなく北
海道に引っ越したからな。」

「あっ！そう言えば・・権現君、確か同窓会の人に北海道から来
たって言ってたような。」

「やれやれ、やっとわかったか。だから、確かめようもなかったん
だよ。しばらくして、こっちで就職つけてやっとな願の今日にた

どり着いたんだ。」

「念願で・・・意味がよく飲み込めない。もっと詳しく聞きたいわ。」
「いいよ。じゃあ今晚な。IDは・・・・・・」

こうして権現京二は幸村一星宅をあとにした。

いずみは夜まで待ちきれない興奮を味わっていた。自分の存在をわかってくれてる人が見つかった。

まだまだ謎ばかりだけれど、新たな事実も今夜聞けそうだ。

高校時代の権現君で・・・そうだ、やたらとちょっかい出されたような気がする。

だが当時、いずみは彼に全く興味がなかった。他に好きな人がいたからだ。

でもそれは淡い片思いにすぎないことでもあった。

『一体、権現君から何が聞けるのかしら。。あ、それとかずぽんと打ち合わせもしなきゃ。』

第17話

好きの度合い

和代はロビンがONしていないのが気になった。

いつもならポンスケとデートを済ませたその夜すぐにPMが飛んで来るはずだ。

そして和代がデート内容を細かく説明する。

そうしなければ、ロビンとポンスケがチャットをする上で会話がかみ合わなくなる。

おかしいな・・・どうしちゃったんだろ？ロビン。。

内容報告の義務と責任感は強く持っている和代である。

しかしながらデートも4回となると徐々にその気持ちも揺らいで来ているのも事実だった。

それは和代自身が、本当に一星のことを好きになり始めたことに他ならなかったからである。

ロビンがONしないんなら・・・それならそれでいいわ

和代には代理がバレる不安はなかった。むしろ早くバレた方がいいとさえ思い始めていた。

自分がロビンとしてではなく、水口和代として一星と付き合いたい。そういう思いが日増しに募って来る。でも略奪愛は好きじゃない。

ロビンは大事な親友。裏切ることなんてできない。

じゃあアタシはどうしたらいいの？

そう、やはりロビンにちゃんと自分の気持ちを説明してわかってもらうしかない。

でも最後にどちらかを選ぶのはポンスケなのだ。

彼の気持ちがネットのロビンにあれば和代は諦めるしかない。

だが、今の和代には少しだけ自信があった。

和代は部屋で1時間近く、体を微動だにせず考え込んでいた。

報告義務・・・そしてこれからの自分・・・ロビンとの話し合い・・・

とにかくロビンが今度ONしたら、アタシの今の思いを全て話そう。。

和代は一大決心をして、改めてロビンのONをじっと待っていた。だがこの日の夜はどうとう彼女のONがなかったのである。

次の夜、いてもたってもいられなくなった和代は、オフラインメッセージをロビンに送った。

kazupon|v..ロビン、大事な話があるの。ポンスケのことで。返信お願い。

間もなくすると、PM画面が開いてロビンが話しかけてきた。

robin830..昨日はごめんね。急に来客があっけいいろいろと。

kazupon|v..そうなんだ。お客さんが来てたんだ。友達？

robin830..私の友達じゃないんだけどね。

kazupon|v..家族の誰かの知り合いとか？

robin830..そんなところかな。

kazupon|v..今、時間大丈夫？

robin830..実はこのあと約束があるの。まだ1時間あるから今なら平気。

kazupon|v..それって..ポンスケと..だよな？

少し間があいてからロビンが答えた。

robin830..今日は違う人。ちょっと聞きたいことがあって。

kazupon|v..ふうん。。。

robin830..で、私に大事な話って？ポンスケのこと？

kazupon|v..うん。。。

robin830..どうしたの？何かドジったの？

kazupon|v..そうじゃなくてね、アタシ..ロビンには悪いんだけどポンスケのこと本気で好きになっちゃったの。」

robin830..。。。。。

kazupon|v..ロビン聞してる？

robin830…う、うん。。聞ってるよ。

あらかじめこういうこともあり得るだろうとは予測はしていたいずみだったが、こうして和代の口からはっきり言われるとショックは隠し切れなかった。

kazupon|v…ごめんねロビン。でもアタシ自分にウソつけないの。だからあなたに正直に言ったの。

robin830…うん。。かずぼんらしいよ。それはそれでいいと思うよ。でも、もうちょっと待って。

kazupon|v…待って何を？待ったら何かあるの？ポンスケと別れるつもりだったの？

robin830…いえ、そうじゃないの。でも今はそれしか言えない。ごめん。

kazupon|v…そりゃないわよ。それじゃ納得できない。ロビンはポンスケが本当に好きなの？嫌いななの？

robin830…。。好きだよ。。

kazupon|v…じゃあ待ってなんなの？

kazupon|v…それは。。。。

いずみは言葉に詰まって話せなくなった。

正直、いずみにとって一星は好きでも嫌いでもない存在。

いずみが信じて疑わない自分のデジャヴを奪った男。逆に憎たらしいと思ったこともある。

部屋でおいしそうに飲み食いする姿を見るたび蹴飛ばしたくもなかった。

でもそれはそのときの一瞬だけであって、心から恨んでいるわけではない。

チャットで一星と話すようになってから、この環境の変化の糸口をどうにかして見つけようと懸命に彼とコンタクトしてきた。

そんな中で、いずみが凹んだときや辛いときにも一星は常に勇気

付けてくれた。それがどんなに心強かったことか。

好きという感情よりも、一緒にいて安心する存在。

心地良くて、気さくに話せる人。

彼が仕事に出かけると心細くなる。

早く帰って来てほしい。

そう思うこともしばしばだった。

だが、和代のさっきの発言で、いずみの頭が一瞬真っ白になった。

『愛』まではいいかない程度のはずなのに、いざ和代に言われると自分がどれだけ一星が好きだったのかがよくわかった気がした。

robin830.. かずぼん.. やっぱ私もポンスケが好き。別れるなんてできない。

第18話

あの頃の俺たち

一星はロビンとコンタクトできないでいた。

チャットの約束の時間は1時間以上過ぎているのに、彼女の状態表示が入浴中になったままだ。

『長風呂なのは知ってるけど遅すぎるな。。』

一星の脳裏に一瞬だけ疑いの念がよぎる。

『こっそり別な男とチャットしてたりして？まさかな・・・ハハ』

ふと部屋の鏡に映っている自分を見ると、明らかに苦笑している自分がいる。

そんな自分の情けない表情を確認すると、なんだか心の狭さを痛感した。

チャットのロビンとリアルのロビン。。

若干の違和感はあるけれど、目に見えない分だけチャットの方が遠慮のない発言になるのは当たり前だ。

これからデートを重ねる度にきつとリアルでもそうやって来るのだろう。

一星はパソコンの画面から目を離し、ベッドに仰向けに大の字になった。

『そういえば昨日の今頃は権現京二が来てたんだよな。。』

何気にふと彼の名前を思い出すと、一星は一緒のクラスだった頃の学生時代を回想していた。

権現京二・・・成績は拔群だった。でもどこか神経がおかしいと思えるくらい虚言が多い奴だった。

バカと天才は紙一重というが、権現はどっちも併せ持ったような奴。一星が彼をそう思うようになったのはクラスの誰よりも早く、新学期初日で席がとなり同士になった時からだ。

「おい幸村？」といきなり権現京二が話しかけてくる。

「ん？」と一星もぶっきらぼうに返す。

「ああ・・・いるんだやっぱり。。」

「???どういう意味だ?」

「なんかお前、存在感がないんだよ。」

「てめえケンカ売ってんのか?」

一星は熱くなった。初対面でいきなり『お前よばわり』の上、人に向かって存在感がないとは何事かと！

「ごめんごめん。存在を確認したからもういいんだ。」

権現の『ごめん』には悪かったという感情が全くなかったが、一星もいらぬ波風は立てたくないのでケンカに発展することはなかった。

その後、中間、期末テストの成績発表で、権現が学年トップの座に君臨する。

一星にとってはそれもまた気に入らない。口が悪くてマナー知らず、おまけに勉強している素振りも見せずに成績トップなんてふざけた話だ。

きつと隠れて猛勉強してるには違いないのだ。ただクラスメートにはガリ勉しているように見られたくないだけの『ええカッコしい』なのだ。

「俺、生まれつきIQ高いからさ。(@ ^ ▽ ^ @) ノあはははは」と平気で言うところも憎たらしい。

普通、こんな人間は友達一人できないはずだが、勉強を人に教えるのがうまくて、クラスメートからは特に嫌われてもいなかった。逆に女子から「権現君、すごおおい！満点ばかりい！」とチャホヤされるばかり。

「(@ ^ ▽ ^ @) ノあははは。実力実力。」
彼は徹底して謙遜などしなかった。

彼の様子が少し変わって来たのが夏休みも終わった2学期からだ。った。

席についている一星が何気にとなりを見ると、権現と目と目が合った。

普通、目と目が合うと視線をそらすものだが、彼は真顔でじっと一星を見ていた。

「なんだよ？どうかしたのか？」

すぐにその返事が来た。

「幸村、お前、1学期より薄くなってる。」

「はあ？？」

「薄いと言っても髪の毛のことじゃないからな。(≡▽≡)ぶあつはっはっ!!」

突然、ひとりウケする権現。

「わけわかんねえって！何が薄いんだよ？」

「お前全体だよ。不思議なんだけどさ、お前が透けて見えるんだ。」

「(□□;)!!お前何言ってるんだよ？バカか？」

「いや、俺は秀才だw」

その会話を聞いていたまわりのクラスメートも不思議そうに権現を見ていた。

一星はすかさず彼らに話しかける。

「俺が透けて見えるんだってさ。みんなにもそう見えるのか？」

「いえ別に。」女子のひとりが不安そうにまわりを見ながら答える。

「良かったな幸村。まわりにはまだ存在感があるようだぞ。」

再び1学期のときと同じことを言う権現。

だが今回の一星は腹が立つことはなかった。むしろ彼に哀れみを覚えた。

そしてクラスの誰もが権現京二の度重なる虚言に対して不審に思うようになっていた。

そして権現京二の言動の中には、常に出てくるひとりの女子の名前があった。

そう・・・『栗山いずみ』

当時、彼はしつこいくらいにこの見知らぬ女性の名前を口にしていった。

「このクラスに何で栗山いずみがないんだ？みんな知らないのか？」

もちろんそんなこと聞かれてもないものはいない。

一応、全クラスを調べてもそのような名前の子はいなかった。それでも権現は生徒ひとりひとりに真剣な顔で聞いてまわる。

「栗山いづみを本当に知らないのか？」

「お前は栗山いづみと仲良しじゃないか？何で知らないんだ？」

「栗山いづみは俺とトップを争ってたんだぞ！覚えてないのか？」

そして一星にはこう言った。

「お前、栗山いづみをどうしたんだ？」

当然一星は「マジで知らねえよ。ウソついたって意味ねえじゃん。」と答えるくらいしかなかった。

彼の様子が日増しに変化して来るのがわかった、当然担任にもその情報が伝わった。

そして彼はしばらくしてこの学校から転校して行った。

噂では北海道のどこかの施設に入ったという話だったが、人から伝え聞いたことなので詳しくはわからなかった。

そして数年の歳月がたち、何とカラオケでバツタリ権現と出会い、そして迷惑なことに家に1泊させてしまったのだった。

「もう奴とは関わるのはこりごりだ。。。」

一星は深いため息をつきながらベッドからパソコンの画面を眺めた。

まだロビンは入浴中の表示だ。

「今日は・・・もいいや。寝よう。。。」

一星はロビンにPMを飛ばす。

pon suke..今日は何か疲れたから先に寝るよ。おやすみロビン。チュ(＊＾3(＊一。一)

事実の確認

栗山いずみはチャットの親友、水口和代に自分の気持ちを言って自らオフラインになった。

「かずぽん・・やっぱり私もポンスケが好き。別れるなんてできない。」

そう言ったあと、和代の返答も聞かずにいきなりチャットを閉じた。

怖かった。。彼女の次に返って来る言葉がとても怖くてたまらなかったのだ。

和代の告白を聞いて、初めて自分もポンスケを好きであることに気づかされた。

私だっとかずぽん以上に彼が好き！付き合ってる年月からして違う。

私はいつも彼の生活にまで密着している。誰よりも私が彼のことを知っている。。

それに彼はこの不可解なデジャヴ現象に何らかの関わりがあるに違いない。

かずぽんなんかを彼を渡すわけにはいかない！

権現と約束していたチャットの時間が迫って来ていた。

一星も自分のパソコンを立ち上げ待機している。

ごめんねポンスケ。。今日だけは許して。。

いずみは自分の状態表示を入浴中にした。

彼女自身は形を持たない存在なので、もちろんキーボードなど打

てない。

でもなぜかネット上の操作だけは頭で思ったことを文字にして送ることができた。

間もなくして、権現京二のオンラインをいずみの思考が確認した。彼女の脳の中ではすでに京二のIDを登録していたからだ。

robin830…いずみです。もう話せる？

gongen…なんだ。栗山か。ロビンで誰かと思った。なんでそんな名前にしたんだ？

robin830…昔の子供番組に出てたのよ。ロビンちゃんて。gongen…知らんなあ。

robin830…『がんばれロボコン』で知ってる？

gongen…それ大昔のテレビじゃん。いくつだよお前！

robin830…あなたと同級でしょ！いいじゃない。再放送で観てたのよっ！

gongen…ところで栗山、お前大丈夫なのか？そばに幸村いるんだろ？

robin830…いるよ。パソコンの前に。

gongen…（□；）！！ええっ？じゃこの画面見られてるじゃんかよ！

robin830…それが大丈夫なのよ。この画面は私の思考の中に流れてくるみたいだから。

gongen…（。。）ほー。お前、すごいことできるんだな。いつ覚えた？

robin830…それが偶然なの。ポンスケ・あ、幸村一星のことね。彼がチャットに目覚めて人と話し始めたのね。

gongen；ふむふむ。

robin830…で、そのうちにチャットを利用してファイルとか友達に転送するようになったの。

gongen…ああ、俺もたまに人からもらうけどなw

robin830..それで私が気づいたことは、ファイルなんて物理的なものでもないのに、ちゃんと人に渡るじゃない？

gongen..ははあ、そうか。ここなら人とコンタクトできると思ってたやってみたわけだな？

robin830..そう。そしたらできちゃったのよ。思考の中でね。

gongen..転送は試したのか？例えばお前自身が転送されて俺の部屋に来るとか。

robin830..考えたことはあるけど、まだ怖くてしたことないわ。

gongen..今度やってみろよ。うちに来てみる。

robin830..そのうちね。今日はそんな問題じゃないもの。なぜ私がこうなったかよ！

gongen..それを知ってたら俺は高校時代、無理矢理転校させられなかったさ。

robin830..どういうことなの？

gongen..俺とお前はクラスメイト。俺と幸村もクラスメイト。でもお前と幸村はクラスメイトじゃないってことさ。

robin830..私はずっと前からデジャヴの歯車がどこかで狂ったんじゃないかって思ってるんだけど。。

gongen..デジャヴか。。人は同じことを何度も繰り返して生きてるって説だな。それもどうかなあ。。

robin830..なんで？ほかにどんな説明がつくの？

gongen..それはまだわからないけどさ、だって俺はお前と一緒にのクラスだった記憶もあるし、幸村との記憶もあるけどさ・・

robin830..うん。。

gongen..それ意外は同じことを繰り返して来た記憶が全くないのさ。デジャヴだったとしたらおかしいだろ？

robin830..なんとも言えないわよね。。

gongen..お前が高校にいたときには、幸村の存在はなかった。

でも幸村がいる今はお前の存在がない。。。

rob in 830..私の生まれ代わりがポンスケなのかなあ。。？

gon gen..生まれ代わりなら時代は未来に行ってるはずだが。

rob in 830..そうなのよねえ。。。わからないわ。。

gon gen..今、幸村はまだパソコンの前なのか？

rob in 830..いいえ。ベッドで仰向けになってるよ。なんかボーッと考えてるみたい。。

gon gen..のんきな奴だ。で、俺たちこれからどうするよ？

rob in 830..とにかくこうなった原因をつきとめたい。私が高校に通ってたときは、あなたは転校なんてしなかったわよ。

gon gen..ああ。わかってる。お前と一緒にのときは卒業してから引越したが、幸村と一緒にのときは転校している。俺には高校入学から二つの記憶があるんだ。

rob in 830..じゃあ、私が存在してたときのあなたの記憶って、どこまであるの？

gon gen..そうだなあ。。一緒に卒業して。。お前はちっぽけな会社に就職して。。

rob in 830..ちっぽけで悪かったわね(^ | ^ ;)

gon gen..その後、同窓会でまた会って。。

rob in 830..そうそう。それは私も覚えてる。あのときあなたと何か話したよね？

gon gen..俺は。。あのとき。。。お前に好きだって告白したんだ。。

rob in 830..Σ(ー◇ ー ＊エッ！？そうだった？あのときすごく酔っ払ってたから覚えてない。(^ □ ^ ; A

gon gen..(ノ | し) ノコケッ！！

rob in 830..で、一体いつまでの記憶があるの？自分が年を取って死ぬまでの記憶があるの？

gon gen..それはないな。今のリアル年齢での記憶だけだ。来年になれば、そのときに過ぎた新しい記憶が現れるんだ。お前だ

ってそうだろう？ババアになって死ぬまでの記憶があるのか？

robin830…いえ、ないけど。。（一）；

gongen…だろ？お前と俺は同じだよ。ただ、俺は形ある存在だけだな。

robin830…憎たらしいこと言うわよねあなた。

gongen…まあまあ、俺だって真実を確かめたくて幸村んちに行っただ。お互い協力しようや。

robin830…う、うん。。。

第20話

あとへは引けない

『アタシがちょっと甘かったのかもしれない。。。』

和代は自らを反省した。

ロビンに比べて自分はリアルでデートしているわけだから、立場は断然有利。

ポンスケの心は自分になびき、そして正直にロビンに話せば半ば諦めてくれるものかと思っていた。

でも結果は違った。きっとロビンはポンスケを譲らないだろう。

和代がロビンに宣戦布告したようなものだ。互いの友情も崩壊するかもしれない。

『でも、元はロビンが巻いた種。だったらアタシに代理なんで頼まなければ良かったのよ。』

和代はロビンと中途半端なチャットに終わったことに不服だった。自分だって言い返したいこともあるのに、ロビンは聞こうともせずにおフラインになった。

一方的でとにかくむかつく。翌日になれば冷静になれると思ったが、

憎しみは増すばかりになっていた。

このままでは今夜もとても眠れやしない。

和代はロビンにオフラインメッセージを入れておくことにした。

k a z u p o n | v .. アタシもポンスケが好き。ロビンはネットだ
けでいいんでしょ？

アタシはリアルで会えるし彼に本名も言える。

あなたにはできないでしょう？

彼だってリアルな付き合いを望んでる。

ロビンと彼がネットのままで付き合い合っても長くは続かないと思う。

ここで和代は一旦送信して考える。

そして新たな決意の元、再びメッセージを書き込む。

k a z u p o n | v .. 今度のデートで彼に本当のことを言います。

アタシが今までロビンに成り済ましてたことをね。

そして正直に謝るの。アタシにもリスクは大きいと思う。

アタシがロビンじゃないとわかったら彼の気持ちは。。。

でも絶対必要なことだから告白します。

その上でもし彼があなたを選んだならアタシは諦めます。

何より最後に決めるのはポンスケだし、彼の気持ちを尊重するつもりです。

このあと和代は送信ボタンを押した。

時間が経つに連れ、和代は今まであった自信が徐々に消えてゆくように思えた。

腹いせの興奮から、勢いで書いたメッセージだったが、やや冷静になると不安の方が大きくなってくる。

『やっぱりアタシは不利なのかな。。』

ネットとはいえ、ロビンは彼と1年間の交際期間がある。
それがすぐに断ち切れるとも思えない。

しかしながらロビンが犯した罪も重い。ポンスケがこの事実を知
ったら逆上するかもしれない。

ロビンと彼が大喧嘩をして、二人の仲は急速に冷めるかもしれない。
い。

『もしそうになったら・・・アタシが有利。。』

一瞬そう思った和代だったがすぐに自らを反省する。

「アタシってやらしい。。人の不幸を期待するなんて意地汚いわ。。」

なんとも煮えきらぬ思いのまま、この日はすぐにパソコンの電源
を落として就寝の準備をする和代であった。

（続く）

第21話〜25話

第21話

5度目のデートにて

この日の二人は映画デート。和代が以前から観たかった映画だ。劇場公開も明日までに迫り、しかも今日が月1の映画ファン感謝デーだ。

男女共に一律オール1000円の日なのだ。

こんな日に自分がロビンの代役だということを一星に告白しなければならいなんて、あまりにも酷だと和代は思った。

でも大好きな映画は外せない。もう公開が終わってしまおう。

ならば彼に打ち明けるのは次のデートにしようかとも考えた。が、そうなるとロビンに絶対何らかの先手を打たれる。

『この恋は譲れない。やっぱり今日しかないんだ。』

和代は自分に言い聞かせて今日のデートに望んだ。

「ポンスケはアクション映画が好きなんだよね？ごめんね。恋愛映画で。」

「それは全然平気なんだけどさ、ロビンが韓流映画が好きだったとは知らなかったよ。」

「い、言ってなかったかしら？（――）；」

「歴史ものが好きだとは聞いてたけど。」

「そ、それも好きだけだね。。（へ―へ；）」

ロビンについての情報をそれほど知らない和代は、彼女が歴史映画が好きだという事実を初めて知った。

「ある意味、この映画も少し歴史的背景があるのよ。きっと泣かせてくれると思う。」

「なるほど。じゃあ泣きたいときには遠慮なく俺にすがっていいよ
w」

「うん。ありがとう。ポンスケに甘えちゃうね（#へ・へ#）」
「おいでおいで（ー、）フフ・・・」

この映画を観た和代の友達の話によると、最後はめでたく感動の
ハッピーエンドになるらしい。ポンスケの心にもきつと影響を与え
るに違いない。

『そのあとにアタシが彼に本当のことを打ち明ければ・・・』

そう、和代は心理的確率を狙った。泣くほど感動した後は、そばに
いてくれるパートナーが1番いとおしくなるはずだ。

告白した後も、ロビンより少しでも自分側に気が向いてくれたら。
。

和代は切実にそう思っていた。

上映が終わり、館内は感動のラストシーンで、すすり泣きのオン
パレードだった。

和代も溢れる涙をハンカチでぬぐっていた。だが、予想だにしなか
ったことは、一星が泣きじゃくって鼻水を垂らしながら和代にすが
って来たことだ。

「（T◇T）えぐっえぐっ・・・ううっ・・・うっうっ・・・泣けるわこ
りゃあゝ」

「アタシも感動したけどポンスケも随分感激屋さんなんだね。」

「悪いけどロビン、ティッシュあるかな？」

「うん、あるよ。はい。」

「さんきゅ。」

ブミッ！！チーン！チーン！

勢いよく鼻をかみ、顔に涙の筋がついた一星に驚くばかりの和代。できれば本当は自分が彼にすがりたかった。でも現実はその逆で、和代は一星にすがられている頭を『よしよし』と撫でるしかなかったのである。

エンドロールも全部流れ終わって、二人は外へ出た。

「泣くと腹減っちゃうよな？何か食べよっか？ロビン。」

「うん。。でもその前にちよつとその公園を散歩しない？」

「いいけど、あんまし腹減ってない？」

「そうじゃないけど。。実はね、今日は・・・大事な話があるの。。」

「??じゃあメシ食いながらってのはダメなのかい？」

「・・・・」

一星は言いづらそうにうつむく和代を見て、彼女が真剣に何かを話したがっていることを察知した。

「ロビン、向こう側はひと気が少ないからそっちのベンチで話そう。」

「

「うん。。」

第22話

夕暮れ時の公園で

幸村一星と水口和代はひと気の少ない公園のベンチに座って少しの間、沈黙を保っていた。

『何か深刻なことでも話すんだろうか。。』一星に一抹の不安がよぎる。

一方、和代も事実を言おうと決心はしていたものの、いざこの瞬間になると、第一声をどう話せばいいのか言葉がみつからない。

「あの・・ポンスケに言わなきゃならないことがあるんだけど。」
「うん。。一体何なんだい？」

「実はね・・アタシ・・アタシ・・」
「?？」

「ポンスケのことがすっごく好きなの。」

「は? あ、ああ・・ありがとう。でもそれって初めて言うことじゃないじゃん？」

「そうかもしれないけど。。」

「チャットから知り合ってもう1年以上経つんだし、お互い好きなのは何度も確かめてるだろ? 本当に言いたいことは別にあるんじゃないか？」

「(。。;) / ギク！」

凶星だった。本題はこれから先に言うことだ。でも彼に向かってまともに好きだと告白したのは和代にしてみれば初めてのこと。

そしてどうしても先に言うっておかなければならないことだったのだ。

一星は思った。彼女はとも言いづらそうにしている。だったら自分から先に何か話そう。そしてロビンにもっと話やすい雰囲気を作ってあげよう。

彼は和代が次の言葉を言う前に、自ら話し始めた。

「俺はね、ロビンと今こうして一緒にいる瞬間が1番楽しいんだ。」

「ほんとに？」

「ウソなんか言わないさ。会ってイメージが違ってたなんてことはなかったしさ。」

「そう。。。」

「でもロビンのしゃべりはネットの方がもっとズケズケ言ってるよなw まあ顔が見えないと誰でもそうだし。」

「ネットのアタシとリアルのアタシとどっちがいいと思う？」

「そりゃリアルに決まってるじゃん。ちゃんとこうして目と目で話せるし、ロビンの笑顔は自然で可愛いよ。」

「（＊v・v）ポッ。目の前で言われるとなんか恥ずかしいよお。」

「俺はロビンが益々好きになったんだ。ネットでは伝わらないロビンのしぐさや優しさってのが伝わるんだ。」

「もう・・褒め殺しねw 何もプレゼントするものないよ!」

「いや、今一緒にいる時間を共有できるだけで充分さ。」

「ボンスケってそんなにキザなことを言う人だったっけ？」

「知らなかったか？w 俺はちょいキザだ。」

「（oへへo）ウフツ。じゃあやっぱりリアルのアタシの方がいいってことよね？」

「随分こだわるんだな？てか、どうして1年もリアルで会わなかったのか知りたいくらいだよ。」

「それは・・・」

「わかるよ。得体の知れない男に事件に巻き込まれたら大変だって思うのも。会うまでかなりの勇気が必要だったんだろうし。」
「。。。。」

「俺も最初はロビンとの取り決めの通り、ネットだけの関係でもいいと思ってた。それで満足してた時期もあったよ。」

「それがなぜ急に？」

「急にじゃないよ。ロビンを好きになればなるほど、会いたくなるのは人間の本質的なことだろ？」

「そうだけ。。」

「だってさ、顔も知らないのに俺はロビンの魅力に惹き込まれていったんだぞ。」

「どんな魅力があったの？」

「そうだなあ。ログが勝気なところもいいんだけど、やっぱり会話のフィーリングだな。」

「ふうん。。」

「今も鮮明に覚えてるよ。チャットの音楽部屋で初めてログに参加してさ。わけのわからない俺をロビンがいろいろなルールを教えてく

れて。。」

「。。。。。」

「そして雑談してるうちに共通の趣味があることがわかったり、一緒にチャット巡りしたりゲームしたりしてさ。」

「。。。。。」

「俺が風邪で寝込んでるとオフメにめっちゃ励ましの言葉入れてくれたときもすっげえ嬉しかったんだ。」

「そう。。。」

「たまには気合の入るようなビビる言葉もあったけどさw でもその全てが俺には貴重なんだ。」

「。。。。。」

「この1年、その積み重ねがあつてこそ、今の瞬間がある。やっぱキザだな俺w」

「そんなことないよ。。。」

「だから俺はネットで知り合ったときから変わらない気持ちでロビンのことが大好きだ。」

和代は何も言えなくなってしまった。言えるはずもない。

『ネットの話は自分のことじゃない。彼はネットのロビンが好きだからこそ、今のアタシが好きなんだ。』

理屈ではわかっていた。だからこそ、ここで事実を打ち明けてネットのロビンと自分を切り離して考えて欲しい。

和代は切実に思っていた。でもそれでは自分に勝ち目がないことも確信してしまった。

このままロビンの代理としてウソをついていれば、ポンスケとデートが重ねられる。

『彼と別れたくない。。本当のことなんて言えない。。でもロビンに先手を打たれて先にネットで彼にばらされるより。。』

和代は沈黙したまま悩み苦しんでいた。

一星も和代の様子の異変に気づき、優しく話しかける。

「どっか具合悪かったのか？それともそんなに俺に言いづらいことがあるのか？」

「(T□T) ええええええええん!!!」

和代が突然大声で泣き出した。

「ロビン、どうしたんだよ？」

「アタシ、苦しい。やっぱりもうダメ！耐えられないよぉ。」

第23話

もどかしさの中で

一星と和代がデートをしている間、いずみはとても落ち着いていられる状態ではなかった。今回は今までの代理デートとは違う。和代は自分がロビンでないことを告白してしまう。よっぽど昨晚、チャットで先に言おうと思ったが言いきれなかった。ずっとウソをついていたことで、一星の逆鱗に触れる恐怖・そして何よりも好きな人に嫌われる苦しさ。それを思うとどうしても話せなかったのだ。

彼を好きだとはつきり気づいたのは和代のおかげでもある。

彼女が一星への思いをいずみに言わなければ、こんな形にはならなかったかもしれない。

『きつとかずぽんだって事実を言うのは難しいはずだわ。。ひよつとしたら私みたいに言わないかもしれないし。』

そんなささやかな希望を持ちながら、いずみは一星の部屋をせわ

しなく徘徊する。

そして一刻も早く、ポンスケが帰宅するよう願った。

『もし、かずぽんが本当のこと言ったら、彼はどのような選択をするんだろう。。』

いずみの思うことも最もである。果たして一星は、ロビンこと、栗山いずみを選ぶのか？それともリアルデートで意気投合した和代を選ぶのか？または、激怒のあまりどちらとも絶交してしまうのか？そう考え出すといずみの心境は今にもパニくりそうだった。

それにしても前から不思議なのは、いずみがこの家から出られないことだ。出ようとしても見えない壁に跳ね返される。

そのおかげでデート現場の様子も見れないし、当然外の世界もわからない。

まさに今のいずみはストレスの塊。精神的にも疲労困憊であった。

『一体今の私って何なんだろう？何でこんな目に遭わなきゃなんなの？原因は何？この家？それとも土地？』

不意に勢いで口走ったこの言葉にいずみはハッとなった。

『そうよ。。ポイントはこの家だわ。私が住んでて学校にも会社にも通ったこの家。。』

いずみはこの家に何かの原因があると直感的に根拠もない確信を得た。

彼女は一星の部屋から出ると居間に向い、見慣れた家具を眺めた。何がどうということもない。いつものままだし、変なものもない。

次にキッチンへ行くとそこには一星の母、静子がいた。

最近体の調子が悪いのか、静子は昼のパートをやめていた。

一星の父親である夫は20年ほど前に病気で他界していて、生活の基盤は一星の稼ぎと夫の生命保険だった。

静子はキッチンにいるものの、片付けをするわけでも料理を作るわけでもなく、ただ一点を見つめてボーッたたずんでいる。

いずみから見ても明らかに静子の様子は変だった。というよりも、最近の静子はよく考え込むことが多くなったように思われる。

何か重い病気でも隠してるんだろかといずみは考えたが、ある一点だけをじっと見つめ続けて気をとられている静子を見ると、何か別な秘密があるのではないかと思いついた。

そしていずみは何気に静子の目線の先を追いかけてみる。

『あっ！！！えっ？何・・・？』

いずみはこのあと更に仰天することになる。

第24話

ロビン MY LOVE

幸村一星はまだ頭の中の整理がついていなかった。

和代に公園で衝撃的な告白を受けた帰り道。ただ呆然と舗道を歩いていた。

不意に今来た道を振り返ってみる。でも彼女の姿はもうない。

さっき彼女が言った思いも寄らない言葉。

「アタシ・・・本当のロビンじゃないの。。ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

泣きながら真剣に言う彼女の言葉に『冗談だろ?』などと言える
空気すらない。

ただ、どういふことか全く理解できなかったので、事情の説明を求
めるしかなかった。

でもそれは一星にとって、非常にショックな現実を決定的する瞬
間でもあった。

「アタシ・・水口和代って言います。ロビンとはネットの親友でし
た。」

「・・・な、なんでこんなことに。。。」

「ロビンに頼まれたんです。。ネット以外ではどうしても会えない
からって。」

「・・・ロビンが君に代わりをしろと?」

「はい。。。」

「でも信じられないよ。君の声はまさしくロビンの声じゃないか!
ボイスチャットのとくと同じだ!」

「でも・・似てるけど全てが一致してるわけでは。。。」

「まあ細かく言えばそうかもしれないけど・・・本当に君はロビン
じゃないのかい?」

「はい。。。」

一星が舗道を歩きながらしばらく思い返して見ると、幾分か冷静
さを取り戻してきた。

さっきまで信じられなかった事実が少しずつ受け入れられるようにな
っている。

小さくて細かいこと・・今までは気にも留めなかったことが今にな
ってみると『なるほど』と思えること。

●ネットのロビンとリアルのロビンでは声の高さが微妙に違った

●ロビンが大嫌いの大根をリアルデートでは平気で食べた。

●テト（ペット）のことなど、リアルデートの話をネットのロビンにしてもかみ合わない

●自分の呼び方のこと。ネットでは『私』 リアルでは『アタシ』

●ネットのロビンはやや強引ではっきりものを言うが、リアルでは全く感じられない

軽くこれだけの相違点が出てきてしまった。

こんなあら捜しをすればするほど、惨めな気持ちになってゆく一星であった。

でもデートの最後に念を押されるように和代から言われた言葉が心に引っかかる。

「アタシ・勝手かもしれないけど、本当にポンスケが好きになっ
てしまったの。」

「えっ？」

「これは絶対ウソじゃないの。さっきも言ったけどロビンとしてじやなくて、和代としてポンスケが大好き。アタシはいつでもリアルで会えるし付き合っていける。」

「・・・」

「だからポンスケともっと話しもできるしデートもできる。二人の時間を共有できるの。悪いけどこれはロビンには絶対できないと思う。」

「・・・なぜそう思うんだい？」

「最初はアタシだって代理はイヤだって言ったの。でも彼女がアタシにすぎるような思いで訴えるものだから。」

「そっか。。。」

「ごめんなさい。。。」

「まだ俺は君がロビンじゃないなんて今の時点では考えられないんだ。」

「そう・・・よね。。。」

「ちょっと考えさせてくれ。」
「うん。。」

こうして公園から別れてきたわけだが、一星の脳裏は目まぐるしく思考回路が作動していた。

ロビンのウソには腹が立つ。共犯の和代にも憤りを感じる。

その一方、そこまでして正体を見せないロビンとは一体何者なのかという新たな好奇心も生まれてくる。

そしてやはり、ネットといえど、1年という交際期間の中で、好奇心以上にロビンに対する愛情が勝っているのも事実だった。

では水口和代に対してはどうなのか？自問自答してみる一星。

ロビンだと思って付き合っていたとはいえ、話しやすくて落ちつけるし、彼女と会っていると癒されることもあった。

笑顔がさわやかで華奢で守ってあげたくなる。これは実際会ってみたいと感じることのできない感情だ。そんな彼女から一星は好きだと告白されているのだ。

「俺は一体俺はどうしたらいいんだろう。。」

大好きな彼女がある日突然、実は二人だったなんて急にわかっても、すぐにどちらか選べるはずもない。

大好きなのに。。ネットのロビンもリアルの彼女も本当に大好きなのに。。

「なんでこんな変な理由で悩まなきゃなんないんだよ。。ちくしよー！！」

公園からずっと歩き続けていると自宅が見えてきた。5キロは歩いたかもしれない。

とても空腹になっていた。本来ならロビンと食事する予定だったが、公園での出来事でそのままお開きになってしまったから食べられなかった。

「母さんが体調良かったらなんか作ってもらおう。」

一星は玄関の扉をだるそうに開けて中に入った。

第25話

動き始めた真実

人の目には見えない存在の栗山いずみ。

もう何年もの間、何の進展もないまま、ただ時間だけが流れたいた。いずみにとっては気が遠くなるほどに長い長い年月だった。

肉体のある者は睡眠時間を必要とする。1日24時間の中で6〜8時間程度は知らずに時間が通過する。

だが空気のような存在のいずみには睡眠や食事の必要性がない。世の中が寝静まっている真夜中が、いずみにとっては辛い孤独な毎日だった。

それが今になってようやく何かが進展しようとしている。

時の経過がすごく速く感じられるようになっていた。

『こんなに難題がいっぺんに出てくるなんて。。苦しいだけだわ。。』

いずみがそう思うのも無理はない。

この数日でいろんなことが起き過ぎた。

まずは、一星との関係に和代が宣戦布告してきたこと。

権現京二の出現とその謎。

一星の母、静子の不可解な行動。

そしてキッチンで見た不思議な光景。

このひとつひとつがいずみを必要以上に悩ませる。

何から考えればいい？ いや、なにひとつ後回しにはできない。。

「ただいまあ。母さん腹減った。」

いずみの心が揺れ動く中で、一星が和代とのデートから帰宅した。一瞬、緊張感が走る。彼はどんな表情でこの部屋に入ってきて来るんだろう？

一星はすぐに部屋には来なかった。どうやら食事をしているらしい。

食器がカチャカチャする音が遠くから聞こえた。

姿の見えないいずみがその様子を見に行くのは簡単なのだが、今日はそんな勇氣はなかった。

家で食事をするということは、彼はかずぽんとデートで食事を共にしていないということ。やはり彼女は自分が代理だということを話してしまっただといずみは確信した。

部屋でひとり待つ身は長くて辛い。とにかく今日のデートはどんな展開だったのか知りたい。だが今やライバルのかずぽんに内容を聞けるはずもない。

このあと、ポンスケは自分とチャットしてくれるだろうかと不安になる。

もし話してくれたとしてもいずみには謝ることしかできない。それで彼が許してくれる保障もない。高まる緊張の中、それでもいずみは彼が部屋に戻るのを心待ちにしていた。

一星が帰宅して1時間ほど過ぎた頃、彼はようやく自分の部屋に入ってきた。むろんいずみが常時いる部屋でもある。

なんだか疲れたような顔をしているなどいずみは思った。

片手に缶ビールを手にして、タオルを肩にかけてすっぽんぽんのままベッドに腰を下ろした。

一星が風呂上りに全裸のまま部屋で30分ほど過ごすのはいつものこと。

昔は目のやり場に困っていたいずみも、今では当たり前のように体全体を凝視できる。

『ポンスケ少し太ったかな。。ビール腹になってる。。』

一星は缶ビールを開けて一口すすると、一度ためらってからパソコンの電源を入れた。

そしてため息をつきながらも一口ビールを飲む。

『彼はすでに本当のことを知っている。きっと私に問いただして来る。。』

そう思っていずみはひたすら謝る覚悟を決めた。

それなのに一星は、メッセンジャーだけ立ち上げると、ベッドに戻って仰向けに寝転がった。

両手を頭の後ろに組んで天井を眺めている。その天井にも一星の大好きな『ほしのあき』のポスターが貼ってあるのだが、別にそれを見ているようでもない。

きっと彼もショックが大きすぎて、気持ちの整理をするのも大変なのだろう。

いずみは自分からメッセンジャーで一星に話しかけてみることにした。

robin830…ポンスケこんばんは。今いる？

いずみも同じ部屋にいるのだから、彼がいるのは当然わかっているものの、一体どんな反応を示してくれるのか気になって様子を伺っていた。

一星はすぐにPM画面が開いたのには気がついたが、ベッドから起き上がって返信しようとはしなかった。

ただ横目でモニターをうつろな目で見続けているだけの状態。

『彼は怒っている。。そして失望している。。』

いずみも苦しかった。大好きだと気づいたときにこんなことになるなんて。。

確かに最近まではそれに気づいていなかった。自分がこんな存在から脱出するために、彼をどうにかして利用できないかとばかり考えていた。

自分のデジャヴを奪った男。憎いとさえ思うこともあった。ネットで近づいたのも、この不可解な現象の原因を彼を通して徐々に探っていくためだった。

それなのに。。。人間の心とはモロいものだ。そんな感情が知らぬ間に愛情に変わっているなんて。。

robin830…ポンスケごめんね。。全て私が悪いの。許してもらえないかもしれないけど、何度でも謝ります。本当にごめんなさい。

一星はこのログをじっと見つめていた。でもまだ動こうとはしない。

robin830..でも私、ポンスケと会うことはどうしてもできないの。こんなに大好きなのに・・会えないの。理由を話してもわかってくれるとは思ってないけど・・私の気持ちにウソはありません。これだけはわかって下さい。

ここで一星が動いた。

ponosuke..信じられなかったけど、やっぱり本当に俺は騙されてたんだな。

robin830..ごめんなさい。。。

ponosuke..そこまでして俺に会いたくない理由って何なんだ？ 顔に自信がなくなたって俺はそんなことを気にする男じゃない。見くびるなよ！

robin830..そんなことじゃないの。。

ponosuke..もしもだ！もしも俺がその理由を聞いたとしたら、今以上に俺が怒るとでも思ってるのか？

robin830..そうじゃないけど。。。

ponosuke..俺もロビンが好きだ。でも会えない辛さが続くなら・・もう耐えられないと思うんだ。

robin830..かずぽんと付き合うってこと？

ponosuke..それもわからない。いい子だとは思うけど彼女だって共犯だからな。

robin830..あの・・確かに私が一方的に悪いけど、言いたくても言えない理由があることはわかって。私も苦しいの。

ponosuke..そうやって何か秘密があるとわかっていながら平然と付き合えるはずじゃないか。

robin830..ネットの世界はみんなお互いに秘密だらけよ。

ポンスケは相手の全てを知らないダメなの？

ponosuke..ああ、ダメだね。お互い隠しっこなした。ネット友達ならまだしも。。

robin830..そうなんだ。。。

ponsuke..俺は好きな人には隠し事はしないよ。絶対に！

一星のこの言葉にカチンときたいずみだったが、それと同時に突然あることをひらめいた。

robin830..じゃあ聞きますけど、ポンスケんちのキッチンの床下って何があるの？

ponsuke..（。へ。）はあ？何だそりゃ？

robin830..隠し事しないんでしょ？

ponsuke..ってか、ロビンさ、うちに来たこともないくせによ。言ってる意味わかんね。

robin830..権現君ごんげんから聞いたのよ。

ponsuke..Σ（ー◇ー＊エエッ！?? あいつと知り合いなのか？

robin830..チャット仲間なの。この前、ポンスケの家にあがったって。

ponsuke..そうだったのかぁ。世間で意外と狭いもんだな。

でもあいつをキッチンに入れた覚えはないぞ？

robin830..権現君が帰る朝、ポンスケのお母さんがトースト焼いて彼に食べさせたって言ってたわ。

ponsuke..そうか、そのときにキッチンに行ったのか。。母さんも体調悪いのに余計なおせっかいしたもんだ。

robin830..で、キッチンの床下のことは？

ponsuke..知らないよそんなの。床下はキッチンマットが敷いてあるだけだ。

robin830..その下よ。

ponsuke..それが何だってゆうんだ？

robin830..権現君がね、そこから細い光が差してるのが見えたって言ってたの。

ponsuke..アホか。ただの床下収納庫だろ。そんなのやつ得意の妄想さ。

robin830..じゃ本当に知らないのね？

ponsuke..知るも知らないも、それがロビンとどう関係あるんだよ？

robin830..わかったわ。変なこと聞いてごめんなさい。

ponsuke..それよりロビンの秘密の方が100倍知りたいよ俺は。

robin830....わかったわ。

ponsuke..(・|・)エッ.....??

robin830..今は無理だけど..いつかそのうち必ずポンスケに全てを言う時が来るかもしれない。

ponsuke..なんだよその言い方。。怖いじゃんか。。

robin830..だからお願い！かずぽんとだけは付き合わないで！！お願い！

ponsuke..なんだよ急に。。。

ただひたすら謝ろうと決めたいずみだったが、結果的には強気な自分を引き出してしまった。でもそれが功を奏したのか、一星はいずみとしばらくチャットを続けることにしたのだった。

ただし、恋人は一旦解消。隠し事をされたまま付き合うのはどうしても辛いという一星の気持ちちが反映された。今後は一友達として当分ネットだけの関係で進むことになる。

(続く)

第26話〜30話

第26話

アピール

それは突然の出来事だった。

いずみと一星の関係が恋人から友達になってから数日後、彼は自分の部屋に一人の女性を連れ込んで来た。

「あんまり片付けてないけど気楽にしていいいから。」

と言う一星の表情にはあまり余裕がなさそうに感じられる。

よほど緊張しているらしいといずみは見取った。

いずみが知る限りでは一星が自分の部屋に女の子を入れることなんて今まで1度もなかったことだ。

そしてこの女性は一体誰なのか？いずみの嫌な予感的中したのはその数秒後。

「ポンスケ、このパソコンで毎日チャットしてるんだね。」

この自分に似た声を聴いた瞬間、彼女がかずぽん本人であることが完全に立証された。

『Σ（□；。。。そ、そんな。』

いずみには強烈なショックだった。

かずぽんだけは付き合わないでと言ったのに。。。

それがなぜこんなことになるんだろう？

よく見ると、かずぽんの顔はやや丸顔だが、優しそうな表情で可愛いらしい。

同姓から見ても決してイヤミな人間には思えない。

それゆえ尚更、いずみにとっては悔しさと悲しさが入り混じった感情が沸々と沸いてくる。

「ポンスケ、今日は大胆だね。いきなり自分の部屋に連れて来るなんて。」

「いや・・その言葉は君に返すよ。君の積極性が俺をこうさせたんだ。」

「(＊v・v) 恥ずかしいな。そんなこと言われちゃ。」

「君から連絡が来なかったら、俺から電話もメールもすることはなかったと思う。」

「あのお・・君って言うのはもうやめて。和代でいいよ。アタシもポンスケの本名で呼びたい。」

「わかった。俺は幸村一星だよ。」

「じゃあ幸村！今日はありがとう。」

「(ノ――) ノコケッ！！苗字で呼ぶのかよっ！」

「(＊^m^＊) ムフツ。冗談よ。一星って呼んでもいいのね？」

「ああ。」

そもそも一星が和代を自宅に連れて来るまでには、それなりの流れがあった。

もちろん彼が最初から計画的に考えていたとは毛頭あり得ない。

むしろ計画的と言えるのは和代の方だろう。

事の発端は、和代が一星への熱い思いを情熱的にメールで訴えたことから始まった。

それを読んだ一星は、何かに惹かれるように待ち合わせ場所まで足を運んでいた。

一星がそこに着くと開口一番、和代が言う。

「来てくれるとは思ってなかったよ。ありがとう。」

「ごめんな。まだ整理がつかなくて。」

「ロビンとはどうなったの？アタシ、彼女と全然連絡取らなくなってるから。。」

「そうだろうね。ロビンとは普通の友達になったよ。」

「恋人は解消ってこと？」

「とりあえずはそういうことになるかな。」

これを聞いた和代の心の中は、ガッツポーズの嵐だった。

「そういうことに決めたんなら、もうあまり気にしないでいいと思うよ。」

「そうだよな。。」

「アタシが言える立場じゃないけど、ポンスケがこれから誰と付き合おうとロビンには関係ないじゃない？」

「まあねえ。。」

「仮にアタシと付き合ったとしたら・・・抵抗ある？」

「・・・今は何とも言えない。。」

「アタシはポンスケが好き。ポンスケもアタシを好きだと言ってくれた。リアルでデートしたアタシを好きだって言ってくれたこと、アタシは信じてる。」

「・・・・・・・・・・」

一星が無言でいる間も和代の口撃は続く。ここで引いては絶対にいけないと思ったからだ。

「アタシ・・・ポンスケになら抱かれてもかまわないよ。。」

「Σ―11（▽；）―1え？」

和代は自分の大胆発言に、内心我ながらびっくりしていた。

元々自分はそんなに積極的な人間ではないのに、なぜかこの場面でここまで言えるとは。。

だがこの言葉の裏返しには、明らかに和代の焦りが見えた。彼女自身もそれはわかっている。

ただ、のんびんだらりとマイペースで進むと必ずどこかに隙がで

きる。

その間、ロビンに巻き返しを図られるのではないかという心の不安から、こうした背極性に結びついていくのかもしれない。

いずみが部屋で見ているとも知らずに、一星と和代は小さなテーブルの前でくつろいでいる。

ふと、二人の目がベッドに移る。そしてすぐ向き直ると、真顔になっている二人の目と目が合った。

「俺・君を・いや和代を。抱いていいのかい？」

「え・・？」

「このままじゃ、まともに付き合えるかわからない。俺は卑怯かもしれないけど、和代を抱いたら何かが吹っ切れるかもしれない。でもそんな理由で抱かれるなんて嫌だろ？俺って最低だと思うだろ？」

一呼吸してから和代が返事をした。

「かまわないよ。アタシ、一星大好きだもん。」

「ほんとにいいのか？それで。」

「よく、投げやりになって好きでもない人とHして気を紛らす人もいるみたいだけど、アタシその道具になってもいいと思ってるの。」

「どうして？和代を傷つけることになるかもしれないんだぞ！」

「それだけ一星のことが好きなの。」

和代は信じていた。一星が必ず自分だけの彼氏になってくれることを。

そうでなければ、今抱かれることの意義が存在しない。

二人はベッドの上に移動して見つめあい、ゆっくりと長いキスをしながら体が横に倒れていった。

それを目の前で見せ付けられたいずみは、耐え切れなくなって部屋からリビングへ移動した。

ショックが大きすぎて泣くことすら忘れている。

そばにはボーツと座って何かの写真を片手に見ている一星の母・静子がいた。

いずみは少しでも気を紛らわそうと、何気に静子の後ろにまわり、その写真を一緒に眺めてみる。
すると。。。

『（□□；）！！この写真に写ってる人・・・もしかして私のお母さんじゃ。。』

第27話

行き場のない栗山いずみ

権現京二が自分の部屋でネット検索をしていると、突然PM画面が開いた。

めったに人から話しかけられることのない権現は、びっくりして名前を確認する。

robin830..権現君いる？

それは彼が昔からひそかに思いを寄せていた栗山いずみに他ならなかった。

すぐにログで返信する権現。

gongen..おう！今テレビ観てた。

robin830..あ、ごめんね。邪魔しちゃったかな？

gongen..いや別に。Mステ観てただけど、今日のゲスト歌手はつまらんし。

robin830..そう。私今テレビ観れない状況だから。。

gongen..ん？どうした？幸村の部屋にいるんじゃないのか？

robin830..・・・違うよ。

gongen..は？じゃどこにいる？

robin830..リビング。

gongen..幸村とチャットでケンカでもしたのか？

robin830..そうじゃないけど・・・でもそれに近いかも。

gongen..まずいじゃんか。奴と話しが途絶えたらお前の存在を調べるきっかけが消えるだろ？

robin830..だって彼は今部屋で・・・

gongen..？？？・・・お前が部屋にいられないようなことをしてるってことか？

robin830..・・・うん。。

gongen..ああ・・・わかった。なるほどね。。でもさ、それって・・・今に始まったことじゃないだろが？

robin830..Σ（・・）◆＊エエッ！？何で？一星は今までにこんなことはしなかったよ！

gongen..そんなはずはない！社会人の男が今まで1度もひとりHしたことないはずがないっ！

robin830..（ノ　　）ノコケッ！！違うわよっ！何勘違いしてんのよっ！

gongen..（・・）エッ・・・？違ったの？あらら、俺はてっきりまた。。

robin830..そんなの何回も見てるわよ！それならまだマシよ！

gongen..見てたんかい。。（・・）；　じゃあ一体部屋で何起きてんだよ？

robin830..・・・一星が女と寝てるのよ。。

gongen..（ノ。ρ。）ノ　オオオ・・・それは大胆な！今が真っ最中ってところか？

robin830..もう知らないっ！

gongen..あー悪い悪い。ちよつとデリカシーに欠けたな俺。
でもさ、幸村はお前がいるとわかってて、女連れ込んで来るわけじやないんだし。。

robin830..わかってたら最低でしょ！

gongen..そうだけどよ。・・・あ、そうだ！いいこと思いついた。

robin830..何よ？

gongen..この前も言っただけど、お前この画面から転送に乗って俺んどこに来てみろよ。

robin830..実験てわけ？

gongen..ああ。それにどうせ部屋に戻れないし、声も聞こえてきたりして嫌だろ？

robin830..このどスケベ！！

gongen..幸村たちの話し声が聞こえてくるってことだろが！
何想像してんだよ！

robin830..あ・・（／＼／＼／＼）

gongen..とにかく試してみろよ。俺はお前が見えるし、ちゃんと話せるぞ。

robin830..うん。。

こうして行き場のなくなっただけは権現京二の提案通り、自分の転送テストをしてみることにした。

robin830..じゃこれから転送やってみるね。

gongen..おう！来てみ。

とは言ったものの、権現は散らかった自分の部屋に気づいてハッとした。

『やべっ！片付けてから呼ぶんだった。。』

無造作にバラ撒かれている衣類や雑誌、それに食べ終わったカップ

めんの空の容器などを慌てて見えない所に押し込める権現。
そして部屋を見渡して簡単なチェックをする。

『よしっ！とりあえずはこれでいいだろ。』

権現が落ち着きを取り戻して再びパソコン側に振り返ると、目の前にはすでに栗山いずみが立っていた。

「うわっ！！もういたっ！」とのけぞって倒れる権現。

「何よ！人をバケモノみたいにつ！」

「いやほんとバケモノかと思った・・・」

「、（、）ノ失礼ねっ！」

権現はゆっくり起き上がって返答する。

「だってさ、お前今日は白装束着てるし。」

「（。○。；）ええっ？何だよ！私、幽霊じゃないよ！」

「自分が死んだことに気づかないのが幽霊なんだ。」

「ちよっとそれマジで言ってるの？」

「いやウソw」

「もうっ！むかつく！」

「まあまあ。ちよっと場を和ませようとしただけじゃんか。」

「全然和んでないんですけど？」

「けどよ。お前が幸村の家から出られたことだけでも気が紛れたんじゃないか？」

「え？う、うん。。そりゃまあ。。」

「で、なんか俺に話したいことがあるからPM飛ばして来たんだろ？」

「そうなんだけど。。」

「幸村の女に復讐する相談か？」

「バカ！そんな卑怯なことしないわよっ！」

「じゃなんだ？」

「えとね・・・一星のお母さんのことなんだけど・・・何か感じたことがある？」

「ん？ああ、奴のおかんのことねえ。。年増に興味ないしなあ。」

「叩くよあんだ（一）； そんな意味で聞いてないでしょ！」

「そう直球でばっかり話してたら疲れるだろ？」

「話しが横道にそれる方がもっと疲れますっ！」

「あー、そうですかい。わかりましたよーだ。」

「で、どうなの？ 一星のお母さんについて。」

「んー、あのとき酔っ払ってたからなあ。幸村の部屋まで案内されただけけど。」

「何も変な所はなかった？」

「そういえば・・・やっぱ幸村と同じに見えたかな。」

「どういうこと？」

「存在が薄いような気がした。」

「一星もそう見えるわけね？」

「ああ。幸村の存在の薄さは高校時代から変わってなかったな。」

「その薄いつてどういう意味なの？ 目立たないってことじゃないんだよね？」

「全然違う。だから透けて見えるんだ。」

「Σ（ー◇ー＊エエツ！？ じゃあその・・・裸とか、内臓とか見えるわけ？」

「アホかお前は。そんなの気持ち悪くて見たくもないわい！」

「ごめん。（へーへ；） じゃどんなふうに見えるの？」

「透けて体の向こう側が見えるんだ。」

「ふうーん。それだけ？」

「それだけさ。何か気がつくことあったのか？」

「そうそうそれ。キッチンの床下倉庫にね。何か異様なものがあるような気がするの。」

「腐った野菜とか？」

「、（、（、）ノ何でよっ！ 真剣に話してるのに！」

「だってムロじゃんか、それ。冷蔵庫代わりだろ？ あるいはぬか床か。」

「そんな所から光が溢れ出てくるはずないじゃない！」

「光？電気の灯りじゃなくて？」

「それは絶対に違うわ。それにお母さんの反応も呆然としておかしかったの。」

「（・・） ほー。それは興味深いな。」

「ね、ね、そう思うでしょ？だから権現君に調べて欲しいの。」

「どうやってだよ？いきなり幸村んち行って『キッチンの床下見せて下さい。』って言うのか？」

「それじゃただのバカじゃない。口実くらい見つけなさいよ。」

「参ったなこりゃ。」

「やってくれるの？くれないの？」

「あーはいはい。やりますやります。」

「私、普通の暮らしがしたいだけの。誰からも見えなくて話せなくて食べれなくて遊べなくて友達もいなくて・・あげくの果てには好きな人まで取られちゃって。」

「お前、幸村が好きなのか？」

「・・私だって・・私自身の姿形があつたら彼とリアルで付き合うわよ。」

「そうか。。」

「絶対かずぼんには負けない！でも今のままじゃ無理なの。みんなに存在をわかってもらえなくちゃ。どんな可能性でも探り当てて元通りの世界に戻りたい。人に見えない存在なんてもうなっぴら！普通の幸せを求めているだけなのに、それさえも私には許されないのっ？ねえ？」

「。。。。」

急にぶち切れたようにいずみが発奮する。ぞんないずみを見て権現は無理もないと思った。

「きつと前のようになるさ。幸村は薄いが、栗山が俺とクラスメイトだったときは薄くなんかかったんだ。」

「・・それって何を意味するの？」

「推理でしかないが・・」

「うん。。」

「たぶん栗山が存在したときが本物で、今の幸村がウソだってことだ。」

「じゃどうしてこんなことに。。」

「何かきっかけがあるはずだ。」

「もしそのきっかけが一星の家のキッチンにあるとしたら。。？」

「そして幸村のおかんもそれに何か関わりがあるとしたら。。？」

「お願い権現君。頼りにしてるの。私を救って。お願いだから。。」

「・・・わかった。。」

第28話

気づいたことは。。

「栗山、そろそろ戻ってもいいんじゃないか？」

時刻はもう夜中の12時をまわっている。

「やだ。彼女はきつと一星んちに泊まっていくもん。」

「別々の部屋に寝てるんじゃないのか？おかんだっているのに。」

「一緒にベッドインするの見ちゃったもん。。（T|T）」

「やっぱ気休め言っても無理だな（へーへ；）」

「悪いけどしばらくここにいさせて。権現君。」

「しばらくって・・・お前に毎日見られながら過ごすの？俺。」

「ダメ？」

「ダメじゃないけどよ。。」

権現京二の内心は飛び跳ねるほど嬉しかった。

いずみに対してひそかに思いを寄せていた彼にとって、この上ない言葉だ。

だがそれだけに、自分の部屋に居座られてプライベートの何もかも

を見られてしまうのには抵抗があった。

もちろん彼女とはたくさん話もしたいし、この難題にも解決に向けて取り組みたい。

でも生活習慣を観察されるのとは話が別だ。

「栗山、お前は幸村の家 にいた方がいい。謎めいた部分の要素は全てあの家にあるようだ。」

「私 がここに いるの イヤ なんて しょ？」

「そ、そんな こと ない っ て。（へーへー）とりあえず 今夜 はここに いて いい から よ。」

「そ っ か。私、権現君にも嫌われてるんだ。」

「だから そう じゃ ない っ て。」

「なんだ。私の いる 場所 なんて もう・・・どこにも ない んだ。（
T|T）」

「違 う っ て！前にも 言 っ た だろ！俺は お前 に 告白 した こと あ ん だ ぞ
！」

「酔 っ た つ い で に しょ？」

「お前、まだ 思 い 出 して ない な？」

「え？何を？」

「俺は 毎日 いろ ん な こと を 思 い 出 す ン だ。お前 が 思 っ て る デジ ャ ヴ
みたいな もん を な。」

「じゃあ・・・この 場面 も 全部 今 まで あ っ た こと な の？」

「いや、この 場面 は ない な。でも 昨日 ひ と つ 思 い 出 した こと が ある。
」

「ど ん な こと？」

「自 分 で 思 い 出 して み ろ よ。わ かる は ず だ。」

「そう 漠 然 と 言 わ れ て も ね え。」

「日付と季節。かつて 過 ぎ した 時 の こと を 考 え て み る ン だ。」

いずみは じ っ くり 考 え た。

『そう・・・私はOLをしてた。ちゃんと した 人 生 を 過 ぎ して た ン だ。』

。仕事も楽しかったし職場の友達もたくさん増えた。そして恋も・恋も・・（。○。；）ハッ！』

権現はいずみがびっくりした表情を見逃さなかった。

「わかったろ。そういうことさ。」

いずみは自分自身の心の中で確認するようにゆっくり口を開いた。

「私たち・付き合ってたんだね。。。」

第29話

不自然な求め合い

和代は一星の部屋のベッドで彼に抱かれながら思っていた。

『これできつとアタシだけに気持ちを傾けてくれる。。』

目を閉じながら一星に体を任せている和代。

だが彼の愛撫や動きがどこことなくちなくて薄目を開けてみる。

一星の表情が堅い。緊張しているのか？それとも彼は女性経験が少ないのか？

和代はその本当の理由に気づいてはいたが、簡単に認めたくなかった。

『一星、もっと激しくアタシを抱いて。もっと強引に責めて。アタシに夢中になって。そしてロビンを忘れて。。』

こう口に出して言えるほどの勇氣は和代にはなかった。

だが一星に対しての燃え上がるような情熱は気持ちの中で沸々と煮えたぎっていた。

そうとも知らず、彼は冷静さを保ちつつ、至ってクールな愛撫をしている。

『一星のエッチって元々こんなふうなのかな。』と一瞬だけ考える。

彼は全くの無言のままで、ただ義務的に黙々とSEXという作業をこなしているといった感じにしか見えなかった。

和代と一星の目が合うと、彼はサッと視線をそらして和代の胸に顔をうずめる。

やはり一星には迷いがある。心ここにあらずだ。自分を抱きながらもロビンを想像してるのだと和代は思った。

そう考えると徐々に悲しい気持ちになってくる。

こんなに彼が好きなのに、自分の情熱は彼には伝わらないのだろうか？

どうしたら一星を自分だけのものにできるのか？

和代も悩みの迷路に入りつつあった。

『いけない。アタシがこんなんじゃないわ。』

和代は一星と体位を入れ替え、身を任せる立場から一転して積極的に彼を求める。

だが、肉体的なことではこの場を打開しても、メンタルな部分をそう簡単に変えられるはずもない。

このあともしばらくベッドで揺れ合う二人ではあったが、心の底からお互いの愛を確かめ合うまでには至らなかったのも当然である。

男と女の関係が終わり、二人は仰向けに横に並んで、ただ上をボーッと見ていた。

天井に貼り付けてあるほしのあきのポスターなど、今の二人には目に入らない。

「アタシ・・・良くなかった？」小さな声で話しかける和代。
「ん？・・・そんなことないよ。良かったよ。」

そんなのウソ！と和代は言いたかったが、自分自身もエッチの後半は集中力に欠けていた。一星を満足に感じることも感じさせることもできなかった。彼を責めることなんてできない。

でもこれだけは今のうち絶対言っておきたかった。

「また会ってくれるよね？」

「うん。。でも本当にいいのか？俺で。」

「うん。」

「・・・今日はごめんな。」

「どうして謝るの？」

「気づいただろ？俺は集中力に欠けてた。こんな浮ついた気持ちで和代を抱いてしまつて。。」

「ううん。もういいの。」

「全然感じなかっただろ？」

「そんなことないって。」

「そうか。。。ありがとう。」

「朝までこうして横にいさせて。お願い。。」

「いいよ。。」

和代は一星に腕枕をされながら眠りに入った。

第30話

ロビンか和代か

和代を抱けば何かが吹っ切れると思った。

ロビンを忘れて和代一筋になれると思った。

でも結局は何も変わらず、和代に失礼な行為をしたに過ぎなかった。

『一体俺はどうしちゃったんだろう。。』

気持ちの整理がつかない日が続き、イライラさえも通り越して何もかもが気だるく思えてくる。

水口和代は話しやすいし、イヤミのない気の利く優しい笑顔の子だ。彼女が本当のロビンだったらどんなに良かったことか。。

人を騙したロビンの罪は重い。許せない。でも……

そんなロビンを中心に好きだったのも偽りのない事実。

そして今も。。

そう。。こんなに踏ん切りがつかないのは、今もロビンを愛しているからだ。

彼女を愛しているからこそ、和代を抱くことが後ろめたいのだ。

『俺の中ではやっぱりロビンが消えない。。消せるはずがない。そうだ、そうなんだ。。やっとわかった!』

そう気づいたところで時すでに遅く、和代を安易に抱いてしまった事実もまた消せない。

もっと冷静に考えれば彼女を抱く前に答えが出たかもしれない。

でもそれは今更ながらの結果論。

和代も魅力的な女性には違いないが、にわか付き合いの和代と、心の底から笑い合い、お互い励ましあって来たロビンでは比べ物にならない。

それをたった一つのウソに翻弄されただけで、こんなに迷い続ける日々を送ろうとは。。

『俺ってホントにバカだよな。。情けねえや。。』

一方、いずみは権現の部屋で数日間を過ごしていた。

一星の家へ戻る踏ん切りもつかないし、自分から一星にPMする気にもなれなかったからだ。

「栗山よ。意地張ってないで、そろそろ戻れよ。」と権現が言う。

「やあよ。私から彼に話しかけるのは絶対イヤ！」

「幸村がお前にPMするかねえ？他に女がいるのによ。」

「ちよつと、私をそんなに追い出したいの？」

「そんなこたあないけど・・・ほらその・・・俺の生活習慣とか見られちゃったら恥ずかしいじゃん。」

「権現君、そんな恥ずかしいことしてるんだ？」

「変な意味にとるなよ。例えば、お前がいたらこの部屋で普通に着替えとかできないじゃん。」

「Σ（・◇・＊エエッ！？そんなことくらいが恥ずかしいの？一星なんて堂々としてるよ。」

「そりゃお前が見えてないからだろうが！」

「そうだけど、あなた曲りなりにも私と付き合ってたことがあるんだからもう少し私に対して優しくしてくれてもいいんじゃない？」

「ああ・・・少し悪かった。」

「（ノ　　）ノケッ！！何よその言い方！」

「でもよ、俺は今日の日曜に幸村んちに行くんだから、その前に栗山は戻ってた方がいいんだぞ。ここにいるても何の解決にもならないんだぞ。おそらく全てのヒントがあの家にある。」

「うん。。それはそうなんだけど。。」

そのとき、いずみの脳裏の画面にPMが送られて来た。

「あっ！一星から来たわ。」

「おっ、そうか。俺のパソコンの画面で見れるか？」

「じゃ来たのをそのままgongenIDに転送するね。」

pon su ke・・・ロビン・・・いるか？

「お、見れた見れたw」権現が驚きながら喜んでいる。

「もう！盗み見なんだから堂々と見ないでよ！」

「はい・・・静かに見てます（へーへ；）」

robin830・・・うん。いるよ。。どうしたの？何か用？

ponsuke・・・俺・・・やっぱりロビンが好きだ。友達なんかでいいられない。

robin830・・・でも和代とエッチしたんでしょ？

ponsuke・・・Σ—ll（▽；）——1ど、どうしてそれを？

robin830・・・あ・・・えと。。私は読みが深いのよ。その口調じゃ当たったようね。

ponsuke・・・許してもらえないだろうか。

robin830・・・私に言ってもねえ。無責任じゃない？和代に対してはどうするつもりなの？

ponsuke・・・彼女には心を込めて謝るつもりだ。

robin830・・・抱いたくせに。

ponsuke・・・でも・・・彼女を抱いたことで、俺が本当に好きなのはロビンなんだって気づいたんだ。

「おー、幸村の野郎、ずいぶんキザなこと言ってんじゃん。」

権現が二人のログを読みながら面白くなさそうに言う。

robin830・・・私とまた付き合ってもリアルでは会えないよ。

ponsuke・・・待つさ。ひたすら会えるまで待つ。もうせかしたりしない。ただ君をずっと待っている。

robin830・・・そんな。。。

いずみは胸が締め付けられる思いがした。会えるものなら会いたい。今までずっとそう願っていた。

でも言うに言えない今の現実。その上、更に彼からずっと待っていると言われては。

気が狂わんばかりのせつなさで嬉しさ、そして悲しさが交錯しながらいずみを襲う。

いずみがログを打てなくなったとき、権現が口を開いた。

「これがいい機会だ。PM画面の転送ボタンに乗って幸村の部屋に戻れよ。」

「・・・うん。。」

「さっきも言ったように俺も日曜にそっちに行くから。」

「わかった。。」

一星のパソコンに突然、転送ファイルの受信の許可を求める画面が開く。

pon s u k e ..ん？ロビン俺に何送ろうとしてるんだい？

ro bi n 8 3 0 ..いいから許可して。

po n s u k e ..あ、ああ。。

一星が許可ボタンを押すとあつと言う間に転送完了の文字が出た。
po n s u k e ..あれ？何も来てないぞ？ロビン、何をしようとした？

ro bi n 8 3 0 ..別に何も。ごめんね。ちょっと操作間違えちゃって。。

po n s u k e ..は？何の？

ro bi n 8 3 0 ..気にしないで。もう終わったから。

po n s u k e ..そっか・・・で、とにかく俺はやっと決心したんだ。ロビンと付き合うって。

ro bi n 8 3 0 ..私、ポンスケを騙したんだよ。こんなに悪い女なのにそれでもいの？

po n s u k e ..それも全て考えた上で言ってるんだ。

robin830…そう・今すぐには返事できないわ。私にも少し時間をちょうだい。

ponsume…もちろん。

robin830…そして和代をあまり傷つけないようにしてあげて。

ponsume…俺の責任だからね。彼女に罵倒されても一言も返さないよ。

一星はパソコンの電源を落とすと大きな深呼吸をしてからベッドに入った。

言いたいことを語った彼の顔は満足そうな表情をしている。

そんな彼の顔を、転送で戻ったいずみはベッドの上から覗き込んでいた。

もちろん一星にはいずみの姿など見えるはずもない。

「ごめんね。一星。」

（続く）

第31話〜35話

第31話

権現京二の行動

「急に何しに來たんだよ。」

一星がいぶかしげに権現京二を見据える。

「冷たい言い方すんなよ。友達がわざわざ來たっちゅうのに。」

「お前とはただの知り合いだ。友達じゃない。」

「はつきり言うね。。（^| ^;）」

日曜の朝、権現京二は幸村一星の自宅を訪れていた。

目的はもちろん、謎めいたダイニングキッチンの確認である。

だが事はそう簡単には運ばない。権現は一星に玄関の前で足止めをくらっていた。

「だから何の用なんだって聞いているんだ。」

一星の声が更にとげとげしくなる。

「見りゃわかるだろ。ジョギングさ。通りかかったからこないだ泊めてもらった札を言おうと思ってな。」

「ああ、そうか。よしわかった。じゃもういいぞ。さいなら。」

「ちよっちよっ・・もうちよっど待ってくれよ。」

「何なんだよ!？」

「水分補給させてくれ。水1杯でいいからさ。」

「そこらへんの自販機で買えよ。」

「金持って來てないんだ。」

「ったく。。じゃここで待ってろ!」

と一星がキッチンへ向おうとした。でもこれでは権現がここに來た意味がない。

一星には姿の見えない栗山いずみも、玄関先で心配そうに権現と

一星の言葉のやりとりを見守っている。

「あ、あのさあ、悪いけど家にあがらせてくれよ。」

「はあ？ 図々しい奴だなお前。」

「ちよっと足くじいちゃってな。5分でいいから少しだけ休ませてくれよ。頼むから。」

「どこも痛そうに見えないけどな。」

「我慢してるのさ。・・うっ！ 痛っ。。」

権現の白々しい演技にいずみがつぶやいた。

「ウソくさっ！」

「うっせえよ。ほっとけ。」

この言葉に一星が反応。

「うっせえ？ 誰に言ってるんだ？」

「いやいやいや、幸村にじゃないから。（^□^；A」

「じゃ誰にだよ？」

「えと・・その・・うん。自分自身にだ。そう、俺自身に言ったんだ。」

「わけわかんねえこと言いやがって。」

一星はこれ以上、権現に余計な突っ込みを入れるのをやめにした。高校時代から彼の奇行が虚言は有名だったし、それが元で転校せざるえなくなったという経歴がある。

「じゃ絶対5分だけだからな！」

「さんきゅ。お邪魔しまあす♪」

「俺の部屋で待ってろ。」

「え？・・水くらい自分で飲めるからわざわざ持って来なくていいって。」

「人んちの台所に勝手に入られてもなあ。」

「心配するなって。刃物で遊んだりしないからよ。」

「お前がやりそうなことをあっさり言うなよ（Д」；；；」

ちようどその時、ふたりの話し声に気づいて、自分の寝室から母

の静子が現れた。

「あら。この前の友達だね？」

「あ、その節はどうもお世話になりました。」

「お礼なんかいよいよ。ちょっと聞こえたけど、のどが乾いてるんだって？」

「は、はあ・・・」

「私がカルピス作ってくるからリビングで待ってなさい。」

「いえ、とんでもない！！そこまでしていただかなくても・・・」

「そうだよ母さん。そんな必要ないよ。」と一星も同調。

「（＊＾m＾＊）ぷっ。」吹き出すいずみ。

「そういえば権現、お前ジョギングして来たわりには汗全然かいてないじゃん。」

「Σ―11（▽；）――1・・・あ、汗がひいちゃったんだよきつと。」

「きつと？」

「いや、絶対ひいたんだ。」

「（～へ～；）ウーン・・・あやしい奴め。」

「とにかくお母様にも幸村にも迷惑はかけないんで、俺ひとりで水を飲ませて下さいよ。」

「でも勝手に人んちの冷蔵庫開けられるのもなあ。」

「へ？冷蔵庫なんて開けないぞ？水道水じゃダメなのか？」

「（（ノ―ω―）ノバタ。生で飲めるわけじゃないじゃん！！お前がいた田舎とは違うんだぞっ！」

「そうだったのか。。知らなかった。。」

「じゃあ俺と一緒にキッチンに來い。さ、早く。そして水飲んだらさっさと帰れ。」

「しゃーないな。。」

「私がカルピス作ってあげるって。」と再び静子。

「母さん大丈夫だよ。部屋で休んでて。」

「そうですよ。お母様。体調が悪いんだから部屋でゆっくりして下

さい。」

「お前、なんでうちの母親が体調悪いって知ってんだ？」

「いやその・・風の便りで。」

「ウソつけ！」

「ウソだごめん。風の便りじゃなくて・・なんか顔色が悪そうだから。」

「最初からそう言えばいいじゃん。」

「すまん（――；）」

「じゃあすまないけどお言葉に甘えて私は部屋で休ませてもらうね。」

こうして静子が一旦部屋に戻った。

冷蔵庫のミネラルウォーターを500mlほど一気飲みした権現。本当はのどなど大して渴いてないのだが、目的のためなら迫真の演技もせざるをえない。

今、権現の立ち位置は、まさに謎が隠れている場所の真上。

当然、キッチンマットが敷かれているわけだが、とりあえずどうしてもそれをずらしたい。

何か適当な理由を見つけないければと権現は頭をひねる。

「（！o！）オオ！ 幸村！このキッチンマットすげえなあ。」

「母さんがダイソーの100均で買ったやつだけど悪いかな？」

「（（ノ――ω――）ノバタ。いや・・そうは見えない。すごく上物の柄だ。」

「お前、マット集めが趣味なのか？」

「いや、生地に興味があるんだ。ほらここ。こんな細かい刺繍が・・すごい技術だ。」

「だから100均だってば。それにほころんでるし。」

「それがまた情緒がある。」

そう言って権現はしゃがみ込んでキッチンマットをめくり、手にとって食い入るように模様を眺めるふりをする。

だが実際に目にしているものは、マットの下から現れた床下収納庫のフタであった。

『あつた!!これか。。。この中に何かが。。。』

第32話

ハプニング

「あれえ?これってもしかして床下収納庫?」

今までキッチンマットに執着していた権現が、一転して床下に興味を移行させる。

「そんなの俺も今まで知らなかったわ。いつもマット敷いてたし。」と一星がどうでもいいように答える。

「うちにもこんなのあるんだけどよ。おかんがばあちゃんちから分けてもらった『ぬか床』が入ってるようだ。」

「だから俺にそんな話したところで、答えようがないっつーの!」

「・・・ちよつとだけ開けていいか?」

「ダメだ。水飲んだらすぐ帰るんじゃないのか?」

「いやいや、収納庫の使い方参考までに。」

「お前は主婦かよ!!」

「1分でいいから。いや30秒でもいい。幸村だって知らなかったんなら見たいだろ?」

「別に。」

「ウソだ!俺が帰ったらひとりで見ろくせに。」

「見ねえよ!こんなの。」

「でも知っておく義務があるぞ。この家の人間なんだし。」

「ああそうかい。じゃ好きにしろよ。1分だけだぞ。」

「さんきゅ♪」

一星の許可が下りた以上、もうコソコソする必要はない。

早速、権現京二が平面になっている床下の取っ手の片側を指でグツと押すと、もう片側が浮き上がり、取っ手部分が反転して持ち手になった。

「よし、開けるぞ。」

そのとき、そばにいたいずみが権現に話しかける。

「一星も見えていいの？まだ私たちだけの秘密にしておいた方が・・・」
「今の状況的にそんなの無理だが。」

「そうだけど・・・」

一星が不思議そうに尋ねる。

「お前誰と話してんだよ！気持ち悪い独りごと言うな。」

「あはは。わりい（ー；」

権現京二が取っ手を握ってついにフタを持ち上げた。

現場にいる3人が覗き込む前に、すでに中からはまぶしい光がもれて来ていた。

「何だよこれ。センサー照明か？」と一星。

「わからん。。」

権現と一星は四つんばいの姿勢、そして物理的存在のないいずみは立ったままでゆっくりと上から中を覗き込む。

「ええっ？（□；）何がどうなってんだ？何でこうなってる？」

一星が驚いて声を荒げる。

「中に銀河系があるみたいね・・・」といずみ。

「中に銀河系があるみたいだな。」と権現。

「お前、うまい表現だな。まさにそんな感じだ。」と一星。
いずみが権現をにらむ。

「私の表現、パクらないで！」

「あはは（へへッ」

「でもなんだろ？プラネタリウム装置でも作動してるのかな？」

一星が真面目に考えはじめる。

「こんなキッチンの真下にそんなことして何の意味があるんだよ。」
と権現が突っ込みを入れる。

「そりゃ意味はまだわからんけど、とりあえず調べることはできる。」

そう言うで一星は、片腕を中に伸ばして入り口付近の4隅を手探りしてみる。

「何やってんだお前？」

「いや、どっかに電源スイッチらしきものがないかなあってさ。」
「で、ありそうか？」

「・・・てか。。こん中って、内側の壁がない。。」

「Σ（ー◇ー＊エエッ！？マジ？」

「横にも奥にも空間が広がってるようだ。。（ー；ヒヤリ」
「それマジで怖ええじゃんかよ。」

そばにいるいずみもかたずを吞んで見続けている。
「できるだけ奥まで手を伸ばしてみるか。」

「気をつけろよ幸村。」

「危なくなったら引っ張りあげて・・・あっ！！」

一星がそう言いかけた瞬間、彼は床下の空間に引っ張られるように、体ごとすっぽりと中へ落ちて行ってしまった。

「ガ——ΣΣ（。∩。；）——ン！！ウソだろ！」仰天する権現。
しかしそれは紛れもなく事実。一星は銀河の渦へと消えて行った。

「きゃああああああああああああああ！！！！！！」

突然の雄たけびに振り向く権現といずみ。

見るとそこには静子が両頬に手を当てて床下収納庫を見つめながら立っていた。

「なんか胸騒ぎがすると思って様子を見に来たら。。一星くっく！！」
静子も自ら床下に飛び込もうとするが、権現によって取り押さえら

れる。

「ダメですおばさん。何が起こってるか全然わからないんです。少し落ち着きましょう。」

「でも・・・でも・・・私のせいです。私の。。。」

「この収納庫の秘密を何か知ってるんですね？もしそうなら俺たちに教えてくれませんか？」

「俺たちって・・・あなたひとりしか。。。あっ！！」

「あって・・・僕ひとりの間違いでしたw 気にしないで下さい。」

「いえ、ふたりいるでしょ？そこにいる女の子は誰？」

「（・|・）エッ・・・？」権現が自分にしか見えないはずのいずみに目をやる。

「おばさん、ひょっとして彼女が見えるんですか？」

「？？人がそこにいたら見えるでしょう？」

「ということは・・・おばさんも人には見えないものが見えるタイプの人ってことか？」

「いいえ、違うわ。」といずみが話し出す。

「違うってどういうことだ？まさか。」

「そのまさかよ。私、今ここに普通に存在してる。ほら。」

いずみはそう言うと、水道の蛇口をひねったり、食器棚の扉を開けたりした。

「ね！今までどれも貫通してできなかったことが全てできるわ。」

「じゃあ・・・幸村が消えたことで栗山が蘇ったってことか？」

「・・・そうみたい。。。」

静子が再び取り乱しそうになる。

「一星は・・・一星はどうなるの？どこ行っちゃったの？母さんはどうすればいいのよっ！！一星ええええ！！（T◇T）」

自分の家？

一星は体ごと何かに引っ張られて行くようだった。

床下から真下に落ちているはずなのに、なぜかそんな気がしない。むしろ引っ張り上げられている感覚。しかもそこは暗闇ではなく、銀河系のような輝く星団たちが無限大に散りばめられている中をワープしているかのような速さで進んで行く。

そんなCGのような映像美を観ているからか、一星には恐怖心など全くなかったのである。

だが、そんなファンタジックな体験はそう長くは続かなかった。一星の前に突如としてゴールが現れた。進行先の頭の方向に白い穴が見える。

彼はそこに向って一直線に進んでいた。そしてまさにその穴にたどり着こうとした瞬間、何かが頭にぶつかった。

”ゴンッ！”

「痛えええ〜！」そして一星の体が停止する。

頭を押さえながら、今自分の目の前にある光景をゆっくりと見てみた。

すると、彼はゴールと思われる穴の中から顔を出していたのである。しかも目の前には母の静子らしき人が額を押さえながらしりもちをついている。

「母さん・・・？」

よく見ると確かに静子だった。ただ、床下に落ちる前の静子とは決定的に違う所があった。

「母さんが・・・若返ってる。。（ ー ー ）； ヒヤリ」

「痛あああ・・・！」静子が自分の額をさすりながら床下収納庫に目

をやる。

「どうしたの？何かあったの？」

リビングから静子がしりもちをついた音を聞きつけて、栗山尚代くりやまひさよが駆けつけて来た。

「何かがぶつかって。。」

「何かって・・・あ！ダメじゃないこの床下開けちゃ！すぐ閉めない
と！」

尚代が慌てて扉を閉める。

「ここは開けるなって昔から言われてるの教えたでしょ！」

「・・・ごめんなさい。そう言われると余計に見たくなつて。。」

「私もここは古井戸だって聞かされてるし、気味悪いから見たくもないのよ。」

「・・・」

「で、静子は何に頭ぶつけたの？虫でも飛んで来たんじゃない？」

「いいえ・・・もっと大きな石みたいなのが。。」

「石？？」

尚代がまわりを見たところでそんなものなどあるはずもない。

二人とも急に背筋がゾツとして、とりあえずこのキッチンから離れることにした。

その間、一星は穴から這い出て静子と尚代に話しかけていた。

「俺の母さんか？一体どうなってるだよ？なあ母さんてばっ！」

いくら目の前で言っても静子には聞こえてないようだ。

しかも目も合わせてくれない。

「無視かよっ！！俺が何したってんだよ！じゃあそっちのおばさん
でいいや。ちょっと！」

一星が何を言っても無駄だった。二人は彼を気にとめてもいない。

「マジでどうなっちゃってんだ。。？よく見りゃここ、俺んちだけ
ど・・・家具も違うし配置も違う。」

若返った母親にもうひとりの謎の女性。。

「権現はどこ行っただ？誰か説明してくれよ！ちくしょうめ！」

一星は考え込みながら家の中を徘徊した。確かに自分の家の作りなのに、他人が住んでいる家だった。

そしてついに自分の部屋に入ってみる。

「ガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！こ、これは。。。女の部屋じゃない！！」

部屋にはドレッサーがあって、中の色調もピンクが主体で、ぬいぐるみがあちらこちらに数多く飾られていた。

「ただいまあ。」

玄関から女性の声がした。そしてすぐに足音がこの部屋に近づいて来る。

「やべえ・・・」

一星はどこかに隠れようとあたりを見渡しながら、不意にドレッサーに目をやる。

「なんだって？Σ——11（▽；）——1・・・俺が・・・映ってねえじゃん。。。」

呆然と立ちすくむ一星。

そして部屋には栗山いずみが入って来たのである。

第34話

もしかして君は？

いずみは一星の存在など全く気づいていなかった。

帰宅して部屋に戻るや否や、一星の前で平然と着替え始めた。

『うわっ！ちょっとやべえじゃんか。。』

少し顔をそむけたものの、すぐにいずみの様子をうかがう。

『・・・こりゃどうやら俺の姿が見えないらしい。。母さんたちと同じだ。無視られてるわけじゃないんだ。。』

ようやく冷静に事情を分析し始めた一星。

『自分自身の体が自分で見えないし、鏡にも映ってない。。俺は何なんだ？死んだのか？』

いずみが職場の制服と思われる地味なスカートを脱ぐと一星の目が釘付けになった。

『こんな堂々と覗き見していいんだろうか・・・？』
女性の着替えを見て興奮するよりも、戸惑いの気持ちの方が圧倒的に一星を支配していた。

「いずみー！ちよつとこっち来てー！」

リビングの方から栗山尚代が大声でいずみを呼んでいる。

「はーい！今行くお母さん。」

着替えながら同じく大声で返答するいずみ。

そしてその声を聴いて更に一星は仰天した。

『この声・・・まさか・・・まさかこの子はロビンなのかっ？』

一星は、彼女の顔の近くに寄ってまざまざと眺めてみた。

このいずみという女性がロビンだしたら、過去1年間、1度も会えずに我慢し続けた日々において、念願のお顔拝見ということになるのだ。

『か、かわいい・・・』

彼女は例えていうと・・・そう。。キシリッシュのCMに出ている沢尻エリカのように、少女っぽくありながらも強気な表情を前面に出している女性に見えた。

事実、ロビンもテキパキしていて人に弱気を見せたことがない。

一星は直感的に、この彼女がロビンだと確信した。

いずみが母の尚代に呼ばれてリビングに行くと、ソファで横にな

っている静子に目がいった。

もちろん一星も彼女の後を追う。

「あ、いずみ。この人はね。お母さんのエアロビ教室の友達で、大^お須賀静子さん。」

「はあ・・どうも。。どこか具合悪いんですか？」

「いえその・・」静子が答えようとするのを尚代が遮った。

「違うのよ。静子はちよっと頭痛持ちでね。落ち着くまで横になってもらおうと思って。」

「ふうん。。そうなんだ。」

「ごめんなさいね。お邪魔して迷惑かけてしまつて。」

「そんなことないです。ごゆっくりしてって下さい。で、お母さんは私に何の用？」

「だから、私は静子の看病してるから、夕飯の買出しに行つてきてよ。」

「いいけど・・私の食べたいメニューの材料でいいの？」

「任せるから頼むわ。でもその代わり、いずみが作るのよ！」

「うんいいよ。じゃすぐに行つて来るね！」

いずみが買い物に出で行つたあとも、一星は更に新たな悩みの渦中にいた。

『大須賀つて・・確か母さんの旧姓じゃないか。。なんで幸村つて名乗つてないんだ？』

その理由については、次の会話でなんとなく理解できた。

「いずみちゃんて可愛くていい子ね。さすが尚代の子だわ。。私なんてこの年まで縁もなく行かず後家で。。」

「大丈夫よ。縁ていうのは突然やつて来るもんよ。静子は独身というだけあつて、私みたいに所帯じみてないし、まだまだ肌も若いしいくらでもチャンスあるわよ。絶対に！」

「そんなこと言ってくれるのは尚代だけよ。ありがとう。。」

この会話で一星が感じたこと。

静子を最初見たとき、若返ってると思ったのは、一星の知る最近の静子とは、精神的にもどこか鬱で、化粧付けもなく、髪もボサボサで外出もせず、顔もやつれていたこと。

それが今では、メイクはしっかりしているし、長い髪もアップにしてまとめている。それになぜか独身で所帯じみていないこと。

年齢的にはそう変わらなく見えるが、違う環境の中で生活してきた人のように見える。

『なんか世界が違うぞここは。』

一星にもようやくこの場所が、家は同じであっても今までいた世界とは異なる場所だということに気づき始めた。

『夢じゃない・・・こんなにもリアルな夢なんてない。』

そして更に冷静に考える一星。

『しかもここは俺んちじゃない。ロビンの家だ。』

部屋に戻っていずみの机を見ると、いかにも子供のころから使用していたと思われる古い定規が置かれていた。

『栗山いずみ・・・か。』定規にはサインペンでそう書かれてあった。

『ここは栗山家だ。母親は栗山尚代。じゃ俺の母さんはどこに住んでるんだ？独身ということは実家か？』

だが、一星はそんなことよりもっと重大なことに気づいた。

『そうか・・・そうだったのか。この世界では俺の母さんは結婚してないから俺は生まれていないんだ。つまり俺の存在がないということだ。だから俺は鏡にも映らないし、人に気づかれもしないんだ。』

自分なりに解釈はできたものの、問題はこれから自分がどうすれば良いのかだ。そしてなぜこうなってしまったのか。

こんな間違った世界にはいつまでもいられない。元の正しい世界に戻るのが最優先だ。

『そうするにはどうすればいいのか。』

答えはすぐに見つかった。

『キッチンだっ！』

一星は思い立つや否や、この世界に來た現場であるキッチンの床下に直行した。

『このフタをあければ・・・』

だが一星の手では物体がつかめない。何でも突き抜けてしまう。これではフタが開かない。

『くっそお！理屈に合わないじゃん。突き抜けてしまうならこの中に入れてもいいはずなのに、それもできない。。。』

キッチンの前で悩みに悩んだあげく、一星はあることにひらめいた。

『そうだっ！俺は母さんと頭をぶつけたんだ！母さんなら触れるんだっ！』

そして急いでリビングで横になっている静子の元へ行く。

幸い、尚代はトイレか庭へに行ってるようで姿が見えない。一星は静子の手を取る。

「（。。。）／ギク！何？なんなの？」静子が敏感に反応する。

『しめた！ちゃんと触れるぞ。』

一星は静子を起こし、喜び勇んで手を引っ張りながら静子をキッチンへ誘導する。

逆に恐怖のどん底にいたのは静子。姿の見えない未知の誰かに手を引っ張られているのだ。

恐怖を通り越して大声すら出ない。

「いや・・・いや・・・やめて・・・誰か助けて・・・」

だが所詮、男の力にはかなわない。ついに静子はキッチンの床下に到達する。

一星は、静子の手をフタの取っ手に誘導する。

恐怖におののく静子であったが、未知の誰かがこのフタを開けて欲しいと懇願していることは理解できた。

「開ければいいのね・・・？わかったわよ。開けるから・・・そうせかさないで。お願い。。」

第35話

独身の静子

『誰かが私を誘導している。一体私に何をしようと言うの？』

静子は床下を開ける恐怖よりも、目に見えない何者かに自分が誘導されている事への恐怖の方がウェイトを占めていた。

俗に言う霊のしわざなのか？だとしたらそれは自分を良い方向に導いてくれるものなのか？

あるいは悪霊が自分を地獄に落とそうとしているのか？

『そんなはずはない・・・私は人に迷惑をかけたりしてないし罪も犯してない。』

確かに静子は内向的な性格で、普段からあまり目立たない存在。人に迷惑をかけるどころか、職場でも同僚からの言いなりで動いている。

余計な仕事を頼まれても断れないし、皮肉を言われても言い返せない。

仕事が特別できるわけでもなく、出世欲もない。定時にはまっすぐ帰宅する。

そんな損する性格の静子には出会いもなく、会社ではお局。近所では行かず後家と噂されている。

そう・・・静子は誰にでも見下されていた。そしてそれを一番わかっているのが静子本人だった。

この床下の古井戸のフタを開けることに恐怖はない。

なぜなら1時間ほど前に1度ここを開けた静子は、まさにこの中に身投げをして命を絶とうと決意していたからである。

と言っても決して計画的なことではなく、突然の自殺願望に駆られた衝動的な出来事だった。

健康のために通っていたエアロビ教室で唯一知り合った友達・栗山尚代の自宅に招かれて起きたこと。

本来なら静子は、自分の悩みや不安を尚代に相談するつもりでいた。だが、明るく陽気に話しかけてくる尚代に、とてもじゃないが自分のことで暗い話題に切り替えてしまうことなどできないと思ったのである。

そんな中で何気に尚代の口から飛び出たキッチンの古井戸の話。宅配便が来て、尚代が玄関で応対しているほんの一瞬の隙をつき、静子はふらーっとキッチンへ向う。

すぐに床下のフタが目に入った。静子は何の躊躇もなく取っ手を引き上げる。

『私なんて・・いてもいなくても同じ。。死んだって誰にも惜しまれやしないし、泣いてもくれない。もうこれ以上良いことなんて何ひとつない。。私がいなくても世の中が変わりはずもないし。。』

古井戸の奥は小さな灯りが無数に輝いていた。

『きれい。。』

この床下がなぜこんなにきれいなのかなど、知りたいわけでもなく、静子はそっと目を閉じて頭から穴の中へと身を任せようとした。

と、その時突然、何かが井戸の中から静子の額に思い切りぶち当たって来たのだ。

むろん、その正体は幸村一星であるわけだが、当の静子には知る由もない。

それから約1時間後の今、静子は再び古井戸の前にいる。フタを開けるのにためらいはなかった。

『私を誘導しているあなた・・きつとあなたもこの中に帰りたいんでしょう？ 私も連れてってよ。楽になりたいの。』
そして静子はフタを開けた。。

一星は床下の扉が開くや否や、一目散に体ごと飛び込んだ。

『よしっ！これで元に戻れると思うんだけどな・・・』

落ちてゆく中で、上の方から声が聞こえてきた。

「静子！何やってんのよっ！バカッ！」

そしてフタの閉まるかすかな音・・・

「母さんがここで自殺しようとしたとは。。。」

一星が見た全く別な世界。これは一体、何を意味するのか？

今だ見当もつかない中で、一星は床下の銀河の世界を流れ星のように突き進んでいる。

やがて先には小さな光が見えて来た。

「さっきと同じだ。。。」

落ちている感覚より、引っぱり上げられている感覚に変わったのもまた同じ経験だった。

「帰れる。。。」一星は直感した。

「そしてこっちにもまた俺の母さんがいるはずなんだよな。。。」

（続く）

第36話〜40話

第36話

真相への序曲

一星は床下収納庫から顔を出していた。

そこには大泣きして床に崩れ落ちている静子がいて、傍には権現京二が介抱している。

あたりを見回す一星。見慣れた冷蔵庫や食器棚。そしてダイニングテーブル。

『うん・間違いなく俺んちだ。』一星は未知の床下から這い上がった。

それに気づいた静子が大声で叫んだ。

「一星!!」

そして権現もまた、振り返った先に一星が突っ立っているのを見て仰天した。

「幸村! お前どうやって上がって来たんだ? 奈落の底に落ちて行ったように見えたぞ?」

「ああ、確かにかなり落ちたかな。母さんは何で泣いてるんだ?」

「アホ! お前が落っこちたからじゃんかよ!」

「そっか。。そうだよな。。」

一星は頭が混同気味だった。この床下の向こうの世界にも別な静子がいて、不穏な動きをしていた。

そしてこっちでは最近精神的に病んでいる静子がいる。

病んでいる面からすれば、どっちの静子も同じかもしれないが、存在する世界が違ったのは確かなこと。

「まあとにかくお前が無事戻れて良かった。2, 3分で登って来れるなんて、どっか途中で引っ掛かったのか?」

権現が不思議そうに一星にたずねる。静子も少し落ち着きを取り

戻し、一星からの言葉を待っている。

「（・―・）エッ？2、3分？俺は1時間以上向こうにいたぞ？」

「はぁ？？1時間だって？何言ってるんだよ？せいぜい3分だ。それに向こうにいたって何だ？」

「なんかさぁ・一言で説明できないってか、俺自身だって頭が混乱してんだよ。」

「だから時間の感覚が狂ったのさ。」

「でもたった3分とはなぁ・。」

ここで静子が口を開いた。

「話しはもういいから早く茶の間に行きましょう。みんなキッチンから離れて。」

権現と一星は静子の言葉に従い、居間に移った。

「あれ？栗山、お前また・。」権現は、いずみが自分にしか見えな
い存在に戻っているのに気づく。

「え？栗山ってさっきの女の子のこと？・どこ言ったのかしら？
いないわね。」

「栗山って・栗山いずみのことか？」

と、一星が驚いて権現に聞き返す。

「なんでお前が栗山を知ってたんだよ？」と権現。

「何か知らんけど向こうにはいたんだって！」

「その向こうってのがわからないんだよ！」

「じゃあゆっくり説明すつからよ。でも権現だって何で栗山いずみ
を知ってたんだよ？」

「お前が落ちてからすぐに突然現れたのさ。俺は・栗山とは同級
生だ。」

「一緒に来てたのか？お前が俺んちに来たときはひとりだけだった
だろが。」

「だから突然キッチンに現れたんだよ。」

「化け物か？」

「そうかもしれん。」

それを傍で聞いていた『目には見えないいずみ』は、権現を睨み付けていた。

ペロツと舌を出していずみに対して微妙に頭を下げる権現。

「それを説明するのにも時間がかかるんだよ。でもひとつだけ言えることがある。」

「言ってみろよ。」

「今も言ったが、お前が落ちてすぐに栗山が現れた。そしてお前が戻ると彼女は消えた。それは事実だ。」

「どういうことになるんだ？」

「お前と栗山いずみは一緒には存在できないってことだ。」

「もっと納得できる説明はできないのか？お前は。」

「できない。俺もまだ知りたいことがたくさんあるし。」

「(～へ～;) ウーン」

権現の言葉に一星は少しの間、考え込んでいたが、急に何かひらめいたように話を切り出した。

「わかった！俺が落ちた向こうの世界でもそうだった。栗山いずみは目には見えないがここにいます！違うか？権現。」

「ウツ！！Σ(・”・;)」

権現は迷った。一星に『その通りだ』と言ってもいいのかどうかを。

「お、俺にそんなのわかるはずないだろ！なんでそう思ったんだ？」

「それはな、向こうで俺がそうだったからなんだ。栗山いずみがこの家に親子で住んでいたんだ。俺もその場にいたのにさ、誰からも気づかれないんだ。」

「(・。・) ほー」

「でさ、わかったんだよ。部屋に行って鏡を見たら自分が映ってないってことが。」

「・・・・・・」

「もうわかるだろ？お前がさっき言ったように、俺と栗山いずみが一緒に存在できないと仮定したら。」

「ああ・・・わかるよ。」

「うん、そう。今俺がここに存在してる時は、栗山いずみは見えはいいないが、ここで俺たちを見ているってことだ。」

「そうか。。そこまでわかったんなら俺も補足して言おう。」

権現があらためて話しを始めようとする直前、一星がそれを遮った。「待ってくれ。自分でも少し考えたい。俺のプライベートに関することだ。お前に聞きたいことがあったらすぐに連絡する。」

「・・・わかった。お前がそう言うなら仕方ないな。何かあったらすぐ連絡しろよ。」

「ああ。。」

権現京二を帰した後、一星は静子に安定剤を飲ませて横にさせ、部屋でひとり考えにふけていた。

30分くらい一歩も動かずベッドに仰向けになっていたが、突然おもむろに起き上がり、パソコンの電源を立ち上げた。

そしてチャットを起動させ、少しためらいながらメッセージを送信した。

pon s u k e・・・ロビン、いるか?・・・今、俺のこの部屋に・・・君はいるのか?

第37話

一星といずみ

いずみは衝撃を受けた。ついに一星が確信をついてきたからだ。返信にためらいういずみ。このまま居留守にしようかとも思った。でもそうすることで、自分にとって更に苦しい毎日になるのは目に見えている。

ウソをついてもあとで必ずバレる。こんな非現実的で小説みたいな事実をズバリ推測できた一星なら必ず気づく。

それにもう彼にはウソはつけない。自分の身代わりに水口和代を仕立てたことで彼に多大な迷惑をかけたのだ。

そしてその罰からか、いずみは和代を抱く一星を目の当たりに目撃してしまった。

絶対に見たくもない光景を見てしまったのだ。

すべては自分の罪。存在のない自分の正体を一星に説明できるはずもなかった。だから必死になってこの世界に存在できる方法の糸口を探していた。

だがそれゆえに生じた一連の出来事。そして一星をも巻き込んでしまった。

『もうウソはつかないわ・・信じてもらえなくてもそれでいい。』

』

一星はもう一度、チャット画面のロビンに問いかける。

pon su ke…ロビン・いや、栗山いずみ。。君はこの部屋にいるんじゃないのか？

本名を言われてドキッとしたいずみであった。

pon su ke…ロビン・この俺の問いかけに答えづらかったら、あとでオフメ（オフラインメッセージ）に入れておいてくれ。頼む。

一星がチャット画面を落とそうとするまさにその直前、ロビンから返信が来た。

ro bin 830…・・・そうだよ

一星はびくつとなった。ロビンの突然の返信が、自分の推測を証明する答えだったことに、新たなショックを覚えた。

pon su ke…・・・やっぱり。。

推測が当たると普通は嬉しいものだが、今の一星には戸惑いしかなかった。

ponsuke..ロビン・君は栗山いずみという名前でもいいんだね？

robin830..うん。

ponsuke..いつからここにいるんだ？

robin830..ずっと前から。

ponsuke..ずっと前っていつ？

robin830..ポンスケが子供の頃から。私も子供だった。

ponsuke..Σ(┐┌*エエッ！？チャット始めたのは1年前からなの？

robin830..ポンスケと話せる手段はパソコンしかないのよ。それなしでは私が怒鳴ってもわめいても誰も気づいてくれなかった。

ponsuke..そんなことしてたのか？

robin830..もう死ぬほどわめいたわ。何度も泣きつかれたしね。でも自分では死ぬことさえできないの。何もかも貫通して道具も持てないから。

ponsuke..・・・君は・俺の守護霊だったりするのか？

robin830..そんなんじゃない。ポンスケだって、さつき行つてた世界では今の私と同じ立場になったんでしよう？

ponsuke..ああ・たぶん。

robin830..でもあなたは守護霊じゃないでしょう？

ponsuke..そっか・そうだよな。。でも何でロビンはこうなったんだ？

robin830;それが知りたいのは私よ！長い間、それしか考えてこなかったんだから！

ponsuke..俺が一瞬、穴の向こう側に行つた場所では、君と君のお母さんが一緒に暮らしてたんだ。

robin830..(。;)えっ？ホントに？私いくつくらいに見えた？

ponsuke..なんかOLっぽかったけど。部屋にドレッサーも

あつたし。

robin830..そうよ。私OLだったんだもん。

ponsuke..(?!?)へ？納得いかないなあ。君はさつき子供の頃から俺の部屋にいたって言ってたじゃん。OLなんてできっこないじゃんか！

robin830..だから私はこう思うの。この現象はきっとデジャヴじゃないかってね。」

ponsuke..デジャヴ・・・？

robin830..そう、記憶がなくても、人は同じ時代や同じ出来事を何度も繰り返してるの。

ponsuke;それと俺たちとどう関係あるんだ？

robin830..それはね。。元々私はこの家に親と住んでたの。ponsuke..それって、俺んちがここに住む前のことか？

robin830..違うの。よく聞いて。私がここに住んでいた時代も今と同じ。

ponsuke..そんなはずは。。。

robin830..ポンスケは私が経験するはずだったデジャヴを奪ってしまったことになるの。

ponsuke..(～へ～;)ウーン・・・よくわかんない。。。

第38話

どっちが正しいの？

robin830..元々この家は私の家だったの。私がここで生まれて社会人になるまで引越しもせずと暮らしてた家なの。

ponsuke..それは俺だって同じさ。ここで生まれてここで育ったんだ。

robin830..でもそれは今の経験でしょ？私は今現在より前

に、ここで暮らしていた経験があるの。変な言い方かもしれないけど私のの方がオリジナルよ。

ponsuke…じゃあなんで今はこうなってるんだ？俺は何もしてないぞ。

robin830…うん。それはわかってる。

ponsuke…仮に100歩譲って、君がこの家で生活してたでしょう。そのとき俺はどこにいたんだ？

robin830…それは…お母様とどこか別な場所に住んでいたのかも。。

ponsuke…そして何かのはずみで俺がここに移り住んで来たっていうのか？

robin830…うん。。

ponsuke…ロビン、君はウソをついてる。

robin830…えっ？

ponsuke…君だってそんなふうには思っていないはずだ。

robin830…。。。。

ponsuke…少し頭の整理がついてきたみたいだ。俺があのかッチンで摩訶不思議な体験をしなければ、ロビンの言うことをまともにしたかもしれない。でもそれは絶対に違う。

robin830…。。。。

ponsuke…君がこの家に存在していた時は、俺は今の君のように目に見えない存在として、この空間を浮遊していたんだ。さっきの体験は一時的なものじゃなくて、ずっと俺が過去にしてきたことなんだと思う。

robin830…。。。。

ponsuke…つまり、はっきり言うと、君が存在した世界がオリジナルなんかじゃないってことさ。俺のこの世界の方こそ正しいとも考えられるのさ。

robin830…。。。。ごめんなさい。ウソを言うつもりじゃなかったの。私の存在した世界が作られた夢か幻だなんて考えられな

かったのよ。

pon su ke ..それは俺も同じさ。でもどっちかがニセモノだろう？
ro bi n 8 3 0 ..いいえ。ホントはね、私はこう思うの。どっちの世界も正しいって。

pon su ke ..世界がふたつあるってことか？それならある意味納得できるけど。

ro bi n 8 3 0 ..それは・・・ないと思う。

pon su ke ..なぜ？

pon su ke ..それはね、ポンスケが床下収納庫から落ちたあと、私の姿が一瞬だけこの世界に現れたの。

pon su ke ..そういえば権現が栗山がいないとか言ってたよな。
ro bi n 8 3 0 ..そう。そのことよ。あなたが2分後に穴から戻って来るまで私は確かにここに存在した。ポンスケのお母様にも姿を確認されたわ。

pon su ke ..だから結局なんなんだ？

ro bi n 8 3 0 ..だから、ポンスケが戻ると私がまた消えてしまったと言うことは、あなた次第で私たちの家や家族の歴史が変わるってことよ。二つの世界は同時には存在しない。

pon su ke ..なんだか複雑だなぁ。理屈はわかったけど・・・なんでこんなことになったのか。

ro bi n 8 3 0 ..それは私にもわからない。

pon su ke ..じゃあ俺はこれからどうすればいい？定期的にあの穴を行ったり来たりしてロビンの存在を消したり現したりすればいいのか？そんなの変だろ？

ro bi n 8 3 0 ..もちろんよ。そんなことはしなくていいよ。ヒントはあなたのお母様にあると思うわ。

pon su ke ..俺の・・・母さん？

ro bi n 8 3 0 ..ええ。何か秘密があると思うの。それでずっと悩み続けて来たんじゃない？

pon su ke ..なんでそんなこと知ってんだよ？

robin830..だから私もずっとポンスケの家は何年もいるんだよ！家族の状態くらいわかるわよ。

ponsuke..そ、そうだったな。。（へーへ；）

robin830..ポンスケがエロ本隠してる場所だって知ってるんだからね！

robin830..Σ—11（▽；）——1にゃにい！？

robin830..その話しは置いて、要するに私の推理としてはね・・

ponsuke..うん。。

robin830..お互いのデジャヴを何かの原因で共有してしまったんじゃないかと思うの。

ponsuke..また難しい言い回しだなあ・・もっとわかりやすく言えないのか？

robin830..えっとね・・つまり、私とポンスケのデジャヴは交互にやって来るんじゃないかって。。

ponsuke..じゃあなにか？ロビンの人生が・・あるいは俺の人生が終わるまで、もう一方の相手は存在できずに待機してなければならぬってことか？

robin830..あくまで私の推測だけだね。

ponsuke..それが事実だったらマジ凹むぜ。。やってらんねえよ。

robin830..そうよね。。私もそう思う。。

robin830..でもさ、デジャヴがあるとしてだ、普通そんなの記憶に残らないだろ？

robin830..それがごくまれにいるのよ。テレビに出てるあの人・・なんてったっけ？

ponsuke..荏原さんのことか？オーラの泉の。

robin830..そう、その人。私もポンスケも、あの人ほどの能力はないにしても、何か感じるものがあるのかもしれないわ。

ponsuke..そうなのかなあ・・

robin830..それともう一人。権現京二。

ponsuke..(ノ|ω|)ノバタ・・・なんであいつなんだよっ！

robin830..あの人はね、ポンスケと同級生だけじゃなくて、私とも同級生なの。それを彼はちゃんと知ってるのよ。

ponsuke(□；)！！なんだって？！

robin830..だから、これからはあの人も連携をとって行きましょう。

ponsuke..よりによってあいつかよ・・・(；――) Ⅱ 3
フウ

robin830..これからの問題は、どうやったら私もポンスケと同じ世界に存在できるかってことよ。

ponsuke..どう考えたらいいのかさっぱりわからん。

robin830..私もそうよ。。でも・・・でも私、ポンスケと一緒に存在したい。。

ponsuke..えっ？

robin830..これでわかったでしょ？私が和代を代役に頼んだわけ。。

ponsuke..・・・そっか。。こういうことだったのか。。

robin830..私はリアルでは絶対に会えなかった。最初はこの状態から脱出するためにあなたを利用することだけを考えた。でも知らぬ間にあなたを好きになって。。

ponsuke..。。。。

robin830..会いたくて会いたくてたまらなくなっても絶対にそれは不可能なことだった。私は和代を利用するしかなかった。でもその後、あなたを騙した報復が私を待っていたわ。。

ponsuke..。。。。

robin830..和代があなたを本気で好きになってしまったのよね。。自業自得なんだけど。

ponsuke..(。○。；)ハッ！もしかしてロビン・・・君は俺

が和代を部屋に呼んだとき。

robin830・・・いたよ。

ponsuke..ガ——ΣΣ（。Д。；）——ン！！み、見たのかっ？

robin830..まともに見れるはずないじゃない。すぐに部屋から出たわよ。

ponsuke..・・・ごめんな。

robin830..ポンスケのせいじゃない。私のせいだもの。

ponsuke..いやそれは・・・

robin830..でもわかって！私はポンスケが今でも好き。すぐに嫌いになんてなれないよ！

ponsuke..ロビン。

robin830..私がここに存在してたら絶対にリアルで会うもん。会いたいもん。（・T|T）ううう。

一星はやっとロビンの気持ちがわかった。彼女がこんなに苦しんでいたなんて。。もっと早く気づいてあげれば良かったが、こんな不可思議な現象などはるかに想像の域を超えているし、わかるはずもない。

それでも一星は反省した。大好きなロビンを自分のわがままで苦しめてきたことを。

ponsuke..いずみ・・・ごめんな。。俺もずっと君が好きだ。

和代のことはすまないと思ってる。許してもらえるなら許してほしい。

robin830..本名で呼んでくれて嬉しい。ありがとう。。私こそごめんね。。一星を惑わせてしまっ。。でも・・・でも和代にも申し訳なくて。。

ponsuke..うん。。それは俺がちゃんと彼女に会って話してくるよ。素直にあやまってくる。許してくれなくても許してもらえらるまであやまり続けるしかない。

robin830..私、もう人に絶対迷惑をかけるような行動はしない。

ponsume..ああ。俺もだよ。

こうしていずみと一星はお互いの心に堅く誓ったのである。

だが、彼ら二人には、このままでは済まない更に驚くべき事実が待ち受けているのであった。

そして、それは一星の母・静子にとっても同様のことだった。。。

第39話

繰り返される夢

「もう耐えられないっ！あんたたちもういい加減にしてっ！」

大須賀静子はずいに蓄積された怒りを爆発させた。

この2ヶ月、毎日のように静子が通学に通う自転車のタイヤの空気が抜かれていたのだ。

しかも最近の1週間では、チューブが針らしきもので穴を開けられパンク状態。

犯人はわかっている。同じクラスメイトの宮永幸江とその一派。

そう、大須賀静子は集団でいじめられていた。

「はあ？何のことお？アタシたちに因縁つける気？」

静子は震える声で絶叫しながら返答する。

「私が悪いくとしたっていうの！！もうこんなのウンザリ！！」

「だ・か・ら！アタシたちが何したか証拠でもあんのかい？言い掛かりはよしな！」

「あんたたち以外誰もいないわよっ！」

「ふざけんじゃないよっ！確証もないんじゃない警察だって動けやしななんだよっ！なんだいこんなボロ自転車！」

宮永幸江は静子の自転車を思い切り蹴飛ばして倒した。

静子の怒りが頂点に達した瞬間だった。

「何すんのよおおおゝ!!」

静子は幸江に飛び掛り、彼女の長い髪を掴んで離さなかった。

だが当然、幸江が逆ギレを起こすきっかけにもなった。

「この貧乏人女がっ! お前ひとりいるだけで目障りなんだよっ!」

そう言うとき幸江はポケットからカッターを取り出して、静子の制服の胸元を水平に切り裂いた。

「あっ・・!!」

自分の破れた制服を見て衝撃を受けた静子。幸いにも瞬間的に身を引いたおかげで中の肉体にまでカッターの刃は達していなかった。

『でもこのままじゃやられる。』

幸江はまさにカッターを振りかざし、突進して来ようとしている寸前。

静子とはっさに自分の足元にある大きめの石を掴んで、至近距離の幸江めがけて全力投球をしたのである。

数分後・・

その場にボーッと突っ立っている静子がいた。

そして彼女の目の前には、宮永幸江が額から大量の出血をして倒れている姿があった。

ハッと我に返る静子。

「いやあああああああああゝゝ!!」

「母さん、母さんっ! どうしたんだよ? ほら起きて!」

幸村一星が母・静子の肩をゆすって起こそうとしていた。

「あ・・一星。。」

「また悪い夢見たんだな。水持って来るから深呼吸して落ち着いて。」

「
そう言うで一星は静子の寝室から足早に出て行った。

「ダメね。同じ夢の繰り返し。」

過去の事件が静子のトラウマになっていることは言うまでもない。
当時、静子が保護観察所から出て来た後も、世間の目は彼女に冷たかった。

当然のように彼女は部屋にこもりっきりの生活になってゆく。

たまに外に出ると、近所の主婦が静子を奇異の目で見ながらヒソヒソ話をしている。

静子は更に堅い殻の中に閉じこもって何年もの間、世間から忘れられた存在になっていった。

第40話

尚代との出会い（回想）

大須賀静子は、今言うニートの状態が10年近く続いた。

普通なら恋や仕事に一喜一憂しながら目まぐるしく動く世代。

血気盛んな何にでもチャレンジできる20代を何の変化もなしに静子は通り過ごしてしまう。

幸い父親が公務員ということもあって、安定した生活は確保され、実家にさえいれば食うには困らなかった。

静子が30代になると、親のすすめもあって、カウンセリングに通うようになった。

彼女にしてみれば渋々納得した上でのことだ。いい年になって親に世話になっている自分を少しは恥じていた。

迷惑もかけている。ここで強情に拒否でもしたら親はどんなに傷つき悩むだろう。

忘れもしない高校時代、幸江をベッドに寝たきりの廃人にして以来、苦しみ続けてきたのは自分だけではない。

両親も世間の厳しい風にもまれながら耐え抜いてきたのだ。そしてこんな自分を今でも守ってくれている。

そう思うと親の申し入れに対して断ることなどできなかった。

カウンセリングに通って言われたことは予想どおり。

”もっと外に出なさい” 人と交流しなさい” 会話を楽しみなさい”

言われなくてもわかっている。そんなことできたらとづくにしている。

できないからここに来ているんじゃないか！

心癒されるどころか、腹立たしくさえ思えた。

結局、定期的に3年通ったものの、何のきっかけもつかめず断念。

更に2年間の引きこもりニート生活の後、再び親の紹介で別な女性のカウンセラーと出会うことになる。

その女性はめっぽう明るく、言葉を選んで話すのではなく、雑談のようにしゃべる。

初対面なのに、かなり前から知り合いのような口ぶりですらっと話す。

といって、馴れ馴れしさがあるふうでもなく、実に心地の良いサウンドを聴いているような爽やかな流れで会話がはずんでいた。

自然と彼女のペースに呑み込まれていくといった感じだ。

これを機会に、静子は徐々にカウンセリングに通うのが楽しくなってきた。

そんなある日、カウンセラーが静子を別な場所へと誘った。

「Σ（ー◇ー＊エエッ!? エアロビ・・・ですか?」

「そうよ大須賀さん。体なまってるでしょ？私の知り合いが最近教室始めてね。」

「でも先生、私あまり人の多いところは・・・」

「大丈夫よ。となり町だから。近所の人もあなたを知ってる人もないわ。」

「。。。。」

「それにね、まだ生徒さんは5人くらいしかないのよ。始めたばかりだしね。」

「私のカウンセリングとエアロビって何か関係あるんですか？」

「用は楽しく体を動かして汗をかくこと！大須賀さん何年も汗なんてかいてないでしょ？」

「うち、クーラーないから真夏は家の中で汗はかいてますけど。」

「（ノ　　）　　」　　ノコケツ！！そういう意味じゃないのよねえ。。

（　　）　　；　　」

「母さん、母さん！水持って来たよ。ゆっくり飲んで。ゆっくりどうぞ。」

幸村一星は、ベッドから半分状態を起こしている母・静子にグラスの水を手渡す。

「母さん、ボーツと何考えてるんだい？」

「・・・え？ああ、ちよつとね。昔を思い出しちゃって。」

「さつきはおっきな悲鳴だったさあ、悪い思い出なんてさつきと忘れるようにしないとダメだぞ母さん！」

「そうだね。。うん・・・お前の言う通りかもね。」

静子はゆっくりと水を飲み干すと、大きな深呼吸をした。

それを見ていた一星は、母への質問の数々をためらった。

聞きたいことは山ほどあるが、今は聞けない。こんな具合の悪い母親を前にして余計に神経を使わせてはいけない。

そう判断した一星は、片付けなければならぬ優先順位を別のこと

に変えた。

「母さん、ちょっとこれから出かけて来るよ。」

「ど、どこへ行くの？」

「・・和代の家に・・ほら、この前1晩泊まった人。」

「ああ、一星の彼女かい？」

「・・いや。。違う。。とにかく行って来るから。じゃあ！」

そう言うで一星は、正装もせずにそのままの格好で家から出て行ってしまった。

部屋にひとり残された静子は再び回想の世界へのめり込んでゆく。。

回想といっても、空想ではなくて、事実を順序よく並べて思い出しているだけのこと。

なぜこんなことに没頭するのか自分でもわからない。

ただ、一星が収納庫から落ちて帰って来たときの驚愕な話を聞くと、明らかにこの原因を作ったのは自分だと痛感してるのは確かだ。

エアロビに通って半年、静子にはついに友人ができた。

一緒に教室に通う生徒・栗山尚代。彼女は静子と同じ年齢で、血液型も同じO型。

違うところは、彼女は若くして結婚し、すでに社会人になっている一人娘がいるということだ。

立場は違うが、静子と尚代は不思議と息が合った。

尚代もエアロビに来ると、家庭のことなどすっかり忘れているように、大いにはしゃぎ、笑いながら楽しくレッスンをこなしていた。

「ねえ静子、今度うちに遊びに来ない？」

「えっ？私なんか行っているの？」

「なんで”私なんか”って言うの？今は身分制度なんてないのよ？気軽に遊びに来てよ。ねっ！」

「でも・・ご主人がいるんじゃない。。。」

「主人は出張で1週間帰って来ないの。だから呼んでるのよ。」

「オハハハ」　ウフツ

「じゃあ・・・お言葉に甘えて。」

「そうこなくっちゃ！」

こうして静子は、初めて栗山尚代の家へ訪問することになる。だが、まさかそこに大きな人生の落とし穴があるとは、そのときの静子には思いもしなかったのである。

一方、幸村一星は、水口和代の自宅を初めて訪ねていた。

前もって携帯にメールをしていたので、和代は在宅しているはずだ。玄関のチャイムを鳴らす一星。

中から「どうぞ！開いてますよ。」と母親らしい声がした。

一星はドアを開けて中へ入る。

「ごめんなさい。和代はもうすぐ帰って来ると言うから、中でゆっくりしてて。」

「か、和代さんはどこに？」

「なんかね、近くのおいしいケーキ屋さんに行ったみたいなの。『彼氏が来るのにおもてなしするものがないっ！』って慌ててね。」

「（。。；）ギク！・・・そうでしたか。。」

恋人解消の話を切り出しに来た一星にとって、バツの悪い出だしとなった。

「それにしても・・・この和代の母親・・・どっかで見たことがあるような。」

なぜか見覚えのある顔であった。それに声も。。

『会社の誰か・・・いや違う。前に通ってた定食屋のおかみ・・・じゃない。。』

通された応接間でしばらく考えていると、急に思い出して自分でも

びっくりするくらいに飛び上がって驚いた。

『俺が穴に落ちた向こうの世界にいた人だっ！母さんと一緒にいた。
。。間違いない！』

一体、これはどういうことを意味するのか？

一星の頭は困惑しきっていた。ほんの隙を見て、玄関の表札を見に行くと一星。

そしてそこに書かれている名前を確認する。

水口 健一郎

尚代

和代

『尚代・・確かあのとき母さんと一緒にいた人も同じ名前だったよ
うな。。』

（続く）

第41話〜45話

第41話

そこに母がいた

栗山いずみは、幸村一星の部屋で不安な時間を過ごしていた。一星は水口和代の家に行くと言って出て行った。

もう彼女とは付き合わないからキツパリ話をつけて来ると。

それはいずみにとってホッとする反面、和代に対する申し訳ない気持ちもしみじみと感じていた。

『私がかずぼんを代役にしたばかりに。。』

いずみは自分自身のおろかな目論見を反省した。

と同時に、いずみは一星の今日の行動が気になってしょうがなかった。

和代の家にわざわざ出向いて、交際をやめるなんて正面きって言えるものだろうか？

外で会うならともかく、相手の自宅でなんて。。

和代の父親は出張で不在らしく、母親はパートに出てるようなので、家に出向く形になったらしいが、いずみの不安はつのるばかり。一星はけっこうハッキリ物事を言うタイプだから、一途な和代にしてみれば逆上しないだろうか？

または、感情的になって突拍子もない行動を起こさないだろうか？

悪い先読みばかりして、自分を余計に追い詰めているいずみであった。

そんな時、ふと部屋のパソコンに目をやると、一星がメッセージを起動したままにしていることに気づいた。

その画面にはオンラインが数人・・・いずみ自身（robin830）

の名前も点灯している。

そしてそこには和代（kazuon | v）の名前も点灯していた。
突然いずみはハッと何かを思いついたように行動し始める。

まずは一星のIDで、和代宛てにPM画面を開いた。
プライベートメッセージ

この一連のネット環境での作業だけは、いずみの脳内パワーにより、
操ることができるのだ。

続いて、転送ボタンを押そうとするが、一瞬いずみにためらいが生
じる。

『悪いことかもしれない。。盗み聴きはよくないけど・・・でもこの
ままじゃ私がどうかなってしまいそう。。』

そう思い直していずみは勇気を奮って転送ボタンをしっかりとクリ
ックした。

『許して・・・和代。。一星。。』

転送は速かった。さすが光。

以前、権現京二の部屋へ移動できたように、和代の部屋へもすんな
り転送が成功した。

いずみは今、和代の部屋の中にいるのだ。

きれいできちんと片付いた部屋。しかもサンリオキャラクターグ
ズが多数置かれている女の子らしい部屋だ。

でも今は誰もいない。

『リビングかしら。。？』

いずみがそう思ったちょうどその時、部屋の外から足音が近づい
てきて、和代と一星が足早に入ってきた。

「ごめんね一星。リビングじゃ居づらかったでしょ？」

「てか・・・お母さんパートでいないんじゃないのかなかったのかい？」

「なんかね、夕方勤務の人と交代してくれて急に頼まれたんだっ
て。」

「そうなんだ・・・」

一星にとって1番最悪なことだ。和代と付き合うのをやめるつもりで来たのにまさか親がいるとは。

二人の目には映らないが、そばで見ているいずみは、『ほらみなさい。こういう可能性もあることは念頭に置いておかなくちやダメなんだから!』

と一星に鋭い視線を送っていた。でもそれは当然ながら彼に届くはずもない。

「あのさ・・・和代のお母さんてさ、旧姓が栗山とか？」

一星が唐突に尋ねる。

「え?・・・違うよ。何でそんなこと聞くの？」

「いや・・・似てる人を昔知ってたから。。気にしないでいい。ただ聞いたただけだから。」

「ふうん・・・変なの。」

一星は部屋を見回し、和代のパソコンに気づいた。

「女の子なのにデスクトップのパソコンで珍しいね？」

「そう?だってノートパソコンと比べたら、同じスペックで安いんだもん。」

「すごいな。和代がそんなことに気づくなんて。」

「あ!バカにしてるう!」

「いや、そんなんじゃないよ。アハハ。。」

いずみは無然としていた。

『アハハじゃないでしょうがっ!あなたは言うべきことをちゃんと言いに来たんでしょっ!』

その時、和代が自分のパソコンを見て首をかしげた。

「あれ?一星アタシにPM送った？」

「別に送ってないよ。だって俺ここにいるじゃん。」

「そうだよねえ。。ログも何も打ってないんだけど、画面だけ開い

てるのよ。」

（。。；）／ギク！ いずみに緊張が走った。

「メッセンジャーってよく不具合があるからさ。いちいち気にしてたらきりがないよ。」

「そ、そうよねえ。。」

『ナイスフォロー一星！；^|^A』

いずみは胸を撫で下ろした。

「近くのケーキ屋さんで抹茶ロール買って来たから一緒に食べようね。」と和代。

「わざわざよかったのに。。」

「すぐおいしいんだよその抹茶ロール。」

「そうなんだ。」

「もうすぐお母さんが切って持って来るわ。」

「うん。。。」

いずみに再び不安が押し寄せて来た。

『ダメじゃないの一星！完全に和代ペースじゃない！こんなんじゃ・』

そう独り言をつぶやいていると、部屋にノックの音がした。

「入るわよ和代。」

「うん。お母さんコーヒーも持って来てくれた？」

「もちろん！ほらこの通り。幸村さんだったわよね？」

「え？あ・・はい。」

「ゆっくりしてってね。（o^ー^o）ウフッ」

「もーお母さん、笑い方やらしい！早く行って！」

「はいはい。じゃあ幸村さん、またあとで。」

「はい・・・」； ヒヤリ

「あとでって・・・何考えてんのよお母さん。。（へーへ；）」

その一方で、いずみは開いた口がふさがらなかった。

今の光景を目の当たりにして、あまりの衝撃に言葉も失い、頭の中も真っ白になっていたのだ。

『お母さん・・・』一言ポツツとつぶやくいずみ。

そして。。。

『何で・・・何で私のお母さんが・・・和代のお母さんなの？何でよっ？？』

第42話

思い違いだった推理

いずみはショックのあまり、一星と和代の会話など耳に入らなかった。

彼女の視線は、和代の母・水口尚代一点に集中する。

コーヒーと抹茶ロールを部屋に運び終わり、すぐに出て行った尚代。

しばらく考え込んでいたいずみも、1分ほど遅れて彼女のあとを追う。

らちの明かない一星と和代の会話など、二の次になっていた。

リビングに戻った尚代は、エプロンをしたままテレビを観ながらコーヒーを飲んでいる。

和代からおすそ分けしてもらった抹茶ロールもそこにある。

「あら、本当においしい。」思わずそうつぶやく。

そんな彼女を傍からいずみがじっと見ていた。しかも正面からだけではなく、あらゆる角度から尚代を観察し、本当に自分の母であるかどうか確認しようとしていた。

『どこから見てもやっぱりお母さんだ。でも・・ただのソックリさんということも。』

まだいずみの確信には至らない。

ちょうどその時電話が鳴った。テーブルにコードレス電話の子機が置かれてあるので、尚代は立ち上がらずにそのまま手を伸ばして受話器を取る。

「もしもし、水口ですけど。・・え？ああ・・そうなんですか。」

電話で話す独特の声のトーンも母によく似ているといずみは思った。

「・・残念ですけど、事情がありでしたら仕方ありませんわ。じゃあ連絡網で明日のエアロビ教室の中止を伝達しておきますね。」

『（□；）！！・・エアロビ。』

いずみが過敏に反応するのも無理はない。

そう、いずみの母も長年エアロビをしていたという事実があるからだ。

「連絡網はどこにしまったかしら。」

電話を切った尚代がおもむろに立ち上がる。その後ろ姿を見ていずみがまたまた仰天する。

『Σ―11（▽；）―1！！ちょ・・ちょっとそれは。』

水口尚代は下着の上からエプロンをつけていたのだ。

当然、後ろ姿がパンツ丸見えであることは言うまでもない。

『やっぱり私のお母さんだっ!!』

自分の母がドジなことはいずみがよくわかっていることだった。以前にも同じことが何度あったと記憶している。エプロンをなかなか外さないのも母の特徴だ。

いずみはついにこの女性が母親であると断定したものの、なぜ和代の母親なのか見当もつかない歯がゆさにイライラが募るばかりであつた。

『もうお母さんに会えると思わなかった。。やっ与会えたのに。。それなのに。。』

いずみは権現に相談してみようと思った。一星もきつと気づいてるかもしれない。でも彼は今、和代とケリをつける問題が優先している。

『こんなデタラメな世界の中で私なんか復活できるのかな。。してはいけない世界なのかな。。』

いずみが深刻に悩み始めた。この一連の出来事で、彼女の推測が一気に崩れ落ちた気がしたからだ。

『私が全て間違ってたんだ。。ずっとデジャヴだと思ってたのに。。』

彼女はこれまでの見当違いの解釈に、今はっきりと見切りをつけた。

『こんなのデジャヴじゃないっ!!』

そう。デジャヴとは以前と同じ経験を繰り返していたことに気づくこと。

だが、一星の落ちた床下収納庫の件や、母が別な子の母親になっている問題といい、デジャヴという言葉だけでは済まされなくなった

のは紛れもない事実。

謎だらけの真実の中で、それだけは本能的に肌で感じたいずみであつた。

第43話

さよならの向こう側

和代はベッドに突っ伏して泣いた。

母に悟られないように大きなクッションに顔をうずめて泣いた。

さつき一星を玄関で見送ったときまでは我慢できたのに。

アタシは大丈夫だからって、精一杯の強がりで彼と別れたのに。

一星の姿が視界から消えたとき、大粒の涙がこぼれ落ちた。

「涙ってこんなにすぐ出るものなのかな。」

覚悟は最初からできていた。一星が家に来ると連絡が来たときから予感があった。

でも反面、正式に自分と付き合う告白をされる期待感も心の片隅にはあった。

だが、訪ねて来た彼の表情を一目見たとき、それはあり得ないことだと直感的に悟った。

「和代・・・今日は大事な話があるんだけど。」

「まずは抹茶ロール食べてからにしましょ！コーヒーも冷めちゃうし。」

「あ、ああ・・・」

どこことなく不自然な空気の中で、二人は無言でティータイムをする。

和代が会話のきっかけを作ろうと話し出す。

「一星のお気に入りのお店ってどこがあるの？」

「んー、俺はラーメン屋ばっかだな。ケーキ屋はないよ。」

「アタシもラーメン好きよ。一星は何派？アタシは醤油派なの。」

「俺はとんこつ派かな。」

「そうなんだ。」

再び会話が途切れてコーヒーをすすする音が妙に響く。

「まだ一星と一緒にラーメン食べに行っていないよね。」

「・・・そうだな。カレーうどんなら食ったけどな。」

「あゝ覚えてた？一星の服、カレー汁が飛び散ってすごかったもんねw」

「・・・うん。」

「じゃあ2回目のデートで何食べたか覚えてる？」

「・・・あのさあ和代。大事な話っていうのは・・・」

「ちょ、ちょっと待って。コーヒーおかわりする？」

「いらない。話していい？」

「あ、でも・・・アタシがおかわりしたいからちょっと待ってて。」

「いいよ。」

部屋から出た和代は心臓が脈を打っていた。

とにかく落ち着こうと、ダイニングでコーヒーのおかわりを注いだあと、リビングを覗いてみる。

母の尚代がまた下着にエプロン姿で何か探し物をしていた。

『まったくもう、お母さんたら。』

今の和代に母に注意する余裕など全くない。自分を落ち着かせるだけで精一杯なのだ。

そして再び自分の部屋の前に来る。

『覚悟を決めなきゃ。。』

和代が部屋に入る。一星は抹茶ロールも食べ尽くしてした。

「一星、抹茶ロールもまだあるよ。」

やはりつい、本題から避けようとしている自分がいる。

「いない。とにかく話そうよ。」

「う、うん。」

和代は一星と差し向かえに座る。でも彼と目を合わせる事ができずに、胸元に視線を落としている状態だった。

「俺、毎日ずっと考えてたんだ。ずいぶん悩みもした。」

「アタシとのこと・・・？」

一星がうなづく。

「和代のこともロビンのこともなんだけど・・・」

「一星、結論から言ってくれない？まわりくどい説明って、正直心臓に悪いしアタシ耐えられない。」

「・・・そっか。じゃあ・・・」

「ちよっと待って！先にトイレ行かせて。」

「（ノ　　）ノコケッ！！・・・いいよ。行っておいで。」

トイレで深い深呼吸をして和代は覚悟を決めた。

どんなことがあっても絶対泣くもんか！彼の前では絶対泣かない！自分が惨めになるだけだ。『アタシも頑張るから一星も幸せになつてね！』と言ってあげるくらいの余裕をブチかましてやらなければ。。。

「ごめんね何度も部屋から出ちゃって。」

「もう大丈夫だよね？」

「うん。」

「じゃ・・・和代の希望通り結論から言うと。。。」

「・・・・・・・・」

「いずみ・・・いや、ロビンがどうしても忘れられないんだ。ごめん。」

「。。。。。」

予想がわかっていたとは言え、目の前で言われる威力は絶大で、和

代が放心状態になるのも無理はなかった。

「本当にごめん。。彼女とリアルで会えないのはわかってるんだ。でも・好きだって気持ちにに理屈はないんだ。」

「。。。。」

「これからロビンとどうなるかなんて、予想すらできない。このままで終わるかもしれない。でも、自分の気持ちが割り切れないまま和代と付き合うのって卑怯だと思うんだ。もう卑怯なことをしてしまっただけだね・・本当にごめん。」

「アタシじゃ・・やっぱり役不足だった？」

「心が浮ついたまま和代を抱いたことは反省している。君に何を言われても仕方ないと思ってる。」

和代は突然、今の一星の発言に声を荒げた。

「ちよっと待って！アタシを抱いたことを反省なんかしないで！アタシはあの時、それでもいいって言ったはずだよ！アタシは後悔してない。一星が好きだもの。好きな一星に抱かれたんだもの。。」

「・・・悪かった。」

「いずみっていうのね。ロビンの本名。ネット親友のアタシにも絶対に教えてくれなかったわ。。」

「事情が色々あるようなんだ。」

「アタシも悪かったのよ。一星がアタシを抱いたらずっとアタシをだけ見てくれると思っていたの。」

「・・・」

「でもそれは間違ってた。最初からこうなるのはわかってたことなの。。でもアタシはそれを認めたくなくてデートの度に一星の気を惹くことばかりしていた。」

「いや、俺が優柔不断だったから。俺を恨んでも構わない。ロビンは恨まないでくれ。」

「正直、彼女には嫉妬するけど、恨みなんかしないわ。略奪しようとしたアタシの責任も大きいもの。でも・・」

「でも？」

「本当にいいの？リアルで彼女と会えなくても。」

「いつかは実現できると思ってるよ。」

「そう。。」

「ごめんな。ご馳走になってこんな話しちゃって・・・殴りたければ殴っていいよ。」

「じゃあ・・・刺していい？」

「（。。；）／ギク！」

「（O^ー^O）　ウフツ。ウソよウソ！」

「（ー；　ヒヤリ・・・良かった。。」

「ロビンとうまくいくといいね。」

「強いな和代は。普通そんなこと言えないぞ。」

「アタシって結構、割り切りが早いだよ。」

「そ、そうか。。」

そんなはずはなかった。今できる和代の精一杯の強がり。ここで泣いたり取り乱したりなんて絶対にできない。

「だって一星には最初からロビンしかいなかった。アタシが介入したところで人の愛情なんて簡単に動くものじゃないわ。あなたが迷い始めた時点で結果は見えてたようなものだった。」

「・・・和代とは友達としてこれからも付き合えないのかな？」

「・・・ごめんなさい。アタシ、そんなに起用じゃないから。アタシの中ではNGなの。」

「そっか・・・わかった。じゃあ・・・そろそろ帰るよ。」
「うん。。」

玄関まで来ると、すでに和代の目は涙で潤んでいた。ちよつとの刺激でも大粒の涙がこぼれ落ちるくらいに。

一星はそれに気づいてはいたが、精一杯の彼女の演技を尊重しようと思った。

そして笑顔で別れを告げよう。。

「短い付き合いだったけど、楽しい時間をありがとう。さよなら和代。」

「さよ・・さよなら一星。。」

やっと出た声。でも表情だけはできるだけの笑顔で彼を送り出した。

「さよならポンスケ。。」

一星が帰宅して、部屋のベッドで天井を眺めながら放心状態でいると、玄関から母の静子の声がした。

「一星、これ誰のサンダル？」

「え？」

急いで現場に向う一星。そして静子の眺めているサンダルを見ると、明らかに似てはいるが他人のサンダルだった。

「いけね・・和代んちのだ。。」

「バカだねあんた。人の家へ行くのに着の身着のままで行くからだよ！」

「ヤバイな。。もうあの家には行けないよ。。」

その時、玄関のチャイムが鳴った。

「はい、どなたですか？開いてますからどうぞ。」と静子。

そつと扉が開いて中年の女性の顔が現れる。

「すみません。失礼致します。こちらに幸村一星さんは・・あつ、あなたね。」

「Σ―11（▽；）――1和代・・さんのお母さん！！」

「サンダルを取り違えてたようなので持って来ましたよ。」

「ここまでわざわざ申し訳ありません。。」

「ちようど買い物がてらに車で来たついでなので。」

「よくここがわかりましたね？」

「娘が地図で教えてくれましたから。あの子に行けって言ったら行かないって言うんですよ。」

「そりゃそうでしょうね。。（^| ^;）」

「えっ？」

「いや何でもありません。。わざわざ本当にすいません。僕がドジなばかりに。」

「それではこれで失礼します。」

「ほら母さん。俺のドジだけど、母さんからも一言お礼言っで。」
「。。。。。」

「母さん？母さんっ？」

静子が仰天した顔で和代の母を見ている。

一星もそれが何を意味するのかハッと気づいた。

『そういえば、俺がキッチンから落ちた向こうの世界では母さんとこの人が一緒にいたんだ。。』

静子が震える声で和代の母に尋ねる。

「あなた・・・尚代・・・さんですか？」

不思議そうに尚代が聞き返す。

「はぁ、私は尚代ですけど・・・どこかでお会いになりました？」

第44話

記憶のつじつま

「いえ・・・あの・・・それは。。。」

静子は言葉に詰まった。

「???」

「あの・・・昔エアロビ教室へ見学に行ったことがありまして。。。」

「あら、藤木先生の教室へ？」

「はい。。」

「それなら私も奥様を覚えてるはずだけど・・・」

「いえ、2回でやめましたから。生徒さんも多かったし、私は印象のうすいタイプなので。」

「何もそんな・・・私が覚えてなかったようですね。。それは本当に失礼しました。」

「いえいえ、お気になさらないで下さい。」

「そのとき、奥様と何かお話したことあったかしら？」

「・・・それがないんですよ。他の方が奥さんの名を呼ぶのを聞いてたもので。」

「はぁ・・・でもそれだけで名前を覚えてらっしゃるなんてすごいですわね。」

静子の口からとっさに出た苦し紛れのこじつけ理由だった。

内心では今も胸がドキドキ脈を打っているが、どうやらうまく信じてくれそうなムードなので少し安心感も出てきた。

そこで静子はつい油断から、一言多い言葉を発してしまう。

「栗山尚代という名が偶然に印象に残っていただけです。奥様はエアロビとても上手でいらしたから、私見入ってましたもの。」

「栗山？・・・私、水口和代ですけど？」

「（□；）！！えっ？」

「あ、ごめんなさい。昔のことですものね。覚え違いもあるでしょうし。」

「は、はぁ。。すみません奥様。」

「いいですよ。お時間がありましたらまたエアロビにいらして下さい。」

「え、ええ。。うちの子のためにわざわざありがとうございます。」

「いえいえ、気になさらないで。そう言えばこの家の土地、私が結

婚して家を建てる時に購入しようとしたことがありましたのよ。」

「（。。。）／＼ギク！・・そうでしたの。。。」

「ごめんなさい。もう済んだことなのに・・余談でした。ではこれで失礼致します。」

こうして、最後は母親同士の会話でこの場は幕引きとなった。

玄関から居間に戻る途中の静子が小声で、

「どうして苗字が栗山が水口になってるのかしら。。。」

と呟いたのを一星は聞き逃さなかった。

すぐさま一星も自室に戻り、パソコンを立ち上げていずみを呼ぶ。

pon su ke .. いずみ、いるか？さっきの聞いてたか？

ro bin 830 .. うん。。私も玄関にいたから。

pon su ke .. あの和代の母親は、俺がキッチンの穴の向こうで見た人にすごく似てたんだ。

ro bin 830 .. 似てたんじゃなくてきっと本人よ。

pon su ke .. なぜそう言いされる？

ro bin 830 .. だって・・私のお母さんだもの。

pon su ke .. やっぱりそうか。和代の母親だってことも知ってたのか？

ro bin 830 .. 今日まで全然知らなかったわ。

pon su ke .. でも不思議なのはどうして苗字が違うかだ。

ro bin 830 .. それは・・想像つくと思う。。。

pon su ke .. うん。。確かに。

ro bin 830 .. 世界が違うもの。キッチンの穴の向こうこっちでは。

pon su ke .. 向こうではいずみの母親・栗山尚代で、こっちでは和代の母親・水口和代か。。。

ro bin 830 .. きっと歩んで来た人生が違うのよ。だから私はこっちでは生まれない。だから私の存在がないんだわ。

pon su ke..そう考えるのが妥当かもしれないな。

ro bin 830..うん。。

pon su ke..あ、そうだ！俺ってバカだった！

ro bin 830..どうしたの？一星。

一星はパソコンのログを打つのをやめた。

「いずみはこの部屋にいるんだったよな？」と声で話す。

ro bin 830..うん。一星のとなりで一緒にモニター見てるよ。

「だったら俺がログ打つ必要がなかったじゃんw」

ro bin 830..そう言えばそうね。私は一星の声が聞こえるから。

「じゃあ、俺はしゃべるだけにするから、いずみはパソコンに返事してくれよな。」

ro bin 830..うん、いいよ。

「で、俺の母さんのことだけどさ。こっちの世界の人間なのにいずみのお母さんを知ってるなんておかしくないか？」

ro bin 830..そうよね。栗山の姓を知ってたものね。普通ならあり得ないわ。

「でも母さんには聞けないよ。最近衰弱し切ってるし、精神的にも弱ってる。」

ro bin 830..じゃあ私たちで考えられるだけのことを推理してみましよう。

「ああ。それでダメなら母さんに聞くよ。何か知ってることは間違いないからな。」

ro bin 830..でもそれが原因で今の精神的なダメージがあるとしたら、お母様が大変なことになっても困るわ。

「うん。だからそれは最後の手段にしよう。まずは何から・・・」

ro bin 830..そうね。。私が気になったのはエアロビ。私が母と一緒に暮らしてたときも母はエアロビに通ってた。

「（。。。）ほー。そうなんだ。で、それが何か問題でも？」

robin830..私、最近全然デジャヴを見ないのね。そしてその記憶と入れ替わるように、私の最後の記憶ばかり思い出すの。」

「最後って・・・自分が死ぬ瞬間ってことか？」

robin830..それが違うの。鮮明に思い出すのは私が仕事から帰宅してこの部屋で着替えてたこと。」

「この部屋？あ、そっか。向こうの世界ではこの家にいずみたちが住んでたってことか。」

robin830..そういうこと。で、話しの続きだけどね、母はあの日もエアロビの帰りだったはずなのよ。

「うん。。」

robin830..しかもエアロビの友達を誰か連れて来るって言うってたの。

「誰が見なかったのか？」

robin830..うん。。ただね・・・その後悲鳴が聞こえた気がしたのね。

「そ、それで？」

robin830..それがそこまでの記憶なの。

「（（ノ―ω―）ノバタ・・・その後の記憶はないのか？」

robin830..そのあとは・・・一星と一緒にここにいたのよ。存在のなくなった私としてね。

「そうか。。。でも今の話を聞いてわかったことがあるよ。」

robin830..なに？

「そのエアロビの友達俺の母さんだってことさ。」

robin830..うん。私もそう予想するわ。

「間違いないさ。俺が行ったキッチンの穴の向こうの世界は、正にいずみが言ったその場面だったんだから。」

権現の推理

栗山いずみは転送で再び権現京二ごんげんきょうじの部屋に来ていた。

自分の母親が水口和代の母親になっていたことや、幸村一星の母親が、いずみの母を知っていたことなどを報告して、真相に近づこうとしていた。

「それは変だな。幸村が落ちた穴の向こう側の世界を、母親も知っているように思える。」

「でしょう？ 私もそう思ったの。栗山の姓を知ってるなんてあり得ない。」

「ああ。エアロビで知ったと言っても、こっちではお前の母親の姓は水口だし。」

「あのー、いつからお前呼ばわり？（^|^-;）」

「いいじゃん。付き合ってたんだぞ俺たち。」

「デジャヴらしき前の話は却下します！」

「ちっ！」

「それにしても一星のお母さんが気がかりよ。ひょっとしたら・・・」

「なんだ？」

「権現君と同じような能力を持ってるのかも？」

「ん？俺と同じ？」

「そう、二通りの歩んできた道を経験してるの。デジャヴじゃなくてね。」

「そうかもしれないが・・・でも単にそれだけじゃないと思うな。」

「何か人に言えないことを隠してるってことでしょ？」

「それもある。」

「それもって・・・他にはどんなことがあるの？」

「とにかくだ。前にも言ったけどさ、一星の母親は存在感がとても薄いんだ。」

「その薄いつてどういうことを意味するの？」

「俺には幸村より母親の方が透き通って見えそうなくらい存在が薄

いんだ。」

「だからそれが何を意味するのよ？」

「俺の勘では・・・幸村の母親はこっちの世界の人間じゃないと思う。」

「え？何？どういうこと？」

「おそらく幸村の母親は、例の穴の向こうからやって来た人間じゃないかってことさ。」

「じゃあ一星もってこと？」

「いや、幸村はたぶんこっちで生まれたと思う。」

「ちよっとイマイチわかんないんだけど・・・」

「何が？」

「穴の向こうの世界よ。一星が言うには向こうに私や私のお母さんが普通に暮らしてたって。」

「うん。。。」「権現は考え込んでいた。

「あの床下収納庫の向こうでは全く別な世界が進行してるのかな？」
権現はすぐには答えずに更に考え込んでいた。頭の中で今わかっている事実を整理しているのだ。

そしてゆっくりといずれの質問に返答する。

「いや、それはないんじゃないかな・・・」

「なぜ断言できるの？」

「それはだな。一星が偶然穴に落ちて消えた時、お前の姿が一瞬復活したじゃないか。」

「うん。2，3分だけだね。」

「それは幸村が戻って来たからだ。その瞬間またお前は消えた。つまりこっちと向こうは連動してるんだ。互いの世界が勝手に進行してるわけじゃないってことさ。」

「影響し合ってるってことね。」

「そう。だから結論から言えば、この原因を作ったのは幸村の母親だ。彼女が何らかの理由で向こうの穴からやって来た。少なくとも24年以上前だろうな。」

「お母様はこっちの世界に来てから結婚して、一星を産んで育てたってことね。」

「その通り。今はこの世界がメインなのさ。ってことは・・・ってことはだ・・（。○。；）ハッ！」

権現が急に何を思いついたように飛上がった。

「何か気づいたの？」

「そっか・・それなら理屈も繋がるし説明がつく。」

「ねえ、早く言ってよ！」

「俺が想像するに、あの穴の向こうはきっと幸村の母親がこっちに来る直前までの世界なんだ！」

「ということは24年前ってこと？」

「そう。だから向こうの世界はそれ以上進行していないはずだと思う。それ以降はこっちの世界に切り替わったってことさ。お前の最後の記憶だってその場面だったんだろ？」

「うん。確かにそうね。一星が穴の向こうで体験して来た場面に間違いないわ。」

「ほら、つじつまが合った。」

「じゃあ仮に、もう一度あの穴に落ちたとしたらまた同じ場面に出くわすことになるの？」

「ああ、何度でも同じ場面が繰り返されているんじゃないかな。」

「すごい自信のある意見ね。ただの推理にすぎないのに。」

「だって俺は人生を二通り経験した記憶がある超能力者みたいなんだぞ。甘く見るなよ。」

「誰も甘く見てないわよ。感心してるの。」

「でもな栗山。問題はこれからどうするかだぞ。」

「そうよね・・事実がわかってもしたらいいか。」

「いいか、はっきり言えることはだ。お前と幸村は一緒に存在できないってことだ。」

「それをできるようにすることを考えるんじゃないの？」

「無理だよそれは。お前はこっちでは生まれてないから存在がない

んだ。その代わりに幸村が生まれた。」

「一星のお母様と私の母は別人だわ。それなのに何でよ？」

「要するにな・・幸村の母親は、例の穴からこっちの世界に来たせいで、お前の母親の人生に何らかの影響を与えてしまったんだよ。」
「何らかつて？」

「そんなの俺にわかるはずないだろ！本人に聞いて来いよ！」
「でも・・信じられない。」

「幸村の母親の名前はなんてったつけ？」

「確か静子。」

「その静子が、栗山尚代の進むべき歴史を変えたのには間違いない。」

「そのせいで私の母は、私の父じゃなくて、水口っていう別な男性と結婚したことになるわけね？」

「ああ。」

「そして和代が生まれた。。どうしよう・・しっかりつじつまが合っちゃったよお。」

「悲しいのか？正しい推理ができたかもしれないんだぞ？」

「だって・・私の立場はどうすることもできないもの。」

推理が正しいと思えば思うほど、せつなさも込み上げてくるいずみであった。

それをじっと見つめる権現。やがて何かを決意したように彼女に話しかける。

「栗山、方法はあるぞ。」

「Σ（・◇・＊エッ！？教えて教えて！」

「要するにお前がここに存在できればいいんだろが？」

「そうだけど。」

「だったら心して聞けよ。」

「うん。。」

「・・幸村をもう一度、あの穴に落とせ。」

「（・・）エッ・・？」

「そしてあのキッチンの穴を密閉するんだ。戻って来れないようにな。そうしたらお前の存在は復活する。」

「!!!!!!」

「それしかない!」

(続く)

第46話〜50話

第46話

定めの運命か切り開く運命か

「なんでそんなこと言い切れるのよ？」

「現に幸村が落ちたときそうだっただろが。」

「そんなの一次的なことだったらどうするつもり？」

「それはないな。」権現京二は妙に冷静だった。

「どこからその自信が生まれてくるのよ！」

「俺の勘は99%いつも正しい。」

「自惚れすぎじゃない？」

「いや、幸村が穴の向こうへ行ってしまったえば、奴はこっちの世界で産まれないことになるんだぞ。だからお前が現れた。今の歴史がまた変化するんだ。」

「でも一星のお母様はちゃんというのよ？これはどう説明できるの？」

「あ、そうだった。それすっかり忘れてたw」

「（ノ　　）ノコケッ！！・・・99%正しいなんてよく言えたわね。」

「いいじゃんか。100%とは言わなかったんだからよ。」

権現がふてくされ気味で反論する。

「あ、開き直った。間違いを認めたのね？」

「うーん・・・いやでもなあ。」

「考え直してよね！今日一日ですぐ結論出せる問題でもないでしょ！」

いずみは権現の意見が間違いであることを願って語気も荒くなっていた。

一星を穴から落とすなんてとんでもないことだ。男同士の親友なく

せによくそんなことが言えたものだと思ふ不思議に思ふいづみ。

それからまた数分考え込んでいた権現が再び口を開く。

今度はさっきより言いづらそうだった。

「やっぱさあ・幸村は落とした方がいいなあ。」

「Σ（・◇・＊エツ！？なんでよおお！、（・（・）ノムキイ」

「奴の母親はしばらく残ってるかもしれないけど、いずれ消えるよ。自然に。」

「なんでわかるのよ！」

「言っただろ。俺には母親が透き通るほど薄く見えるって。どっちにしても違った世界から来た人間は消える運命なのさ。存在が薄いのはきつとそれを意味してるんだと思う。」

「仮にそうだとしたら、自然に消える人を私たちがどうこうする必要はないでしょ！」

「そうなるまでには何年かかるかわからないんだぞ。何十年先かもしれないし。一星なんかじじいになるぞ。そしてお前もこのまま。」

「でも……」

「だから俺たちがきつかけを作らなくちゃならないのさ。それが俺たちの運命かもしれない。一星たちに関わる運命にあったんだ。」

「関わったとしても人に手を下すなんて。」

「人聞きの悪いこと言うなよ。殺すわけじゃないんだぞ。一星を穴に落とすだけだ。」

「同じことよ。」

「全然違うっ！！あの穴は言わば、時間のひずみだ。死ぬわけじゃない。幸村は向こうで生きてゆける。」

それを聞きたいいづみはハツとした。そして確かめるように権現に問う。

「でも一星が向こうへ行くと・今の私みたいな状態になるんじゃないの？」

いづみは一星を心配した。今の自分の状態。先のわからぬ運命

に昔は何度も死にたいと思った。

だが自分で死ぬことすら許されない。実行すらできない。それを充分わかっていいるいずみには、一星をそんな状態に追い込むなどできるはずもない。

「（；――） Ⅱ3 フウ」と、権現が深いため息をつく。

「いいかよく聞け！人のことより自分のことを心配しろよ！じゃあお前はこのままでもいいのか？」

「そりゃ・・良くないけど。」

「だろ！ちゃんとここに存在するために耐えて来たんじゃないか！食べることも飲むことも眠ることもできずに、そして人と話すことも外出することさえもできなかった。そうだろう？」

「うん。。。」

「俺だったら耐えられない。絶対狂っちゃまうだろうな。でもお前はそれを耐え抜いた！そしてゴールはついに目の前なんだぞ！わからないのか？このチャンスを！」

「そうだけど・・一星を陥れるなんて。。私たちずっと恋人だったんだよ。そんなことできるはずないじゃない！」

「誰もお前にやれって言ってないだろ。お前は存在してないんだし奴に触れることもできない。俺がやってやるさ。」

「待ってよ！」

「何が待ってだ。お前はここまで限界を超えた状態を乗り越えて来たんだろ。またこのまま続ける気か？」

「わからないよ。。どうしたらいいか。。。」

「（；――） Ⅱ3 フウ」再び権現がため息をつく。

「あのな、前にも言ったけどさ、栗山と幸村が一緒に存在することは永遠にない！奴のことは諦めろ。」

「・・・でもそれを実現させるんだって信じて考えて来たのに。。」「無理なんだよもう。いい加減自分の身のことだけを考えたらどうだ？」

「。。。。。」

「俺はここまでお前の話を聞いてきた。辛い過去もわかるしそれに少しは答えてきたつもりだ。」

「。。。。」

「今お前の姿が見えるのは俺だけだし、相談にのれるのも俺だけだ。」

「・・ごめんね。。迷惑ばかりかけちゃって。。」

「そうじゃなくってさ・・むしろ相談ならいくらでも聞いてやるさ。俺を頼りにしてくれよ。どんどん相談してくれよ。苦しかったら俺をはけ口にしてかまわないからさ!」

「・・ありがとう。権現君て口悪いけどやさしいんだね。一星にも言っておかなくちゃ。本当はいい人なんだって。」

「あのさぁ・・お前まだわかんねえかなぁ。。」

「???」

「俺はな・・俺はお前がずっと好きなんだよ!大好きなんだよ!クラスメートだった頃からずっと気持ちは変わらないんだよ!」

「!!!!!!」

「社会人になってからお前と付き合ってたのにこんなことになったまて。。お前はあの時、俺を好きになってくれてたんじゃないのかよ?」

。　　いずみは呆然となった。まさかこの場面で権現に告白されるとは。

自分が存在していた遠い過去。確かにそのときは彼と交際していた。でも今はずっと一星ひとすじ。権現は頼りにはなるが恋人の対象としては考えたこともない。

そんな中での権現に発言にいずみは戸惑いを隠せなかった。

「栗山!俺と付き合え!また前みたいに付き合ってくれよ!早く復活して俺と暮らそう!」

「。。。。」

返す言葉が全く見つからないはずみ。

「お前の存在の復活が全てじゃないのか？そうなるために頑張ってきたんじゃないのか？俺はお前を一生面倒見れる。悪いが幸村には絶対不可能なんだぞ！」

「。。。。」

「俺は高校のときからクラスメートだったはずのお前が存在していないことに気づいて、恥を承知であちこちに尋ねまくった。そしてしまいにはまわりから精神病患者扱いされて学校を去らなければならなかった。それから数年経って社会人になってようやくお前にたどり着いたんだ。」

「・・偶然ではなかったってことなのね？」

「そう、カラオケで幸村と出会ったのも偶然じゃない。不思議な力に導かれてそうなった。だからこれから起こることも全ては導かれて起こる当然のことだと思えばいいんだ。」

権現の表情はいつもと違って真剣そのものだった。

「私にもうちよっと・・時間くれないかな？」

今言い出せることのできるいずみのセリフはこれしかなかった。

「あ、ああ・・でもなるべく早い方が、栗山の復活も早いんだからな。。。」

「うん。。。」

だが、人の運命というのは、そう計算通りに事が進むものではないかった。

世界は権現といずみだけで変えられるわけではないことをこの後、身に染みて気づくことになる。。。

第47話

罪にならない罪

「誰なの!？」

振り向かずに座ったままうつむき加減で呟く静子。

彼女は長年ずっと人の気配に悩まされている。

誰かが家を歩まわっている・・・

このことが常に静子の精神状態をおびやかしていた。

いつまでも解決しないこの問題に、きっとこれは妄想なんだと無理矢理言い聞かせて来た。

一時期は死んだ亭主が会いに来ていたかと思ったりもした。

でも姿や声が聞けない現実には、自分だけの独り言が家に響くのみ。

むなしい・・・ただそれだけ。

静子の状態は自然な流れで鬱へと入り込んで行った。

だが、最近の一連の出来事。一星をも巻き込む重大な問題。

静子はあの時、すっかり悟ったのだった。一星がああ床下収納庫から落ちた日。

そしてすぐに戻って彼から聞いた話の内容。

『私は何人もの人に迷惑をかけている。。。』

そう確信した静子は、長年感じていた人の気配の理由もそこにあると思った。

おもむろに立ち上がった静子は、一星が入浴している隙を見て彼の部屋へ入る。

『この部屋が一番気配を感じる。。。』

そして辺りをくまなく見回すと、パソコンの画面が目に入った。

そばで静子の様子を不安げに見ている”姿なきいずみ”が仰天する。

『あっ! マズイ! 私と一星のチャットログがそのままに・・・』

一星はよくヘマをする。しっかりしているようで抜けている一面も結構目立つ。

それは自分もわかっているようで、だからチャットIDも自ら『ボンスケ』にしたのだろうと予想がつく。

『なんでパソコンくらい消して行かなかったのよ。もう・・（一；）』

いずみがそう後悔してもあとの祭り。静子は画面に釘付けになり、一星とロビンの会話を読んでいた。

●静子の目に留まった二人の過去ログより

p o n s u k e ..いずみ、いるか？さっきの聞いてたか？

r o b i n 8 3 0 ..うん。。私も玄関にいたから。

p o n s u k e ..あの和代の母親は、俺がキッチンの穴の向こうで見た人にすごく似てたんだ。

r o b i n 8 3 0 ..似てたんじゃなくてきっと本人よ。

p o n s u k e ..なぜそう言いされる？

r o b i n 8 3 0 ..だって・・私のお母さんだもの。

このログを読んだ静子は度肝を抜かれた。

特にロビンが言ったこの言葉。”私も玄関にいたから”

そう、やっぱりこの家には目には見えない誰かがいたのだ。

そしてそれがこのロビンという女性ということになる。

しかもこのログから察すると、この娘は尚代の娘らしい。

画面のボンスケという名は一星だということがわかる。

更に静子が何より驚いたのは、一星がこの見えない子とコンタクトをとっていることだった。

シヨックと戸惑いが隠せない静子。

更に続くチャットのログをスクロールしながら読んでゆく。。

robin830..世界が違うもの。キッチンの穴の向こうとこち
ちでは。

pon suke..向こうではいずみの母親・栗山尚代で、こっちは和代の母親・水口和代か。。

静子には焦りが出ていた。自分の子供・一星がまさか真相を探ろうとしていたとは。。

パソコン画面から視線を外し、部屋でおろおろする静子と、不意に天井を見上げて小声で囁いた。

「ロビンさん。。あなたはこの部屋にいるんですか？」

「（。。;) ギク！」

ついに一星の母親にもわかってしまった。。

だがいずみはチャット画面に返信はしなかった。

静子はじっと天井を見たまま少しの間沈黙を保っている。

実際のところいずみは天井になど貼り付いてるわけもなく、一星のベッドわきから静子と一緒にパソコン画面を見ていた。

やがて静子が口を開く。

「ロビンさん、あなたはずっとこの家にいたんですか？一星が生まれたときからずっと姿の见えないままで、共に今日まで歩んで来たんですか？」

いずみはかたくなに返事を出さない。

更に静子は語りかける。

「できればこんなことはウソであって欲しい。。でも・・私は一星を産んだときからあなたの気配は感じていました。今日までそれが誰であるかもわからずに。。」

「。。。。。。」

「ロビンさん、ごめんなさいね。。全て私が悪いんです。あなたを25年もの長い間、そんな状態のまま苦しめ続けていたなんて思いも寄らなかつたんです。それだけは信じて下さい。」

「・・・・・・・・」

「こんなことになっているのがもっと早くわかってたら・・・もっと早く。」

静子の目には涙がじわじわと込み上げてきた。そして姿の見えぬいずみに謝っていた。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。」

最初は驚いていただけのいずみであったが、静子の流す涙を見て、自身も徐々にこらえ切れない気持ちになる。

『お母様はわかってくれたんだ。私の存在も私の気持ちも。そうだ。そうなんだ。』

長かった。ここまでわかってもらえるまでには気の遠くなるほど長い道のりだった。

一星がパソコンを買ってチャットをするようになるまでは、誰とも会話もできず、存在すら気づかれない地獄の日々。

むしろ地獄の方がいいのと思った時も数え切れないほどある。

robin830..私をわかってくれてありがとう。お母様。

いずみは画面に返信した。

それを見た静子は耐え切れなくなって号泣する。

ちやうど風呂から上がった一星がその声を聞いて慌てて部屋に飛び込んで来た。

「母さんっ！どうした？何があった？」

すぐさまパソコンの画面に気づく一星。そしてログを見る。

「いずみ・・・母さんに正体を言ったのか？」

robin830..いいえ。お母様の方が私に気づいたの。全てわかっていたわ。

静子は自分に言い聞かせるように独り言をしゃべり始めた。

「私はとんでもないことをした。。とんでもないことを。」

「母さん、落ち着いて。もっと冷静になって！」

「まさか人に迷惑をかけていたなんて・・きつと何人にも迷惑をかけてるんだわ。。」

「母さんてばっ！」

「そうよ・・尚代の運命だって変えてしまったのかも・・」

「母さん、それはまたあとで話そう。とにかく自分の部屋に戻って横になろう。」

一星に肩を抱かれて静子は放心状態のままこの部屋を後にした。

第48話

夢の狭間で

いずみが静子に素性を知られてから4日が経過した。

この間、静子は毎日のように、一星が出勤した後すぐに彼の部屋に来て、いずみに詫びを告げていた。

見る度にやつれていくようで、いずみも心苦しかった。

”お母様、もうそんなに謝らないで”と言いたかったが、朝は一星がパソコンの電源を落としているため、静子に自分の今の気持ちを伝えることができない。

しかもどういったいきさつでこうなっているのかもよくわからないのに、毎朝頭を下げに来る静子。

いずみはその理由がどうしても知りたかった。

一星はあれからこの件については静子とあまり会話をしない。精神的に落ち着かない母親に根掘り葉掘り聞くことができないでいる。

そんな中、権現京二が今週末にこの家に来ることになった。

そう・一星をあの床下収納庫に落とすために。
いずみはせつなさで罪悪感で心が激しく揺れている。

『このままだと一星の姿を二度と見られなくなる。。大好きな彼を
陥れてそれで私は本当に幸せになれるの？』

自問自答を何度も繰り返すいずみ。

一緒に存在のできない絶望感と、その歯がゆさに胸が張り裂けそうになる。

権現と話した推理を交えて一星とも話し合いをしたが、解決策は何ひとつ浮かばなかった。

そう思うと一瞬ではあるが、この原因を作ったであろう静子に対して憎しみを覚えたりもした。

『一星を落として権現君と付き合うのが私の運命？ホントにそれでいいの？』

一方、静子は家事を適当に済ませ、リビングのソファにもたれかかっていた。

疲労と倦怠感が著しく襲ってくる。夜の睡眠も熟睡できたことがない。

静子にとっては今の時間の方が夜の寝室よりも心地の良いひとときだった。

夢見心地でウトウトしていると、目の前に誰かの人影がうつすら見えてきた。

真っ白な背景の中で徐々に浮かんでくる人影。。

『これは現実じゃない。。夢よ。今私は夢の中にいるんだ。。』

静子がそう思うのをよそに、その人影はハッキリとした形を帯びて

きていた。

「（□；）！！あなたっ！！」

思わず叫んだ静子。

そう、今日の前に現れている人影は、若くして亡くなった静子の夫であつた。

「あなた・・本当にあなたなの？それともこれは単なる私の夢？」
夫はにこやかに微笑みながら口を開いた。

「お前が随分悩んでるから来たんだよ。」

「えっ？・・じゃあどうしてもっと早く出て来てくれなかったのよ。
私、ずっと苦しくて苦しくて。」

「そんなしょっちゅう来れる訳でもないんだ。」

「・・よくわかんないけど・・ねえ、私これからどうすればいいの？
教えてお願い！」

「お前はずっと今まで、自分のしたことへの罪悪感で苦しんでいる
んだよな。」

「そうよ。そうなの。自分では気づかずにいろんな人の人生に迷惑
をかけてしまつて・・」

「そうか。」

「あなたにだってそうだわ。私と結婚しなければあなたはもっと幸
せで長生きできたかもしれない。」

「それは違う。これは運命だったのさ。そんなこと考えるな。俺が
浮かばれないだろ。」

「（。○。；）ハッ！ご、ごめんなさい。」

「いいかい？もっと楽な気持ちで話を聞きなさい。」

「もう私、疲れました。あなた、私をそっちに連れてって下さい。
もう楽になりたい。」

静子の目は一気に涙で溢れた。

「お前にはまだすることがあるんだよ。俺のところへはいつでも来

れる。」

「もう何もしたくないの。。私に何ができるって言うの?」

「まあ聞きなさい。深呼吸して落ち着いて。」

「はい。。」言われるままに実行する静子。

「お前がこれからすることは、自分を解き放つことなんだよ。わかるかい?」

「解き放つって・・・こういうことかわからない。」

「お前は这个世界では呪縛されてるのと同じだ。がんじがらめで身動きも取れないでいる。」

「ええ、それはわかってる。。でもどうやって。。」

「だから、这个世界では!ってことだよ。」

「・・・あ!」

「わかったかい?」

「私がこの世界から離れたらいいの? キッチンの穴に入ればいいってこと・・・?」

静子の夫はそれに答えず無言で微笑んでいる。

「ダメよそれじゃ。私だってそれは考えたわよ。でもダメなの。」

「どうして?」

「私はここに来てからあなたと結婚して一星も産まれた。その事実を消すことになるのよ。私があゝの穴に落ちるとあなたと結婚したことはないし、一星の存在も消えてなくなってしまうの。。そんなこと絶対にできない!!」

静子の懸命な説明に、夫は表情を変えもせず、にこやかなままだった。

「はたしてそれはどうかな?」

「えっ?」

それ以上、夫の言葉はなかった。彼の姿は再びうつすらと消え始める。

「あなた待って!! まだ話したいことがいっぱいあるの。一星のことも私のことも!!」

いくら静子が叫んでも無駄だった。夫は真っ白な背景の中に溶け込むように消えて行った。

ソファで目を覚ました静子はしばらく呆然としていた。何気にそばに置いてある鏡を見ると、自分の顔が涙でぐしゃぐしゃになっている。

夫に会えた懐かしさと悲しさが静子の心に同居していた。それが例え夢であっても実感があった。

そして夢を見る前と今で決定的に違うところは、あれほどまでにあった倦怠感がきれいさっぱりに消えていることだった。

すっきりした意識の中でじっくり考え始める静子。その姿はもう悲観的ではなく、前向きに考えている母親・そのものの姿であった。

第49話

最後の晚餐

母親と一緒に外で食事をするなんていつぶりだろう？

一星がふと考えてみても小学生の頃以来・・・しかもまだ低学年の頃まで遡るかもしれない。

なにせ父親が亡くなってからというもの、母はパートの掛け持ちで朝から晩まで長時間労働。

毎日の生活が大変で、外食する余裕などあるはずもないことを一星は子供ながらに察していた。

一星が社会人になった今でこそ、毎月8万円は家にお金を入れているので、少しは楽になっている。

食事に誘って来たのは母の静子からだった。

有名ホテルの最上階ラウンジでの食事。夜景が最高に美しく見える窓際の席。

Tシャツにジーンズでは追い出されそうな場所で、一星と静子は今、めいいっぱいのおしゃれをして差し向かえで座っている。

「一星ごめんね。こんな場所に母さんなんかと一緒にで。」

「いやあ、マジでびっくりしたよ。ホントにここ予約してたんだ。」

「そうよ。雑誌によく載るところだから母さんチェックしてたの。」

「すごいじゃん。でもまわりカップルばかりだけどな（へーへー）」

「すまないね・・・ロビンさんと一緒に来れたらもっと良かったのね。」

「今は無理だけど、いつか彼女を連れてここに来るさ。それより最近の母さんがすごく元気になってくれたから俺も安心したよ。」

「ごめんね。」

「もう母さん、謝りすぎだって。もういいよ。」

「じゃあ一星が食べたいもの何でも注文しなさい。値段は気にしないでいいから。」

「でもさ、俺今日、誕生日でも何でもないのにさ、母さんはなんで急に俺と外でメシ食おうと思ったんだい？」

「ダメ？」

「いや、ダメじゃないけどさ。なんで今日なの？」

「いつかはいつかはって思ってたのが今日になっただけよ。」

「ふうん。」

「あ、お金のことは心配しないで。一星が家に入れてくれてるお金は使ってないの。母さんの貯金を切り崩したお金だから安心して。」

「母さん、家に入れてる金は家族のためのものだからさ。俺の金って言うなよ。遠慮なく使えよ！水臭い。」

「うんうん。。次からそうするね。」

なんとなく微笑ましい親子の会話だろうといずみは思った。

そう、実は姿の見えぬいずみもそばでこの光景を見ていたのだった。通常、家から出られないはずの彼女がなぜこの場にいるのか？

それは静子の次の言葉がヒントになる。

「一星、なんでわざわざこんな所にノートパソコンなんか持ってきたの？」

「いや・・その、友達に急ぎで送りたいファイルがあったからさ。さっきちょっとだけ立ち寄っただろ？あそこさ。このホテルはインターネット接続ブースがあるから都合が良いんだ。」

「そんな家にいるうちに送れなかったのかい？」

「う・・あ、その時はほら、友達がON状態じゃなかったから送れなかったんだよ。」

苦し紛れな言い訳でこの場を免れようとする一星。

実のところ本当の理由は、いずみから絶品の夜景を観てみたいと懇願されて考えついた苦肉の策であった。

自宅のデスクトップパソコンを立ち上げておいて、このホテルの接続ブースにノートパソコンを繋ぎ、転送によっていずみがやって来るという筋書き。

それが功を奏して、今3人で夜景を観ていることができるのだ。

「うめえ〜これ!!」

「(＊＾m＾＊)フフッ。一星、声大きいわよ。」

「あ・・ごめん(＾|＾;)」

食事のフルコースもほぼ終えようとしていた。

食べることでできないいずみは窓際を移動しながら満足そうにずっと夜景を眺めている。

一方、静子は一星の顔からほとんど視線をそらさずに、ずっと微笑みながらゆっくりと食事を口に運んでいる。

さすがに一星もその視線に気づき、一体母は何をどう思っているのか気になりはじめた。

「ちょっとトイレ行つて来る。」

一星は席を一旦外して、トイレで大きく深呼吸をしたあと再び席に向う。

すると静子が席から立ち上がってこちらに歩き出し、一星とすれ違う寸前で足を止める。

「ごめんね。母さんもお手洗いしてくるわ。先にデザート食べていいわよ。」

「あ、ああ。。」

席に着くとすぐにデザートが運ばれて来た。

だが一星がそれよりも気になったのは、テーブルに置かれた一通の手紙だった。母よりと書いてある。

封筒がけっこう膨らんでいて厚みがある。便箋の枚数はけっこうあるかもしれない。

封は閉じられておらず、そのまま中を取り出せた。

『母さん・・俺に今ここで読めって言うのか。。』

夜景を堪能したいずみもちょうど一星のそばに戻り、広げられた手紙を後ろから読もうとしていた。

「（□□；）！！こ・・これはっ！！！！」

一星が驚くのも無理はない。

それはまさに静子の生い立ちからなる真相の告白文そのものであった。

第50話

手紙の中の真相（前編）

● 静子が一星に宛てた手紙より

一星・母さんはずっと今まであなたに言えなかった秘密があります。

この秘密は、私が自分の生涯を終えるまで口にしないと決めています。

それは私個人だけの問題だと勝手に解釈していたからです。

それに26年前にお父さんと出会って結婚し、あなたも産まれました。

私の人生において、その当時が幸せの絶頂だったのかもしれない。

でもお父さんが死んでしまって、ささやかな幸せから一気に奈落の底に落ちたような気がしました。

人生を最初からやり直せると甘い考えだった私への罰だったのかもしれない。

私は事あるごとにキッチンの床下収納庫へ足を運ぶようになりました。

一星もいずみさんもすでにご存知のように、私はそこからこの世界に來たのです。

でも決してここがわかって來たわけではないのです。こんな世界があるなんて本当に全く知らなかったのです。

なぜなら私が向こうの世界にいるときは、自殺するつもりであるのキッチンの穴に身を投じたのですから。

こっちでは床下収納庫になってますが、向こうの世界では封印されていた古い井戸でした。

一星、どうか母さんを信じて。あなたにウソは言わない。そしてこの手紙をいずみさんにも読ませてあげて下さいね。

彼女にもっと早く気づいてあげれば良かった。私はいずみさんに計り知れない迷惑と苦しみを与えてしまいました。

許して下さいなんて言える立場ではないこともわかっています。

言い訳するわけではないけれど、私が今に至るまでのいきさつを

これから正直に書いていきたいと思います。
なぜいずみさんが今の状態になったのかもきつとわかるはずです。

元々、内気で引っ込み思案の私は、高校時代に集団でひどいイジメを受けていました。（第39話参照）

特にクラスメートの宮永幸江はイジメのリーダー格で、事あるごとに私を笑いのみにしていました。

イジメの内容全てを書く、私の封印していた部分を思い出して感情が乱れてしまいそうなので、そこは省きますが、やがて私の運命を変えてしまう日がついに訪れてしまいました。

当時、幸江は毎日のように私が通学に利用していた自転車のタイヤの空気を抜いていました。

もちろん張本人は知らんぷりです。私は知っていながら必死で耐えていたのです。

でもそれが1ヶ月、2ヶ月と続き、あげくの果てにはパンクさせられるまでエスカレートしていました。

最初は針か何かを使って、見た目にはすぐにはわかりませんが、徐々にカッターではっきりとタイヤを切りつけられるようになり、私の限界もついに頂点に達したのです。

私は今まで溜まりに溜まっていた感情を幸江に爆発させました。

でも彼女はせせら笑い、シラを切り通しました。それでも私がヒステリックになっていたので、幸江の表情も怒りに変わり、制服からカッターを取り出して私に切りつけて来たのです。

そして制服の胸元を水平に割れました。一瞬体をひいたので肉体に被害はありませんでしたが、再び幸江がカッターを振りかざして来たので、私はとっさに足元にある大きな石を拾い上げ、至近距離から彼女へ思い切り投げつけたのです。

その後の私は放心状態になったようで、我に返ったときには幸江が頭から血を流して倒れているのが見えました。

結局、幸江の命は助かりはしたものの、脳に障害が残り、人から介護を受けなければ生きられない体になっていました。

こうして私は保護観察所から出て以来、更に引きこもりになっていったのです。

それから時が流れ、私の年齢が30過ぎになっても何の変化もなく、ただ漠然と生きているだけでした。

それを見かねた両親が、私を最初の心療内科のカウンセラーの元へ通わせましたが、効果なく3年で断念しました。

そんな私でもついに転機が訪れました。2度目のカウンセラーの元へ通い始めたときです。（第40話参照）

彼女はとても気さくで上から物を言わない優しい人で、友達のように会話をしてくれたり、彼女のオフの日にもショッピングに誘ってくれたりもしました。

いつしか私の目の心が開き始めたのです。そんな矢先、カウンセラーが私をエアロビ教室に連れて行ってくれました。

そこで出会ったのが、私の親友になる栗山尚代さんなのです。いずみさんのお母さんですよ？

尚代は誰にでも分け隔てなく話すことのできる素晴らしい人。カウンセラーの機転のおかげで私はやっと立ち直るきっかけをつかもうとしていました。

ある日、私は初めて尚代の家に招待されて遊びに行くことになりました。

その時訪れたのが、私と一星が住んでいるこの家だったのです。

私が尚代の家を訪れたときには、いずみさんはお仕事でいなかったと思います。

尚代と私はリビングで二人、楽しく会話をしている中で、ちょうどこの家のことが話題になりました。

尚代は結婚したときに、ご主人と二人でこの建売の家を購入したら

しいのですが、まさかそこに密閉されて使われなくなっていた古い井戸があるとは全く気づきもしなかったようです。

そしてちょうどその井戸の真上にダイニングがあり、それがわかると尚代も気味悪がっていました。

でもしつかり丈夫なフタで閉められているし、マットでも敷いておけば気にならないと思い、そのまま放置しているとのことでした。

そんな矢先、私の携帯に突然の呼び出しがありました。

母からだったのですが、それは私にとって非常にショッキングなことでした。

それはあの幸江が亡くなったという知らせだったのです。

幸江を廃人同様にしたのは私です。私の犯した罪として決して忘れてはいけないことですが、自分が立ち直るためにも思い出すのを避けていたのです。

でもやはりそれは無理でした。きっと私は神様に怒られたのでしよう。

幸江は死にました。私は殺人者と同じです。それを忘れてしまっていたなど都合のいいことばかり考えていた自分がとても愚かだと悟りました。

私は生きる価値のない人間。人を殺めて自分^{あや}がのうと生きている。

私は一気にどん底の鬱に陥りました。そして衝動的な行動に出てしまったのです。

尚代がトイレに行っているすきに、キッチンへ移動し、床に敷いているマットをずらすと、さっき尚代から聞いた話の通り、古井戸の扉がありました。

そのフタを開けるのには少し苦労をしましたが、火事場の馬鹿力が働いたように、こじ開けることができました。

中は真っ暗な中にも光が見えました。不思議だと思いました。

その時の私はそんなことよりも、その穴の中に身を投じて死ぬことしか頭にありませんでした。

まさに数分間の間に起きた衝動的な行動・・・

私はためらいもなく、その古井戸の中で頭から落ちて行っただけです。

落ちてゆく時間が長く感じられました。地の果てまで飛ばされてしまうような猛スピードで。

でも急に途中から、落ちるというより、引っ張り上げられる感覚に切り替わったような気がしました。

私はずっと目を閉じていましたが、徐々にそのスピードがゆるやかになり、やがてピタッと止まると恐る恐る目を開けてみました。

すると私の目の前に映っている光景は、あまりにも意外なものだったのです。

そう、またキッチンの井戸の入り口に戻っていたのです。

この事実だけでも腰を抜かすくらい驚いたのに、このあと更にわけのわからないことが起きました。

とりあえず穴から這い上がった私は尚代を探したのですが、彼女はいませんでした。それに家は同じでも家具の配置や内装も全く違って、彼女の家とも思えません。

それに私が何気にそばにある鏡で自分を見ると、明らかに若返っているのに気づきました。

近所の人たちから”行かず後家”と囁かれていた年増な私が、20代の頃の顔に、そして肌ツヤまで良くなっていたのです。

まるで夢のような出来事に、私がずっと腑に落ちないでいると、今度は突然後ろから男の人に呼びかけられる声がありました。

振り向くとそこには一人の男性が不思議そうに私を見ながら立っていました。

一星・・・わかりますか？この人があなたのお父さんになるのです。

(続く)

第51話〜55話

第51話

手紙の中の真相（後編）

私は混乱してしまい、ただ彼を呆然と見つめていました。

彼の方もかなり驚いていました。それもそのはず、ここはなぜか彼が住んでいる家だったのです。

そこへ突然知らない女（私）がキッチンにいるのですから、驚くのは当たり前のこと。

彼は幸村と名乗りました。彼にとっては得体の知れない私なのに、あれこれ事情を聞こうともせず、動揺している私に気を遣い、飲み物や食べ物をくれたり、普通の友達と会話する雑談のように話しかけてくれました。

私が黙って彼の話を聞いていくうちに、彼の両親がすでに事故で他界されていること、そしてこの家には彼が一人で暮らしていることがわかりました。

その後ようやく私が平常心になり、辺りをもっと冷静に見れるようになる、壁掛けのカレンダーの年式が26年前になっているのに気づきました。

そのことを彼に尋ねると、それが今年のカレンダーであることがわかり、私は衝撃を受けたのです。

一時その場で休ませてもらった私は、彼に説得され実家まで送ってもらいました。

どうやら幸村は、私が家出をしたあげくに腹をすかせてこの家に侵入したのだと思っていたようです。

送ってもらう車の中から見た外の光景は、建物も風景も、すべて

が明らかに26年前の懐かしいものでした。

そして家に戻るとやはり両親も若返っていました。

この妄想のような現実には、私はきつと夢でも見ているのだろうと思います。が、何日経ってもこの夢が覚めません。

いよいよこれが本当の現実なんだと認めなければならなくなりました。

それなのに私は日を追うごとに、この時代の生活に対して違和感が大きくなっていきました。

なぜなら、全てが1度経験したことばかりの繰り返しだからです。両親がしゃべる会話や、テレビで流れるニュースや芸能、全てにおいて新鮮さが無いのです。

そんな生活から開放されるために私が思いついたことは、幸村に会うことでした。

彼と出会ったことに関しては今までに経験していないのですから。

それ以来、私は彼の家に入り浸りになり、同棲するようになりました。

その後間もなくして私は幸村の子を妊娠して、両親の承諾を得て結婚したのです。

そして産まれた子があなた、一星なのです。

あなたの名前の由来は、例のキッチンにある穴の中で見た煌く星のような輝きから名づけました。

一番に輝く星になってもらいたくてそうつけたのです。

あなたを妊娠するまでは、キッチンの”時間のひずみ”とも言える穴を眺めながら、何度も落ちてしまおうと思いましたが、再び元の世界へ戻ることを予想すると、どうしても躊躇してしまう自分がいました。

そんな気をなくしてくれたのが、一星、あなたが産まれたことだったのです。

私は再び、幸せをつかもうと前向きになり始めました。

私に何の疑問も理由も問わずに、いつも優しく包んでくれた幸村（あなたのお父さん）のためにも新しい人生をここから歩もうと決心したのです。

その当時から私は誰もいないはずの家に人の気配を感じていました。

でも一星やお父さんのの世話に追われて、そんなことはずっと無視して来たのです。

私が幸せの絶頂をかみ締めていた時期でもあり、少しくらいの不審なことなど気にも留めなくなっていました。

それが一変してしまったのがお父さんの死です。一星も辛かったですよね。。

正直、お父さんをこんなに早く失うなんて考えたことすらありませんでした。

私はお父さんにずっと支えられて生きてきた。お父さんがいたからこうして生きて来られた。この遡った時代からやり直せることができた。それなのに。。

私は極度の鬱になりました。一星も当然、私の変化に気づいていたでしょうね。

それなのにこんな情けない私をよく呆れもせずにあわってくれましたよね。

本当にありがとう。。本当に心から感謝していますよ。

私は生きるすべを無くしました。何のために人生をやり直したのかわからなくなりました。

お父さんと共に生きれない人生なんて考えられなかったのです。

こんなことなら最初からこの時代に来るんじゃないかと幾度も思いました。

そしてそれ以来、毎日のようにキッチンの床下収納庫を空けては恨

みごとを心の中で唱えていたのです。

そんな折、あなたの友達の権現君が来ましたよね。

私がちよつと目を離れたすきになぜかあなたたちはキッチンへ移動していました。

そして一星・あなたがあの中へ落ちたとき、私は頭を打ち砕かれたような衝撃を受けました。

こんなことになったのも全て私の責任です。絶叫しながら私はその場で手首を切って死んでしまおうと思っていました。

そんな時、その場にふと、どこからともなく若い女性が現れたのです。

その時はすぐにわからなかったのですが、それが栗山いずみさんだったのですね。

幸い一星が2分程度でこの世界に舞い戻って来てくれたので、私は胸を撫で下ろしました。

でもその代わりまた、いずみさんは消えてしまいましたよね。

それでやっとわかりました。私がずっと以前から感じていた気配。

それはいずみさんがずっとこの家に”見えない体”でいたからなのです。

一星と見えないいずみさんがどうして知り合えたのかはわかりませんが、私はその事実がわかると更に自虐の念に駆られました。

いずみさんに申し訳なくていくら謝っても謝りきれません。

26年もの長い間、私のせいでいずみさんの人生を閉ざしてしまいました。

私は”時間のひずみ”に落ちなければ、いずみさんは尚代とこの家で暮らしていたはずです。

以前、お父さんが亡くなる前に言っていたことがあります。

このまま自分が独身だったら、この家売って、海に見える空気の

いい場所に引っ越してシングルライフを楽しむと。

私がこの時代に来なければ、彼はきつとそうしたことでしょう。そして尚代たち夫婦に家売り、ここでいずみさんが産まれたことでしょう。

私が尚代の進むべき運命や歴史を変えてしまったのです。だからいずみさんはこの世界では産まれないことになった。そう解釈するのが自然だと思います。

でも実際にいずみさんはこうして姿がなくても生きています。無の存在ではありません。

一星が誤って落ちた穴の向こうの世界の話と聞くと、全て辻褄が合いました。

一星は向こうの世界では産まれません。だからその時は姿がなかったのです。

向こうでの私は独身で年増の”行かず後家”なのですから。

返すがえすも申し訳ないのが、いずみさんをこんなに長い間、苦しめていたことです。

そして何よりも尚代の進むべき人生を狂わせてしまったこと。

彼女はこの世界で別な男性と結婚してしまったようですね。

一星とお友達の和代さんのお母さんだったなんて夢にも思いませんでした。

でもそのせいで、いずみさんが産まれないことになってしまいました。

全ては私の責任です。私ひとりのせいで他の人たちにどれほど迷惑をかけてきたことか。

私はここ数日、自分の進退についてずっと考えてきました。

いずみさんを復活させるには私がここにおいてはダメなのです。

私はこれから”時間のひずみ”に身を投じることにしました。

このことは今まで何度も検討しましたが、一星の存在のことを考え

ると無理なことだと思っていました。

でもつい最近、夢の中にお父さんが出てきてくれて、私に勇気とヒントを与えてくれたのです。

私は力の限り実行できる全てのことをしたいと思います。一星も不安ですが、どうか最後にこの母を信じて下さい。

こんなに長い手紙になってごめんなさいね。

この便箋と一緒に一星名義の通帳が入っています。あなたが毎月かかざず家庭に入れてくれたお金です。

こんなに親孝行に息子を持つことができて、私は幸せ者でした。

どうか有意義にこのお金を使って下さいと言いたところですが、私が”時間のひずみ”に落ちると無意味になってしまうのかもしれないね。

そんなつもりでずっと貯めてきたわけじゃなかったんだけどね・

不甲斐ない母で本当にごめんなさいね。

今日の一星との食事、忘れることのできないとてもいい思い出です。

成長したあなたを目の前でじっくり見れて、とても嬉しかったですよ。

さようなら一星。いずみさん。

母より

手紙を読み終えた一星は、同封されていた通帳を開いてみた。

・・・325万円

そこには彼が社会人になってからの数年、今まで家庭に生活費として入れた金額全てが記帳されていた。

「母さん・・・俺の母さん。。何で1円も使ってねえんだよ。。」
一星に涙が込み上げてきた。

「何でもっと自分のために生きねえんだよ。。」

溢れる涙をぬぐおうともしない一星。

するとそばにいた店員がそれに気づいて話しかけてきた。

「お客様、大丈夫ですか？どうかされましたか？」

涙を指でこする一星。

「いや、何でもありません。それより僕の連れの母なんですけど・・・」

「はい。そのご夫人でしたが先ほどご清算されて出て行かれましたが。」

「（□□；）！！し、しまったああ！！」

急いでこの場を飛び出す一星。そばにいる”姿なきいずみ”も動揺していた。

『お母様・・・私のために。。。』

一星はホテル内のインターネット接続ブースに駆け込むと、さかさずパソコンを立ち上げる。

「いいかいずみ、すぐに転送で家に戻れ。母さんをなんとかしてくれ。頼む！」

チャットソフトが起動するといずみはすぐにファイル転送で部屋に戻った。

robin830..転送完了。着いたよ一星。あなたもすぐに来てね。

ponsuke..すぐ行く。

一星は全力疾走でホテルの正面玄関から道路に飛び出してタクシーを拾った。

「すみません。急いで下さいっ！！」

母さんを止めろ!!

いずみが転送で部屋に戻って数分後、静子が帰宅した。
一星になんとか母親の行動を阻止するように言われたものの、姿なき自分にどんなことができるだろう？

形あるものに触れることすらもできない自分に一体何が・・・
でもこのままでは静子が床下の穴に身を任せてしまう。
益々気が動転するいずみ。もう時間がない。。

『私にできることといったら・・・』

いずみは一星のパソコンのモニターをじっと見つめて考え込む。
すると突然あることにハッと気づいた。

『そうだ！音声チャットだっ！』

彼女はすぐに”話しっぱツール”を起動し、ボタンをONにする。
リビングまで声が届くようにボリュームも最大にした。

「お母様！お母様！待って下さい！私の声を聴いて下さい！」

何も反応がなかった。いずみは渾身の声量で叫んだ。

「お母様っ！一星が来るまで待って！！お願いだからすぐに行かないでっ！」

いずみは静子を繰り返し呼びかける。

それが徐々に泣き叫びに変わっていく。

すると間もなくして願いが通じたのか、足音が近づき静子がこの部屋に入って来たのである。そして意外とも言える冷静かつ、微笑ましい表情で彼女が口を開いた。

「いずみさん、今までごめんなさいね。もうすぐあなたは楽になれると思うわ。」

「お母様！もつと何か別な方法を考えましょう。きっと何かありますって！」

静子はゆっくりと首を横に振る。

「いいえ。これしかないの。」

「でも・・・でもこのままじゃ一星の存在を消してしまうんですよ！」

一瞬の間があつた後、静子はゆっくりと話し始める。

「そうね。そうかもしれないわね。」

「そう思うのならなぜこんなことを？私のためですか？」

静子は不思議と冷静で、以前のような動揺した仕草や緊張した面持ちなどみじんも感じられなかった。

「いずみさん、よく聞いて。」

「は、はい・・・」

「私はね、絶望してあの”時間のひずみ”に落ちてゆくわけじゃないの。」

「はい。。。」

「手紙にも書いたけど、必ず私なりに考えたことを向こうで実行するつもりです。」

「向こうで？向こうの世界に戻って何かをするってことですか？」

「そうよ。だから私を信じて。一星の存在を消すなんてこと、親の私ができるはずないじゃない。」

「ならせめて・・・せめて一星が来るまで待つて・・・」

「それはできない。あの子に会ったら私の決心が鈍ってしまう。躊躇してしまうかもしれないし、あの子に止められるかもしれないでしょ。」

「決心が鈍るってことは、それだけ何かリスクの大きいことをするってことじゃないんですか？」

「・・・あなたは頭の良い人ね。確かにリスクは大きいわ。でもやらないきゃあなたも変わらないのよ。」

「・・・」

「一星が来る前に、いずみさんにだけ言います。」

「はい。。」

「私は向こうの世界に行っても絶対に一星を産みます。産みなおしてみせます。」

「彼を・・一星を・・産みなおす。。?」

「そうです。向こうでの私は40過ぎの独身女でした。しかもノイローゼ気味の。」

「そ、それなのにどうやってそんなことを・・?」

「私は向こうで主人を探します。海のそばに引っ越した彼を探し出して絶対に一星を産むつもりです。」

「でも・・もし見つからなかったら。。それに・・失礼を承知で言いますけど、ご主人がすでに別な方と結婚されてたりしていたら。。」

「それも考えました。それが大きなリスクなのです。しかもこの世界で主人は若死してしまいましたので、ひょっとしたら向こうでもすでに死んでいるかもしれないとか。。」

「それでもお母様は行くのですか?」

「ええ。私に勇気を与えてくれたのは亡くなった主人です。彼が夢で知らせてくれたことを私は信じます。」

「亡くなられたご主人は、向こうの世界では生きて独身でいると?」

「私は自分の直感を信じてみたいと思います。今と状況は変わってしまいますが、必ず幸村と巡り合って一星を復活させます。ただその場合、もうひとつのリスクとして私は高齢出産になると思います。。」

「・・・・・そうなりますよね。。」

二人の会話が途絶えた。もうこれが潮時だと考えた静子といずみ。「じゃあ・・キッチンへ行きます。いずみさん、一星と再び巡り会えたらよろしくお願いしますね。」

「・・・・・はい。お母様。。」

いずみはそれ以上何も言えなかった。

静子の決意を揺るがす理由など、何も見当たらなかったからだ。

いずみも静子に賭けてみようと思ふようになっていた。
そして願わくば、新しく出直した世界で、一星と共に同じ太陽の下を大地を踏みしめながら歩いてみたいと。

一星がタクシーから自宅に戻ると、まさに静子は”時間のひずみ”の前に立っていた。

彼女は一星に向って優しく微笑んでいる。

「母さんっ！行っちゃダメだ！」

飛び掛って引き戻そうとする一星。だが一瞬だけ静子の方が早かった。

彼女は足から穴の中へ飛び込んだのである。。。

「母さんっ！！母さあああああん！！」

家中に一星の泣き叫ぶ声が鳴り響いた。

そして姿なき栗山いずみも彼のそばで一緒に泣いているだけだった。

第53話

撃沈の権現

「どうしたの？なんでこんなに早く来るの？」

栗山いずみは驚いていた。

「（□；）！！えっ！？・ええっ！？」

だがもっと驚いたのは権現京二の方だった。

「夕方5時にいつもの場所って言ったじゃない！」

「く、栗山・お前、普通に姿があるぞ？」

「はあ？意味わかんない。もうくだらないジョークはやめてよね！」
「いや・・お前、幸村はどうした？」

「誰よそれ？もういい加減にしてくれない？京二は昔から突然意味不明なことを言うから嫌なのよ！」

「京二って・・呼び捨てかよ。。」

「今更何よ！いつものことでしょ！」

「な・・なんでこんなことに。。」

「それはこっちが聞きたいわよ。バツカじゃない！」

権現京二はこの日の朝、目覚めたときから意気込んでいた。

今日はいよいよ計画通りに幸村一星の家に行き、彼を床下収納庫に落とすのだ。

そうすればきつとあの家の歴史が変わる。晴れて栗山いずみも復活する。

『そして俺は栗山とめでたく交際スタートってわけだ。（ ー ー ）
フフ・・』

そんな期待を胸に、晴れた日曜の昼下がり、目的地へ向う権現の足取りはとても弾んでいたのである。

ところが幸村一星の自宅の玄関から現れたのは、なんと姿の復活している栗山いずみだったのだ。

しかも彼女に食ってかかられるような言動ばかり浴びせられている。こんな思わぬ事態に権現が仰天するのも無理はなかった。

「じゃ、じゃあ俺、夕方出直そう・・か？」

「もういいわ。ホントは別な場所で話したいことがあったんだけどね。」

「え？じゃもう言わないのか？」

「言うわよ。今ここで。」

「（ノ ー ー ）ノコケッ！！」

「あのね、もう私たち別れましょう。」

「は？」

「京二だってもうわかってるじゃない。私たち相性が合わないのよ。何やってもケンカばかりで噛み合わなかったじゃない。」

「そう・・・だったかあ？」

「もう無理よ。」

権現はおぼつかない会話をしながらも、この状況が薄々飲み込めてきた。

『そうか・・・きっと幸村家の存在がなくなってるんだ。そう考えると今のいずみの存在が納得できる。しかも彼女は幸村といった記憶が全くないようだ。いや、記憶がなくなったわけじゃなくて、そんな経験すらしていないんだ。』

それにしても権現には腑に落ちない部分もあった。

『栗山は俺が来る前に幸村を穴に落としてしまったということか？俺が来るまで待てなかったのだろうか？』

「ちょっと何ボーツと考えてんのよっ！反省してるつもり？」

「（。○。；）ハッ！あ、わりいわりい。」

「京二って反省しないタイプだもんね。自己中だし。これ以上お互い傷つかないうちに別れましょう。」

「ええ？そりゃあちよつと・・・」

「なんでよ。あなた案外未練がましいのね？」

権現は心で思った。

『そりゃそうだろう。どうやら俺はいずみと付き合ってる世界に戻れたようだったのに、いきなりフラれるなんてよ。』

「もう私、京二に話すこと何もないから。さよなら。」

そう言っただけいずみは玄関を閉めてしまった。

あっけにとられてその場に立ち尽くす権現。

「せっかく世界が変わってくれたってのにこれかよ。」

自分の計画と予想がどれほど当てにならないかを思い知らされた

彼であつた。

「誰だったの？彼氏？」

キッチンから娘に声をかける栗山尚代がいた。

リビングに戻ってソファに身を沈めたいずみが答える。

「ううん。もう彼氏じゃない。たった今別れたから。」

「Σ（・◇・＊エエッ！？それっていずみがフツたってこと？」

驚いた尚代がキッチンから早足でやって来た。

「うん。ふっちゃった。」

「そう・・あんたがそんなに強かったなんて驚いたわ。」

「彼とは元々どっか違和感があったから・・あまり悲しくないの。」

「ホント？ホントに大丈夫なの？泣いてもいいのよ。」

「ううん。全然そんな心境じゃないの。不思議なくらいにね。ごめんねお母さん。心配しちゃった？」

「そりゃちょっとはするわよ。じゃあ本当に安心していいのね？」

「私は大丈夫。安心して。じゃ部屋行くね。」

いずみがリビングのソファから立ち上がるうとしたとき、尚代が

呼び止めた。

「いずみ、こんな時になんだけど、お母さんもあなたに話があるの。ちよっといい？」

「え？？なあに？お母さん。」

尚代は身につけているエプロンから分厚い手紙を取り出した。封

はすでに開いている。

「なにそれ？」

「なんか気味悪いんだけどね。これが床下収納庫の扉の内側にくっ

ついていたの。」

「内側？なんで？誰がそんなことしたの？」

「わからないから話てるんじゃない。」

「あそこは普段、キッチンマット敷いてるのにどうしてわかったの

？」

「・・それがね。。何度も何か叩きつける音がしてね。音源をたどったらそこだったのよ。」

「（。ロ。； 三 ；。ロ。）ヒイイイ！こわああい！そんなの捨てなよお母さん。」

「そう思ったんだけどねえ・・」

「まさか開けて読んだの？」

「いえ、この封は最初から開いてたのよ。」

「開いてるからって読んだの？」

「読まないわよ！！普通だったらお母さんだって気持ち悪くて捨てるわよ。」

「ならどうしてそうしなかったの？」

尚代は手に持っている手紙をいずみに渡す。

「宛名を見てみなさい。」

「宛名？」

尚代に促されて宛名に目をやった。

” 一星、そしていずみさんへ ”

「私へ？」

「あんた心当たりある？」

「ないない。全然ない。それにこれ・・いちほしって何？」

「この感じからすると人の名前じゃないの？」

「じゃあかずほし？」

「何か変よね。いっせいつて読んだら自然じゃないの？」

「あ、そっか。そうね。きつとそうだわ。」

「で、知ってるの？その彼。」

「一星・・一星・・・・・・一星。。。」

いずみは封筒の中を覗いてみた。すると何やら手紙意外のものも

入っている。

ゆっくり抜き出してみると、それはなんと預金通帳だった。

「Σ—11（▽₁；）——1これはまずいわ。警察に届けようよ。お母さん。」

「その前にいくら入ってるか確かめなさいよ。」

「ちよっとお母さんてば。（—（；）」

多少の心の抵抗はあるものの、いずみも中身に少しは興味があった。

恐る恐る通帳を開いてみると、最後の記帳ページが転々と濡れていた。

『これは・・・誰かが流した涙だ。。』
いずみは瞬間的にそう思った。

そして何気に指でその濡れたページに触れると、彼女の脳裏に電流が走る感覚で、走馬灯のような場面が瞬時に流れ出した。

「いずみ！いずみっ！どうしたの？いずみっ！！」

いずみの状態に驚いた尚代が彼女の体を揺さぶる。
すると20秒ほどでハッと我に返るいずみがいた。

「お母さん。。一星ってわかったよ。。」

「えっ？」

「でもね・・・その人・・・もういないの。もうここにはいないのよ。」

「

第54話

同窓会にて

いずみは外を眺めながら、窓に映る自分の顔をボーッと見ていた。

暗い窓ガラスを通して見ても張りのない顔に少しショックを覚える。

「ちょっと老けたかな。」

頬に手をやると熱く火照っている。さっきまで結構飲まれたせいだ。

「みんなすごく社交的・・・人にお酒を注ぐのも上手。それに比べて今の私は・・・」

高校時代の同窓会も終盤に差し掛かり、化粧室から席に戻る途中のいずみ。

何気に廊下の窓から見える夜景に気を惹かれ、ふと眺めていると、自分の顔の方が気になってしまったのだ。

さっきまでは確かに楽しかった。今日、久々に親友にも会えたし話もはずんだ。

でもこうして席から離れて、ひとりぼっちで静かな空間に来てしまうと、急に寂しさとむなしさがいずみに襲いかかって来るのだった。

同級生である女子の7割以上がすでに主婦になっている現実。

そして家庭があるからと1次会で早々と帰宅する人が大半を占めた。いずみはやり切れない思いでいっぱいになる。

「私が・・・私があの際に余計なことを思い出さなければ。。」
それはいずみが今までずっと悔やんで来たことだった。

そんな彼女に、後ろからそつと声をかけて来る男がいた。

「まだ吹っ切れてないようだな。」

いずみが振り向くと、そこには権現京二が立っていた。

「栗山にフラれて以来、3年ぶりだな。」

「もう・・・そんなになるかしら？」

「もう俺たち29歳だぞ。」

「そうよね。。」

「でも今日やっと栗山と話せた。」

「??:」

「席が端と端じゃ会話なんてできないだろが。」

「お酒注ぎに来れば良かったじゃないの。」

「なんで俺がお前んとこに酒注ぎに来なきゃなんねえんだよ!」

「言ってみただけよ。」

「(ノ　　)　　」ノコケッ!!」

権現といずみはクラスメイトだった。

こうして3年ぶりに同窓会で対面した権現といずみ。

冴えない顔のいずみを気にして廊下に出てきた権現は、相変わらず勘も鋭かった。

「栗山・お前まだ吹っ切れてないんだろ?」

「・・・わかる?」

「見りゃわかる。前の世界の記憶が蘇ったんだろ?」

「(。;)　　」ギク!なんでわかるの?」

「お前は俺と同じタイプの人間さ。歴史が変わる前の記憶もちゃんと残っている。ただ、歴史の変わりっぱなだけは一時的に記憶が消失するだけの話だ。」

「そうなんだ。」

「栗山、もうクヨクヨすんなよ。そんなに幸村のことが忘れられないのか?」

「忘れたいよ。もうどうしようもないことだってわかってる。理屈じゃわかってるのに・・・気持ちがついてかないの。」

権現はいずみを見ずに窓の外を眺めながら話し出した。

「栗山・お前が幸村を忘れられないのは、再び出会うかもしれないという可能性を心に持つてるからだ。」

「・・・そうかもしれない。」

「バカな!!!いいかよく聞け。お前がいつまでもそう思ってる限り、幸せになんてなれっこないんだぞ!」

「やっぱりそうなのかなあ。」

「もう3年も経ってるんだ。お前は今の現実をしっかり生きて行か

なきゃダメだ！過去に生きてはダメなんだ！」

「そうだけ。。」

「この世界で幸村が生まれてるとは考えにくい。可能性は限りなく0に近いと思う。」

「どうして？」

「元々幸村は、歴史が変わった世界で生まれた人間だからだ。今の世界で生まれるのは理論的にもおかしい。」

「・・・そうなんだ。。」

「なあ、こんなこと俺と栗山しかわからないことじゃないか。」

「そうだよね。。他人に言ったら精神病院に送られちゃうね。」

「だろ。でも俺はわかる。栗山の気持ちも今まで経験した苦しいことも。」

「・・・」

「俺はこの3年で変わった・・・と思う。」

「どこが？」

「傲慢さがなくなった。自分で言うのもなんだが前の俺とは違うw」

「だから？」

「だから・・・だから・・・俺は成長した。俺は栗山を守る。俺はお前を幸せにできる。幸せにしたいんだ！だから・・・」

「・・・ゴクッ（・・；）」

「俺と結婚しよう！なあ栗山。」

第55話

私の人生ってなんなの？

権現からのプロポーズに即答はできなかったものの、いずみの返答はそう長くはかからなかった。

同窓会から帰宅して数日間、いずみは前向きに考えた。

『確かにそう。。権現君の言う通りだ。一星は歴史が塗り替えられた世界で生まれた人。静子さんの決意には心打たれたけど、理屈通りにこの世界が動くものでもない。』

いずみは部屋で決意を固めつつあった。

この3年、両親にも随分と心配をかけてきた。かたくなに見合い話も断り続け、かと言って誰かと付き合うこともなかった。

そんな中で権現京二は自分を求めている。3年前、一方的にフツた自分に対して恨みもせず、ずっと心に思っていてくれたのだ。

今自分が一番頼りにできるのは彼しかない。自分のためにも両親を安心させるためにもそれがベストだと自分に言い聞かせるいずみであった。

『もう・・・こんな生活は終わりにしよう。。』

だがこの決心も、神から与えられた試練とでも言うべきなのか、いずみがすぐに幸せを手に入れることにはならなかったのである。

1年後・・・

栗山いずみと権現京二が結婚してから約半年が経過していた。

二人とも共働きで、収入的には特に問題はない。

しかしそれだけでは幸せには結びつかない現実を思い知らされていた。

週に1度はやって来る姑と小姑。

これらの生き物はいずみを目の敵にするように何かにつけていちゃもんをつける。

まるでテレビのワイドショーのコナーで、問題のある家庭の再現ドラマでも観ているような光景が目の前で起きていた。

掃除ができていないだとか、人前で化粧もしていないだとか、息子に朝食も食べさせないだとか、子供はまだできないのかなど、考え

られるだけの文句を毎回吐き出してゆく。

掃除が毎日できないのは共働きだから仕方ないし、前触れもなく突然朝早くやって来て化粧のことを言われても自分の家にいるんだからいいじゃないか！

休日の朝はゆっくり寝ていたいから、朝食は作らなくていいと言っていたのは亭主の権現だ。子供のことは授かり物だからどうしようもない。

結婚当初、姑らが小言を言い尽くして満足げに帰ると、いずみは権現に相談していた。だがこれまた全く再現ドラマと同じように、彼は身内をかばう言い方しかない。

こんなことが幾度も繰り返されていくうちにいずみは、もう彼に何を言っても無駄なのだと思えるようになった。

それに輪をかけるように権現京二の態度は結婚してから急変した。優しかったはずの彼が、元の傲慢さを取り戻してきたのだ。

きつとこのタイプの男は気に入った女が自分のモノになると、安心して化けの皮を剥がしていくのだろうといずみは思った。

徐々に権現の言葉遣いも横暴になり、夜は飲みに行く回数も増え、帰宅すると酔ったままの勢いで強引にエッチを強要する。

拒否すると殴られた。これではまるで強姦と変わりはない。最低だ！最悪だ！

半年経った今も全く変わらないこの現状。

酒臭いバカ亭主が自分本位なエッチをして、勝手に果てて寝てしまう。

こうしていずみと権現京二の関係は急速に冷めていったのである。「私の人生って・・・一体なんなの？・・・なんなのよ。」

いずみには限界が近づいていた。精神的にも体力的にも。。。

(続く)

第56話〜60話

第56話

偶然の再会

日曜の午後は毎週恒例のように郊外に出来た大型ショッピングセンターに行く。

と言っても別にいづみが行きたいわけではない。買い物するだけなら激安で買える近所のスーパーでいい。

そんないづみを無理矢理連れて行くのは愛情も冷め切った亭主・権現京二だった。

彼は外面がすごくいい。近所に愛想を振りまき、挨拶も丁寧だ。

こうして出かける今も、隣の住人が庭に出ているのを確認してから満面の気持ち悪い笑みで挨拶を交わし、そのあとわざとらしい口調でいづみに声をかけて車の助手席までエスコートする。

「まあ、いつも仲の良いご夫婦なこと。」

隣の老夫婦の奥さんが言う。

「あはは！そんなことないですよ。」

ホントにそんなことないのに、ご近所はまんまと権現の話術にハマっている。

いづみたちが完全に仮面夫婦と化しているとは全く気づかずに。

目的地に着くと最低な亭主は、自分勝手に次から次へと価格も気にせずにショッピングカートに放り込んでゆく。食べたいものを好きなだけ。まるでエサを求めて本能のままに行動する豚のように。

いづみは思わず忍び笑いをした。

『そうよ、この男は豚よ！この半年で体重10キロ以上は増えてるわ。』

カゴには肉類を中心に、できたての惣菜など、すでに山盛り状態に

なっている。

いずみ自身は何も品物を手にしない。カートを押して進んでいるだけなのである。

はた目には夫婦揃って仲むつまじく買い物をしていると誰しも思えることだろう。

事実、今までに同じ町内に住んでいる家族連れとバツタリ出会ったりして、好印象を与えている。まさに権現の思うつぼだ。

こんな状態の中でいずみが家を出たとしたら、完全に世間は権現京二に同情するだろう。いずみが一方的に悪者になるのは間違いない。『なんかもう・・どうでもいい・・疲れた。何もかも。』

そんな中いずみは、ある視線が自分に注がれているのに気づいた。ふと視線の方向に目をやると、小さな子供がじっとこちらを見ている。

まだ3歳か4歳の男の子。

いずみはその子に頭をかしげて微笑んで見せた。するとその子はいずみを見つめたまま、なぜか後ずさをし始める。

しかも悲しそうな目で。今にも泣きそうな目で。

そしてクルッとその男の子は反転するや、いずみに背をむけて走り出した。

何気に気になったいずみは彼を目で追っていたが、権現によって遮られる。

「おい、次は魚コーナーだ！まぐろの解体ショーがあるらしい。早く行こうぜ。」

「え、ええ。。」

いずみは嫌々ながらも、先にどんどん歩いて行く権現の後ろをついてゆこうと、5、6歩足を運んだそのときだった。

「一星、どこ行ってたの？迷子になったらどうするの？さ、帰るわよ。」

いずみの背中の方で小さな声だが確かにそう聞こえた。振り返る
いずみ。

「（□；）！！！！！！」

少し離れた所に見覚えのある顔があった。

「一星、お前どうして泣いてるの？」

母親らしいその女性は、その男の子を抱きかかえて足早に去ってゆく。

あまりに突然の衝撃にいずみは声が出なかった。

「し・・静子・・さ。。」

「おい、いずみ！早く来いったらっ！」

と、またしてもあの豚亭主に阻まれた。

「カートがないと買えねえだろが！グズグズすんなっ！」

徐々に遠くなって行くあの親子連れ。。。

いずみはポツリ呟いた。

「一星・・そうよね。。大人のはずないものね。。」

偶然に会えた衝撃も大きい。でもそのあとにやって来た感情は嬉し
しさでも感動でもなく、悲しさのみだった。

「私たち・・これでもう・・別々の道を行くしかないのね。。」

第57話

遠ざかる幸せ

「もしもしいずみ、元気してる？」

「あ、お母さん・・そうでもないかな。。」

「なによ。体調でも悪いの？」

「そうじゃないけど・・ちょうど良かった。話があるの。」

「え？・・お母さんもういずみに話があるから電話したのよ。」

「そうなんだ。」

平日の午後7時、いずみの母・栗山尚代が電話をかけて来た。もちろんいずみがこの時間には仕事から帰宅しているのを知った上でのこと。

外面亭主・権現京二はまだ仕事から帰宅していない。

どうせ今日も飲んでから帰って来るのだろうと察しはつく。

「いずみはどんな話？」

「お母さんからでいいよ。かけてきたんだから。」

「そう？　じゃ言うわね。びっくりさせて悪いとは思うんだけど。」

「？？　そんなに驚くこと？」

「実はね・・・お母さんたち、離婚することに決めたの。」

「は？」

「だからね、お父さんと離婚するの。」

「・・・そうなんだ。」

「あまり驚いてないようね？　理由は聞かないの？」

「いろいろあるんでしょう？　私が聞いたところで変わらないんなら聞かない。」

いずみは正直、親の離婚話には何のショックもなかった。

今自分が置かれている虐げられた環境の方が比重が断然に重い。

それにいずみ自身も権現との離婚は考えていたから、親に『考えなおしたら？』などと言う気もさらさらなかったのである。

たとえば両親のことであっても、いい大人同士。娘が介入しなくても解決はできるはずだと思った。

だが、母の尚代の方は、言わずにはいれなかった。いずみに聞いて欲しかったのだろう。

「お父さん、浮気してたのよ。今まで黙って2年間も。」

「へえ・・・もう55歳なのにやるわねお父さん。」

「なに感心してのよ！」

「感心なんかしてないけど・・・お母さんそれでこれから大丈夫なの？」

「慰謝料たっぷりもらうからいいのよ。」

「一人で寂しくならない？」

「そりゃ寂しいわよ。お母さんは一人じゃ無理。誰かい人探すわよ。」

「（一；前向きなのはいいけど・・・お母さん52歳でしょ？そう簡単には。」

「お母さん、自慢じゃないけどまだまだ美貌を保ってるつもりよ。」

「それって自慢じゃない？（一――；）」

「お父さんが浮気するならこっちだって！」

「ハムラビ法典じゃないんだから。（ハ――ハ；）」

こんな状態になっても明るく前向きに話す母親の声を聞いて、いずみはある意味尊敬の念を抱いた。

『私は凹みすぎかもしれない。お母さんのように強くならなくちゃ。』

「いずみには心配かけるけど・・・でも心配してないみたいね？」

「だってお母さんなら大丈夫だってわかるもん。」

「少しは親を心配しなさいよ！」

「お母さんが下着の上からエプロンしてたときはいつも心配してたよ。」

「（（ノ――ω））ノバタ・・・もうそんなことして・・・あ！」

「（＊＾m＾＊）ムフツ。今そうなのね？」

「い、いいえ！違うわよ。見てないのに言わないで。」

「（・・・）むふふ。。。」

「また詳しいことが決まったら電話するわ。ところでいずみの話ってなに？」

「え？ああ・・・別に私のことはいいよ。」

「言いなさいよ。あとから聞けなくなるかもしれないでしょ。」

「あのね・・ちよっとそっちの実家にしばらく行ってもいいかなって。」

「どうして？京二君とあんなにうまくいつてるのに？」

「・・・」

そう、権現京二はいずみの母・尚代にも、得意の外面話術で好印象を与えていた。

尚代はまさに彼のお世辞やおべんちゃらの術中にまんまとのせられてるのだ。

「ケンカしたんなら早く仲直りしなさい。あんないい人めったにいないわよ。」

「親子でダブル離婚で面白いと思わない？」

「いずみ！！冗談はやめなさい。お母さんだってホントは泣きたいのよ。長年連れ添った仲だもの。すんなり決断できたわけじゃないの。わかる？」

「私はまだ何年も経ってないもん。」

「まさか本気で離婚する気じゃないでしょうね？」

「さあ・・・」

「1度や2度のケンカなんてお互い意地張らないで折り合えばいいのよ。」

「私は意地なんて張ってないんだけど。」

「とにかく、うちはまだゴタゴタしてるからまだ来ないで。どうしてもって言うならお母さんの実家に行きなさい。おばあちゃんのこと。そう遠くないでしょ。」

「うん。。」

それから数週間が経ち、いずみの両親の正式離婚が決まり、とりあえず母の尚代は実家に一旦戻ることになった。

それに合わせるように、いずみも身支度を整え、書置きをし、権現

が仕事に行っている間に家を出て、祖母の家へ向おうと決心する。
そしてまさにいずみが家を出ようとする瞬間、1本の電話が鳴った。

権現本人だったら、取らないつもりでいた。だがそれは見知らぬ番号からだった。

「もしもし、権現京二さんのお宅でしょうか？」

「はい。そうですが。。。」

「奥さんでらっしゃいますか？」

「はい。。一応。」

「あの・・落ち着いて聞いて下さい。」

「???」

「こちら○×△◇救急医療センターですが・・」

「病院・・?」

「そうです。実はご主人が・・お亡くなりになりました。」

「。。。。。」

第58話

時を隔てて

「幸村先輩、ずっと前から先輩が好きでした。良かったらアタシと付き合ってくださいっ!」

高校の帰り道、幸村一星がひとりで細い路地裏に通りがかったときに、待ち伏せていたであろう後輩の女子からいきなり告白された。

「ごめん。それはちよつと無理・・かな。」

少しうつむき加減で申し訳なさそうに答える一星。

「・・彼女が・・いるんですか?」

「いや・・えと。。悪いけど俺、今誰とも付き合いたくないんだ。」
「は、はあ。。。」

「ホントにごめん。気持ちは嬉しい。ありがとう。でも・・そういうことだから。」

たたずむ後輩を尻目に、足早にその場を立ち去る一星。

帰宅するとすぐに自分の部屋に入り、制服も脱がずにそのままベッドの上で大の字になって天井を見据えた。

「何やってんだろ俺は。。。」

天井を見つめたところで何もない。それなのに、はるか昔の記憶では天井にアイドルのポスターを貼りつけていたことを思い出していた。

「ほしのあき・・だったかな。。。」

一星は長年、ふたつの記憶を持つ自分に苦しんでいた。

忘れたくても忘れられない過去。いや、別な人生を歩んでいた世界。
『俺はあの日を境に忘れようと決心したはずなのに。。それなのに。。』

15年前、一星は母・静子とショッピングセンターでいずみと偶然の再会を果たした。

『最初俺はいずみを見かけたとき、喜び勇んで彼女に近づいて行っ
た。でも・・途中で気づいたんだ。。俺ははまだ3歳の子供で、い
ずみは大人の女性。しかも亭主と仲良く夕方の買い物。。』

ベッドで深いため息を漏らす一星。

『そうだな。。別におかしかないな。。でも権現とだなんて。。』

3歳の一星には、それから15年が経過した今も、トラウマとな
って彼の神経をむしばんでいたのである。

何度も何度も忘れようと努力しても、いずみの面影が付きまとう。

高1、高2のときにクラスメイトの女子と付き合ってはみたが、

どうしても相手が子供に思えて続かなかった。

だから高3の始め、友達の紹介で年上の5つ年上のOL女性とも付き合ってみたが、いずみのような人なつこさもなく失敗。

まあ大人の女性が高校生に甘えるはずもなく、一星の浅はかな行動が浮き彫りにされただけだった。

それ以来もう当分の間、誰とも付き合う気もしなくなったというのが一星の今の心境だろう。

だが、この一連のことは、母の静子には決して言うまいと決めていた。

母は自分の人生をやり直すため、そしていずみをこの世界で存在できる人間にするために起こした正義の行動。

それに形はどうであれ、父を探し出して一星を無事に産むことができた。つまり有言実行を達成した勇氣ある尊敬すべき母親なのだ。

『部屋にいたら余計な回想しちまうだけだ。。ぶらっとしてくるか。』

私服に着替えた一星は、自転車を当てもなく走らせていた。

何キロ走っただろうか・・

一息入れようと立ち寄った公園。

一星はベンチの前に自転車を止め、大きな伸びをしてからベンチに横たわる。

さわやかな風がとても心地よかった。

「テト。お前は今日からテトだよ。いい？」

突然近くから聞こえて来た声に一星はハッとして起き上がる。

『テト・・・？』

一星が少し離れたとなりのベンチを見やると、自分と同じ年齢くらいの女の子が、ペットの入ったカゴを抱えて座っていた。

横からよく見ると、そのカゴの中のペットは1匹のリスだった。

『まさか。。』

一星はゆつくりとその女の子に近寄って行く。

するとその子も人の気配に気づいて一星の方へと振り向いた。
まだ幼な顔だが、明らかに一星の記憶を蘇らせる顔。。

「あの・・君って・・もしかして水口和代・・ちゃん？」

女の子はびっくりした顔と不思議そうな顔を同時に表現していた。

「はい・・そうですけど。。？」

「ガ——ΣΣ（。D。；）——ン！！なんでだあああ？？」

第59話

沸きいづる思い

「アタシとどこかで会いましたっけ？」

「いやちよつと・・」

当然ながら一星には説明のしようもなかった。

時のひずみを超えて起こった出来事など、どう話したところで納得されるはずもない。

「あのお、お母さんは尚代っていう名前ですか？」

「ええ、そうですけど・・母のこと知ってるんですか？」

「いやちよつと・・」

和代は少しムツとした。

「あなたねえ、『いやちよつと』じゃ全然わかんないんですけど？」

「すみません。。」

一星にとってはそんなことより、なぜ和代がここに存在しているのか、その理由の方が気になって仕方なかった。

いずみと和代は同じ世界には存在しないはず。

母・尚代が栗山に嫁いで産まれたのがいずみ。違う世界で水口に嫁いで産まれたのが和代だからだ。

「あなた高校生？」和代の方から質問させる一星。

「あ、はい。和代・ちゃんもそうでは？」

「ちよつとねえ、まだ仲良くないのに『ちゃん』はつけなくていいし。(^ | ^ ;)」

「あ、ごめんなさい。」

「それにアタシ、思いつきり童顔だけど高校生じゃないから。」

「Σ―11 (∇ ;) ―1ええっ!!?」

「何よ!その驚き。それこそ失礼だわ!れっきとした24歳ですが何か?」

年下相手の高校生に、すっかり和代の丁寧語は消えていた。

「なんだかわけわかんないけど、何か用?アタシ早くテトと一緒に・あ、テトってこのリスの名前のことだけどね、とにかくもう帰りたいから。」

「あの・じゃあ聞いてもいいですか?」

「さっきからずっと一方的に聞いているじゃない!」

「そうでした (_ | _ ; ヒヤリ」

「で、何なの?死んだ母のこと?」

「Σ (_ | _ *エエッ!?死んだって・栗山尚代さんがですか?」

「水口尚代ですけど・なぜあなたが母の以前の姓を知ってるの?」

「いやちよつと・」

「もうっ!そればかり!いい加減にしてよ。」

「すみません。。どう説明したらいいかわかんないんです。」

「あつそ。じゃあもうアタシ行くから。」

和代はリスのいるカゴを持ってベンチから立ち上がった。

「あの・あの、待って下さい。もうひとつだけ教えて下さい。」

「ヤダ。」

「栗山いずみって人は知ってますか?」

「だからヤダって言うてるのに聞いているし・」

「そうですか。。ごめんなさい。じゃあ僕も帰ります。ご迷惑かけ

ました。。」

一星は和代に一礼して背を向けた。

和代は彼のなんとなく寂しそうに去ってゆく背中が気になり、不意に呼び止めた。

「待って。」

背中越しに振り向く一星。

「栗山いずみは・・・アタシの姉よ。」

「え？・・・姉？」

「ええ。でもアタシよりかなり年上なの。」

「でもいずみは・・・いや、お姉さんの姓が栗山なのはなぜ・・・？」

「ああ、アタシが水口だからでしょ。それはね、お互い父親が違うの。」

「は、はあ・・・」

「ヤダ、アタシったら知らない高校生に何でもかんでもしやべちゃったわ・・・」

和代は少しバツの悪そうな表情を浮かべていた。

「姉と知り合いなら、あとは直接会って話し聞いてね。じゃアタシはこれで。」

一星は慌てた。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ。お姉さんは元気にしてるかどうかだけでも。。」

「さあ・・・わかんない。だいいち姉とアタシは一緒に暮らしてないもん。」

「あ・・・そうですよね。お姉さんはもう結婚してるんですよね。。」

「いいえ、姉はパソコンおたくの独身よ。たぶん今も一人暮らしのはず。」

「たぶんて・・・」

「姉とはあまり連絡とってないし、交流もないのよ。姉に何の用があるか知らないけど、あなたのお母さんくらいの年齢よ。もう40の後半だと思うけど。」

「それは別にいいんです。わかってますから。」

「あっそ。じゃ今度こそアタシはこれで。君けっこうカッコいいね。アタシのタイプだけど年下はちょっとねえ。。さよなら。」

「さ、さよなら。あははは・・（へーへ；）」

ひとときの間とはいえ、かつてはつき合っていた水口和代からダメ出しをされたようで、一星は何ともいえない妙な気分になった。

一星は帰宅してからもうずみのことを思い出していた。

姿形は知りもしないのに、あんなに楽しく話した日々。。

これが相性なんだとつくづく感じ、益々彼女に引惹き込まれていた日々。。

何度も思い返しながら自分のパソコンに目をやる一星。

『このモニターの中で話した時間が懐かしい。。』

（。。。）ハッ！！

一星は突然、さっき和代から聞いた言葉を思い出した。

”姉はパソコンおたくの独身”

『も、もしかしたら。。』

一星はパソコンの電源をONにして、急ぎチャットを立ち上げる。

そしてPM画面に、あるIDを入力してみた。
プライベートメッセージ

robin830

そして自分はponsukeと名乗ってメッセージを一言入れてみる。

一星の鼓動は高鳴っていた。

ponsuke…ロビン、もしこれを読めたなら君と話したい。返信待ってる。

一星は送信ボタンを押した。

第60話

会いたいの会いたくない

いずみは長い孤独の日々を送っていた。

ゆく年来る年、何も変わらずただ生きているだけの毎日。

以前テレビで明石屋さんまが好きな言葉に、

”生きてるだけで丸もうけ”というフレーズがあった。

常に前向きで素晴らしい言葉だと思う。

でもそれは生きている幸せを感じている人の言うセリフだ。

充実した人生を送っている人の言える言葉なのだ。

いずみにはこのフレーズを好きになる要素が全く見当たらなかった。

亭主の権現京二が肝硬変で死んでから早15年。

いずみは権現家とも絶縁して独り身になり、再婚することもなく黙々と働くだけの日々を過ごしてきた。ただ生きるためだけに。

何の目標も夢もあるわけでもなく、誰かの助けを求めることもなく、そして好きな人を見つけるわけでもなかった。

いずみはこれまでの自分の境遇といい、人生にはすでに失望していたが、自分の命だけは粗末にするまいと決めていた。

”時のひずみ”の向こうでは、存在すらできなかった自分に比べると、今の自分には体がある。人と会話できる。食べたり飲んだり睡眠もできる。

これもきつと一星の母・静子のおかげだと思うと、辛くても苦しくても生き抜いていこうと決心していたのである。

46歳独身の栗山いずみ。交流する女友達もほとんどいなくなっていた。

まわりは皆、一般主婦である。話す話題も子供のこと、学校の行事のことが中心。

家庭の持たないいずみにとって、ついてゆける話ではない。

そうした中で彼女は更に孤独になっていった。

この日もいずみは仕事から帰宅後すぐ、テレビとパソコンの電源を無意識に入れる。

もうそれが帰宅後の習慣にもなっているし、何より第1の理由として、家に独りでいる静けさほど大嫌いなものはなかったからでもある。

いずみは部屋着に着替えてテレビに目をやる。

「何も大した番組やってないわね。」

そして次はパソコンのモニターへ。。

Σ（□；えっ？！！！！

そこにはP M画面が開いていた。
プライベートメッセージ

だがそれだけでいずみはこんなに驚かない。相手先のIDに仰天したのだ。

pon su ke…ロビン、もしこれを読めたなら君と話したい。返信待ってる。

「一星・・・どうして今更私を。」

いずみが瞬時に思ったことは彼との年の差だった。

ずっと昔に偶然ショッピングセンターで出会ってから、かなり時は経っているが、生まれ変わった一星はまだ未成年のはず。

親子ほど年齢の離れた現実にショックを受けたいずみは、一星を“

幻の思い出”として封印していたのである。

だがそれが今、一星の意志によって突然呼び戻された。

いずみはためらったが、ハヤる気持ちを抑えきれない。

権現京二との見誤った結婚。そして彼の死。その後はいかなる男も受け入れず、黙々仕事に打ち込みながら日陰のように生きてきた。今、一星とチャットしたところでどうなるものでもない。それはわかってる。だが心のよりどころのないいずみにとって、最後の支えとなり得る可能性を秘めた存在は、幸村一星しかないと思った。『話したい。。一星と一言でも。』

いずみはチャット画面に向き直り、返信をキーボードで打ち始める。

robin830..PMしてくれてありがとう。ずっと記憶が残ってたのね。。

1分ほど経ってから返信が来た。どうやら気づいたようだ。

ponsuke..やっと話せた！今すっげえ嬉しいよ俺！超お久しぶり！！

robin830..ホントお久しぶりね。どれくらいぶりかしら？

ponsuke..15年ぶりだよ。俺が3歳のとき街でいずみと会ってるから。

robin830..覚えてたのね。。

ponsuke..忘れるわけないだろ。

robin830..でも一星が生まれて良かったわ。あなたのお母様ってすごい。」

ponsuke..今も俺は母さんには頭が上がらないよ。感謝してる。

robin830..お母様元気？

ponsuke..ああ。それよりまずいずみと会いたいよ。

robin830..えっ？

pon su ke..会ってたくさん話したい。

ro bi n 8 3 0...一星、わかってるでしょ？私・・・もう若くないの。

pon su ke..そんなの知ってるよ。関係ないじゃん。

ro bi n 8 3 0..幻滅するよ。オバサンだもの。。

pon su ke..だから関係ないって。

ro bi n 8 3 0..ガツカリするだけだよ。

pon su ke..しないって！俺が見た目で人を判断すると思うなよ！

ro bi n 8 3 0..だって・・・それにあなた、未成年でしょ？

pon su ke..18歳さ。ここまで長かった。長すぎた。

ro bi n 8 3 0..どうして？彼女とデートしたりしてないの？

pon su ke..俺には・・・無理だったんだ。。年は18でも精神年齢は26だ。

ro bi n 8 3 0..以前の世界の記憶も全部残ってるのね。。

pon su ke..3歳のとき、いずみと会うまではわからなかったんだ。

ro bi n 8 3 0..えっ？

pon su ke..でもあの時、会った瞬間全ての記憶がが一気に蘇ったのさ。

ro bi n 8 3 0..そうだったの。。

pon su ke..それなのにいずみは権現と一緒に楽しく買い物をしていた。あの時、どんなにショックだったことか。。俺は泣いて母さんの元へ走って逃げたんだ。

ro bi n 8 3 0..そう。。でもね、あの時は私、全然楽しくなかったのよ。。

pon su ke..???事情が色々あるようだね。だからとりあえず会って話そうよ！ねえ！

ro bi n 8 3 0..そうね・・・どうしようかしら。。

pon su ke..会って話せば、お互い知らなかったことや、ひょ

っとして勘違いしてたことなんかもわかると思うんだ。

robin830・・・わかったわ。会いましょう。。

こうして“時のひずみ”を越えて、幸村一星と栗山いずみの初対面が実現することになったのである。

だがいずみの心境は複雑なものがあつた。

『会いたいけど・・・会いたくない。。こんな私を見せたくない。。』
それでもやはり、高鳴る気持ちは抑えられないでいる。

『でも・・・会おう。会って今の自分に決着をつけよう。。』

第61話〜65話

第61話

たどり着いた瞬間

数日後、待ち合わせ場所に先に到着したいずみは極度の緊張状態にあった。

会って一星にどう思われるか気が気でなかった。

それもそのはず。18歳と46歳ではまるで親子同然。

長い時を経て初めて対面するというのに、自分はあまりにも年をとり過ぎた。

会うのに承知はしたものの、ここにきて不安は募るばかりだった。

『せめてあと10年早かったら・・・』

いずみがそう思ったところでどうなるものでもない。

自分は一星に会ってどうするのか？何を言いたいのか？

いずみはこの日までずっと考えていた。

だがいくら考えても結論としては、この対面で全てを終わりにすることしか選択肢がなかった。

一星はまだまだ若い。将来がある。自分と釣り合うはずもない。

未練がないと言えばウソになる。いずみはずっと一星を思い続けてきた。

権現との結婚生活の中にも一星はいずみの心の中で生きていた。

ひょっとしたら権現はそれに気づいて自分に辛くあたってきたのかもしれない。

彼が死んで13回忌も終わった今、いずみは当時を振り返ることができる。

『だしたら・・・私は罪人。人の心を傷つけた。この罪を償うためには・・・やっぱり一星と縁を切らなきゃ。』

携帯で時間を見るいずみ。待ち合わせ時間ちょうどになった。

そういえば、一星は自分の顔もいでたちも知らない。携帯番号は交換したので近くに來たらかかって来るかもしれない。

あるいは遠くのだどこから自分を見て確認しているのかもしれない。緊張のあまり、つまらぬことまで連想してしまういずみであった。

ふと遠くをみやるとカップルが何組か、思い思いのペースで歩いている。

どの組を見ても笑顔があって楽しそうだった。

そんな中、ひとりの青年らしき男性が、遠くからまっすぐにこちらへ歩いて来るのが見えた。彼女らしい連れもいない。

『もしかしてあれが。。』

いずみの胸は激しく脈を打ち始めた。

明らかにその人物はまっすぐ向って来ていた。しかもわき目も振らずに。

『い、一星だっ。。』

まだ表情がよくわからない距離ではあったが、いずみは直感で確信を得た。

徐々にその青年は早歩きになって近づいて来る。やがて表情もわかるくらいの距離になると、彼は白い歯を見せながらいずみの元へ直進して来るのがわかった。

『なぜ私がわかるのかしら。。見た事もないはずなのに。。』

いずみの目にも彼は明らかに18歳に見えた。顔もまだ幼い青年。まさに“時間のひずみ”の向こう側にいた26歳の幸村一星をそのまま若くした感じた。

そしてついにいずみの至近距離まで近づくと、彼が笑顔でありながらも目が潤んでいるのがわかった。

『一星・・なぜ。』

いずみが心でそう呟くや否や、いきなり彼の両手でギュッと抱きしめられた。

「えっ!!?」

あまりの急な出来事にあぜんとするいずみ。

「会いたかった・・・ずっとずっと・・・何年も何年も。。。」「

一星は強い力でいずみを抱いて離さない。

いずみがあぜんとしたのは一星の突然の行為に驚いただけでなく、明らかに大人の男性にしかできない大きな包容力のある抱き方だったからだ。

強い力で抱かれながらも、優しく包み込むような柔らかさを併せ持ち、まるでその中に溶け込まれていきそうな。。。愛が伝わる抱きしめ方。。

いずみは抵抗せずに、18歳の青年にそのまま身を任せた。

二人は行き交う人の波を気にも留めずにしばらく抱き合っていたのである。

第62話

年齢のギャップ

「一星、おなか空いてる?何か食べる?」

長い抱擁後に口を開いたのはいずみからだった。

「いや、あんまり。。。なんか胸いっぱいだし。」

いずみは嬉しかった。こんなオバサンになった自分を見てもたじろぎもせず、胸いっぱいだと目を潤ませている。正直、予想すらできなかったことだ。

「じゃあ外は寒いし、軽くお茶でもしましょ。」

「うん。。」

二人が腰を下ろした店には人影もまばらで、プライベートな話をするのにもうってつけのタイミングだった。

それでもいずみは、一星と差し向かえで座るだけで恥ずかしくてならない。

彼に面と向って顔を見られるのにはまだ抵抗があった。うつむき加減で彼と目を合わせられないでいるいずみ。

「どうしたいいずみ？ チャットみたいに普通でいいんだぞ。」

「え、ええ。。」

あまりに堂々と話している彼にいずみは驚いた。

普通の高校生なら家族以外には丁寧語で接するはず。それなのに一星は28歳も年上の女に遠慮なくタメ口する。

いずみは思い切って聞いてみた。

「一星・・私を初めて見た第1印象はどうだった？」

「どうって・・一言では言えないなあ。」

「そうよね。私、もうオバサンだものね。本当ならこんな私をあなたに見せたくなかったんだけど。」

「いやそういう意味じゃない。どうしてそんなこと言うんだ！ いずみは綺麗だよ。全然オバサンだなんて思えない。」

「ウソ！ 誰が見たって今の私と一星は親子よ。」

「あんな・・」

ちょうどそのとき、この小さな店の女主人と思えるエプロンをした女性が二人のテーブルにやって来た。

「ご注文はお決まりですか？」

「俺はアメリカンでいい。」

「アメリカンおひとつ・・そちらのお母様は？」

「え？・・・・その。。」

いずみが一番言われたくないことを見事に言われてしまった。苦笑いするいずみを見て、一星は突然声を荒げて抗議する。

「お母さんじゃないです！失礼でしょう！勝手に判断しないで下さい！どんな人でもお客様と呼ぶのが商売の鉄則じゃないんですか？」
「す・すみません。。つい。。」

店の女性は何度もお辞儀をして謝った。

いずみの方もいたたまれなくなって声をかける。

「いいんですもう。。そんなに頭下げないで下さい。あ、私にはカプチーノお願い。」

「はい・・すぐに。」

女性はもう一度一礼してカウンターへ去って行く。

「きつとあの人の、俺のこと超生意気なクソガキだと思っただろうな。
(ー)」

「でもね一星・・あの人は素直にそう見えたから言ったことなのよ。逆に正直。仕方ないことだわ。」

「誰がそう見えても俺は違う。いずみ、今彼氏とかいるのか？」

「いないよそんな人。。この年ではもう難しいわ。」

「じゃ決まりだ！俺とまた付き合おう！今度は堂々とリアルで会ってさ！」

「ちょっと待って。一星、あなた本当に私でいいの？別に気を使わなくていいのよ。」

「何だよ。俺は子供からやり直してやっところまでたどり着いたんだぞ！俺はこの瞬間のために生きて来たんだ！」

いずみは深いため息をついた。気持ち嬉しい。こらえ切れないほど嬉しい。

だがいずみにはどうしてもこのお互いの立場を考えると素直に受け入れられなかった。

「一星、あなたにはあなたの将来があるわ。過去を引きずって生きてはダメ。」

『（。○。；）ええ？どうしてそんなこと言うんだ？』

「現実を見て。あなたはまだ18歳。私は46歳。これから世間を

渡って行くには難しすぎると思うの。」

「意味わかんない。」

「萌え上がる感情は今一瞬だけのものよ。それが覚めたらあなたは私を必要としなくなる。きつとね。」

「そんなこと考えたこともない。大丈夫だって!」

「いい? 10年経ったとして、一星が28歳のとき私は56歳よ。あなたが42歳でまだまだ仕事もバリバリこなしている時、私はもう70歳なの。この意味わかる?」

「。。。。。」

「私はあなたの人生のお荷物にはなりたくないの。確かに一星との思い出は一生忘れられない素敵な過去だった。そして今日の出会いも心に刻まれると思う。」

「俺だってそうさ。だからこれからだって。」

「それは・・やっぱり無理よ。リスクが大きすぎる。」

「いずみ・・これまでに何があった? 権現といつ別れたんだ? 随分ひどい目に遭ったんじゃないのか?」

「・・彼は死んだのよ。心臓発作で。もう13回忌も終わったわ。」

「じゃあずつといずみは未亡人だったのか?」

「いいえ。間もなくしてから権現家とは縁を切って姓を栗山に戻したの。母も再婚して新しい生活をしてたから私が帰る場所もなかった。」

「そうだったのか。。お母さんが再婚した相手が水口って男だったわけだ。」

「ええ。でもそれが自分の寿命を短くしたのよ。」

「??? どういうこと?」

「再婚した母は49歳で出産したの。高齢出産でかなりの難産だったの。」

「それで産まれたのが和代だった。」

「そう。そして母はそれ以来体調が回復しないで・・その3年後に死んだわ。」

「・・・・・・」

「私は天涯孤独になった。もう独りで生きていくしかないと思った。結婚にも失望したし、男を信用する気にもなれなかった。今までずっとね。」

「そっか。。。辛いことばかりだったんだな。。」

「でも今は違うよ。この18年間で今が一番素晴らしい日。一星と会えて最高に嬉しかった。さっきまですごくこんな自分が恥ずかしかったけど、今はそう思わなくなったよ。」

「だったら・・・・」

「でもね、これは今日だけだから素晴らしいの。一星とまた巡り会えるなんて思ってたしね。なんか吹っ切れたみたい。」

「・・・・」

「今日をきっかけに、これからはお互いの道を別々進んで行きましよう」

数分間、沈黙が続いた。店のママがコーヒーをふたつ置いて足早に去ってゆく。

やがて、ゆつくりと話し出したのは一星だった。

「あのさ・・・せっかく会えたんだからさ・・・これっきりはちよっと寂しすぎるよ。」

「でもその方がお互いのためには・・・」

「もう一度、別な日に会ってくれないかな？」

「えっ？」

「俺もまだ色々考えたい。結論をそう簡単に出したくないんだ。俺にも今までいろんな事情があったんだ。いずみも大変だったんだろうが、俺のことも少しは知ってくれないかな？それから改めて結論を出してほしいんだ。」

「・・・・わかったわ。じゃあ、一星の都合のいいときに連絡してちょうだい。」

「ありがとう。嬉しいよ。」

第63話

ロビンとポンスケ

独り暮らしの家に戻ったいずみには、自然にこぼれる笑みがあった。

その理由の一つとして、一星に会うまでの極度の緊張感から解き放たれたこともある。

またそれと同時に会えた喜び、そして彼が18歳とはいえ、心の中身は以前の世界のままの大人だったこと。年をとった自分に対して変わらぬ愛情を注いでくれたこと。どれをとってもこれ以上の嬉しさはない。

『すっきりした。。これでもう悔いはないわ。』

一星に、もう一度また会ってから決断してほしいと言われて返事はしたが、いずみの気持ちは固まっていた。

潮時のタイミングは今しかないのだと。これで優しい気持ちで終止符が打てると決意していたのである。

鏡で自分の表情を見るいずみ。晴れ晴れとまではいかないが、何かが吹っ切れたあとの軽い表情になっているのが自分でもわかった。『私は一人で生きていこう。私には素敵な思ひ出がある。たくさんの嫌なことより、一つの素晴らしい経験の方が何倍も何百倍も勝っている。心に刻んで生きてゆける。』

いずみはベランダから星を見上げながらそう心に誓った。

一星は再びいずみと会う約束を一週間後に取り付けたものの、とてもそれまで我慢できる精神状態ではなかった。

翌日と翌々日の二晩、チャットを立ち上げてみてもいずみのONは

ない。

オフラインメッセージで話しかけても入れても返信はなかった。

三晩目の夜、一星は話しかけるメッセージではなく、いずみに伝えたいことを直接書いて送信した。

pon su ke…いずみ、俺の気持ちは全く変わらない。前の世界の時からずっとね。

自分の気持ちを更につらつらと書き連ね、幾度も送信を繰り返す一星。

『今夜はここまでにしよう・・・』

一星がチャット画面を終了しようとする寸前、ついにいずみから返信が来た。

ro bi n 8 3 0…一星・ありがとう。とても嬉しい。でも・pon su ke…やっと返事くれたね。無視されてるかと思った。
ro bi n 8 3 0…ごめんなさい。どう返信したらいいかわからなくて。

pon su ke…どうして？しつこい俺が嫌いになった？

ro bi n 8 3 0…そうじゃないよ。一星が本気なんだってよくわかったよ。

pon su ke…ならなぜ躊躇するんだ？年齢差がそんなに気になるのか？

ro bi n 8 3 0…当然のことだわ。一星にとって一生のことなのよ。

pon su ke…わかってるさ。そんなことくらい。

ro bi n 8 3 0…いいえ、わかってない。一星は今しか見えてないでしょ？二人でずっと暮らすということはそう容易いものじゃないの。

pon su ke…あのさ、世の中には年の差カップルなんてたくさ

んいるじゃないか！

robin830..でもそれは男の方が年上の場合でしょ。

ponsuke..女だっているよ！

robin830..ごくまれなケースよ。

ponsuke..俺が平気だって言ってるのにどうしていずみが気にするんだ？

robin830..だって・・私は一星のために何もしてあげられないと思うから。。

ponsuke..なんでそう思う？

robin830..私はもう・・子供も産めるかどうか。。

ponsuke..バカだな。俺たち二人の問題に子供なんて関係ない。

robin830..でも欲しいでしょ？子供。

ponsuke..それは結果論として出てくる問題だ。本題じゃない。

robin830..同じことなのよ。人の子供の成長を目にする度に絶対自分も欲しくなるもの。でもそれが叶わなくなったら・・あなたは私に幻滅するわ。

ponsuke..あのなあ・・

一星は頭をかきながらため息をついた。

『いずみは相当俺に気を遣っている。今までの彼女の道のりを思えば疑心暗鬼になるのも仕方ないかもしれないが。』

ponsuke..なあいずみ。無理して強がってないか？

robin830..そんなこと・・ないよ。

ponsuke..かたくなに自分に言い聞かせてるだけだろ？

robin830..・・違うよ。

ponsuke..年齢の見合った男を探すのか？

robin830..そんなことしないよ。もう独りでいい。

ponsuke..そんなの世捨て人だ！

robin830..それは世の独身女性に失礼な発言よ。

ponsuke..それは違う。独身にも色々あるだろ。目標に向けて努力してる人や、結婚よりも大事だと思う価値観を持っている人。理想の結婚にたまたま縁がまだない人。そういう人のことを言うてるわけじゃない。

robin830..・・・

ponsuke..いずみに何か目標はあるのか？生きがいはあるのか？

robin830..それは。。。

ponsuke..俺はね、何も今だけの感情で言ってるわけじゃないんだ。見た目は18歳でも精神年齢は昔の大人の俺だ。その俺が言ってることなんだぞ。

robin830..・・・一星。。。。。もういい。なんかもう悩みたくない。

ponsuke..・・・わかった。今日はもうやめよう。

robin830..ごめんね。

ponsuke..いいんだ。俺こそ言い過ぎたかもしれない。ごめん。

robin830..ねえ・・・私たちってこのチャットで初めて会話しただけじゃない。

ponsuke..ああ・・・そうだったな。遠い記憶だけど懐かしいな。

robin830..私たち・・・またあの時と同じでいいんじゃないかな？

ponsuke..どういうこと？

robin830..ネットだけの世界。この二人だけの世界の中でなら年齢差もリアル社会での障害も関係ないわ。

ponsuke..・・・本気で言ってるのか？

robin830..私もそれなら一星とこれからも普通に話せると

思うの。

pon su ke .. そりゃ俺だっていずみとチャットもしたいさ。でも・・・でも・・・

ro bi n 8 3 0 .. やっぱりそれだけじゃダメ？

pon su ke .. 俺は・・・俺はずつといずみとネットの恋人同士でありたいし、そう願って来た。でも。。

ro bi n 8 3 0 .. でも？

pon su ke .. やっぱり俺はいずみと結婚したい！ネットの婚姻サイトなんかじゃなくてリアルで一緒にいたいんだ！

ro bi n 8 3 0 .. そう・・・じゃあもう一星とチャットもできなくなるのね。。

pon su ke .. えっ・・・？

ro bi n 8 3 0 .. さよなら。。一星。

pon su ke .. ちょ、ちょっと待って！約束通りもう一度会ってくれるんだよね？

ro bi n 8 3 0 .. ・・・ごめんなさい。わからなくなった。。じゃあこれで。

いずみがチャット画面から落ちた。

一星はただ呆然とパソコンを眺めているだけだった。

『なんだよ。これで完全に終わっちゃったのかよ。。そんなバカな。。』

一星は暗い部屋の中で眠るのも忘れてむせび泣いていた。

第64話

思い出に変わらない

あれから二年の歳月が流れた。

いずみは今に至っても、ふとした瞬間に一星のことを思い出しては落ち込んでいた。

結局あるとき、彼と二度目に会う約束を破棄してしまった。

いずみのかたくなな決心が、待ち合わせ場所に足を運ばせなかったのである。

悔いはないはずだった。そのつもりだった。

だが一方で、本当にそれでいいのか？と常に自問自答する自分もいた。

『私は意地を張ってただけなんだろうか。。』

そしてまた深く考え込んでしまういずみ。

『世捨て人か。。』

星に言われた言葉が何気にくと浮かんだ。

『そうよね。。当たってるかも。。』

いずみはこの二年間、ただ黙々と仕事をして来ただけの人生。

人に話せるプライベートな趣味も持たず、自分に磨きをかけるためのエクササイズなどを取り入れて来たわけでもない。

決して後悔はしないつもりだったのに。。

いずみが公私共に充実している日々を過ごしていたならば後悔はしていなかったかもしれない。だが、今のいずみにとって心の安らぐ瞬間は、一星と過ごしたチャットでの時間でしかなかったのである。

そしてそれと同時にその事実が、いつまでも消えぬ苦しみにもなっていた。

いずみの日課と言えば、毎晩帰宅後にパソコンを立ち上げること。あちこちのブログを巡って、たまに自分と波長の合いそうな人を見つけると一言コメントを書いたりする。でも自分のブログは持たない。何も書くことがないからだ。

だから余計に人のブログはうらやましく思った。

『いいなあ・・・みんな色々あって幸せそうで。。。』

一星からのオフラインメッセージもこの二年プツリ途絶えていた。

いずみが会う約束を守らなかったあの日以来ずっと。。。

内心、いずみは一星がしつこいくらいに何度も何度もメッセージを送信してくると思っていた。

『もしあと数回、メッセージで強く押されたら・・・』
と優柔不断な考えもよぎったりしていた。

でもその甲斐もなく、結局は彼からの連絡は完全になくなっていったのである。

もちろん、いずみから話かけることなど到底できるはずもなかった。『すべては終わったことだわ。。早く気持ちを切り替えないと。。』もう何度もそう思ったことなのに自分が情けなくてしょうがなかった。

その夜、いずみは夢を見た。女性の姿が曖昧にぼやけて見える夢。だが目だけはハッキリ見えている。せつなそうな目。。何かを訴えようとしている目。。

自分に近づいて来るわけでもなく、ただ遠くからこちらを見ているだけ。特に怖くもなかった。夢はその後何の進展もなく、いずみからその女性に近づいていこうとすると、かすかに彼女が微笑んだような気がした。そしてその幻影は自然に消えてゆき、いずみが我に返って目覚める頃には朝になっていた。

ゆっくりベッドから上半身だけ起こすいずみ。そして何気にパソコンを見る。

「あ、私寝る前にパソコンの電源落としてなかったんだ。」

すぐに立ち上がってパソコンの前まで来るいずみ。まさにそのとき、
プライベートメッセージが
突然PM画面上に開いた。

pon su ke…俺の母さんがいずみに会いたがってる。来てくれないか？

一星から突然の申し出に戸惑ういずみ。しばらく返信しないでいと再び彼からのメッセージが画面に飛び込む。

pon su ke…頼む。場所は教えるから。俺の母さん…もう長くないんだ。。

第65話

二十年愛（前編）

幸村静子は自宅の部屋から穏やかな海を見ていた。

遠くから聞こえてくる静かなさざ波に耳を傾けていると、今までの慌しい自分の人生がまるでウソのように思える。

色々あった。。あり過ぎた。。でもそれは全て自業自得。自分の責任に他ならない。

そんな自分がここまで生きられたことには悔いはない。充分だ。今年69歳を迎えた静子はそう思っていた。

ただひとつ悔やむとしたら、自分のせいで人生を台無しにしてしまった子がいたこと。

あの子は今幸せになってるんだろうか？いや、なっていて欲しいという願いが静子の脳裏からいつまでも離れないでいる。

あの世界ではずっとひとりぼっちで誰にも気づかれずに生きていたあの子。

『いずみさん・・・』

21年前、静子は必死だった。あの時間のひずみを通してやって

来たこの世界。

海のそばで暮らしたいと願っていた夫・幸村の言葉をヒントに、懸命になって捜した。

そして来る日も来る日も足が棒になるほど歩きまわり、ついに奇跡が身を結び、夫となるべき幸村にたどり着いたのだ。

突然押しかけた静子に彼は、以前と同じように理由は何も聞かず、ごく自然に優しく受け入れてくれた。もちろん彼にしてみれば、以前と同じようにと言っても、そのようなことをした記憶などあるはずもない。

きつと幸村の人柄なのだろう。静子は彼に運命的なものを感じた。

だが目的はそれで終わったわけではない。静子には幸村と結婚して一星をこの世に誕生させなければならぬ使命がある。

結果的には幸村の優しさに包まれながら、一星を産むことはできた。高齢出産のリスクを背負い、かなりな難産だったために長く苦しみ抜いた末の出産だった。その上、その後遺症からか片耳が聴こえなくなり、回復しない体調も慢性的になった。

それでも子育てと苦しい生活を乗り越えるのに内職をしながらも必死な毎日を過ごしここまで生きてきた。

時のひずみを超えてやり直そうとやって来た静子だが、世の中はそんなに甘く迎え入れてはくれない。

更に夫・幸村の死・・・彼と一緒に暮らして9年目のことだった。

静子は以前の世界と合わせて、愛する幸村を2度も失う辛くせつない経験をする事になってしまったのだ。

挫折感に苛まれる静子。何のために時のひずみを超えて来たのかわからなくなった。

何度も死のうと思った。だが一星はまだ幼い。自分ひとりのために一星を巻き添えにすることだけはできない。今、自分が生きることが放棄したら以前の世界よりも悪い結果になるだけだ。

『何があっても一星だけは成人まで育てないと・・・』

その後、生活保護を受けながらも静子は弱っていく体の中で必死

に働いた。

そんな母の姿をずっと見てきたせい、一星は中学卒業後、進学せずに働くと言ってきたことがなかった。彼の学力からすれば、県内屈指の進学校へも入学できる成績であるにも関わらずに。

静子にとっては涙が出るほど嬉しい言葉だが、それを承知するわけにはいかない。

「一星、高校だけは出なさい。これから社会人の人生の方が長いよ。大きな企業は高卒でさえ採用されないのに、中卒ではいくら努力しても限界があるの。それ以上の上は望めないのよ。」

親のために子供にここまで考えさせる自分が情けない。

結局一星は、高校進学はしたものの、学費の安い公立高校を選択した。そしてこのことでも静子は心を痛めたのだった。

『私の生きて来た道は・・・人に迷惑しかかけていないのではないだろうか。』

窓際に横付けしてあるベッドから、上半身を起こして海を眺めている静子。

今までの過去を思い出しながら回想していると涙がひとしずく頬を伝う。

その後数時間、静子の中でも“無”の状態が続いた。。。

ただ海を眺めているだけの時間。。そして目を閉じて波の音だけを聴いている時間。。

やがて静子はその目を開けた。その表情はキリッとし引き締まっております、数時間前とは一変していた。

『まだ間に合うかもしれない。私ができる最後のこと。。』

数ヶ月前、静子が体調不良を訴えて検査入院しているときに、一星が病室でポツリと言ったことがある。

「母さん、実はいずみと会ったことがあるんだ。」

「（。○。；）えっ？いずみって・・・尚代の娘の。。」

「ああ。栗山いずみ。」

「おおっ！」静子は絶句した。

「良かった。本当に良かった。ちゃんと尚代の子として産まれてたんだねえ。」

「まあそうだけど。」

「・・・どうしたの？何かあったの？」

「ずっと隠しててごめん。今の話、もう2年前のことなんだ。」

「Σ（ー◇ー＊エエッ！？そんな前なの？なんでその時に教えてくれなかったの？」

「もういずみは46歳だったんだ。。俺は全然気にしてないのにいずみの方から離れていったんだ。それっきり会ってない。」

「・・・なんでそんなことに。。」

「俺たちは時間のひずみの向こうでずっと付き合ってたんだ。姿は見えなくてもネットで繋がってたんだ。」

「！！！！！」

「いずみは一度結婚してたけど、ずっと前に旦那が死んで以来、ずっと独り暮らしだったよ。でも俺との気持ちは絶対に繋がってたと思う。」

「・・・・・・」

「ごめんな母さん。早く言えば良かったんだけどさ・・・なんかあと味の悪い終わり方をしちゃったもんだから言いそびれてたんだ。年の差がそんなにネックになるなんて思ってもみなかったんだ。」

静子はこの時、猛烈に悔やんだ。一星といずみが以前の世界でそんな仲だったとは思ってもいなかったからだ。あの世界ではお互いが一緒の次元にいることは決してできない立場だった。

それゆえに、自分が時間のひずみに落ちることで、二人とも復活できることだけを考えていた。一星といずみが恋人関係で、この世界ではかなりの年の差が生じることなど考えもしていなかったのである。

そして今静子は自宅で療養の身。

そんな中、彼女は一星に頼みごとをした。

「一星・・・」

「ん？」

「いずみさんと連絡とれる？」

「ネットを見ててくれたらなんとか。。」

「お願い。いずみさんをここに呼んで。母さんが会いたがってるって。」

「でもさ・・・」

「お願いだから。母さんはもう長くない。自分の体のことはよくわかってる。」

「・・・」

「母さんの最後の頼みだと思って聞いてくれない？」

「・・・わかったよ。なんとかする。」

静子は決心していた。私がこの子たちにしてあげられる最後の仕事。

今はただ、一星がいずみをここに連れて来ることだけを願ってベッドにいる。

『私は・・・このままでは絶対に死ねない！！』

(続く)

第66話 エピローグ

第66話

二十年愛（後編）

車は海岸線沿いを走っていた。

いずみは一星の運転する車の助手席から青々とした海を眺めている。

「もうすぐだから。」

運転席から一星が言う。

「素敵なところに住んでるのね。景色もいいし。」

「死んだ親父が独身のとき、この土地に惚れ込んで引っ越したらしいんだ。」

「よく思い切ったわね。一星のお父様って。そしてそのお父様を探し当てた一星のお母様の根性もすごいわ。」

「息子ながら俺もそう思う。母さんには今でも頭があらがないよ。」

「・・・ねえ？」

「ん？」

「お母様がもう長くないって・・・どういうこと？」

「もってあと3ヶ月らしい。」

「Σ（ー◇ー＊エエッ！？　なぜ？そんな体なのにどうして自宅にいるの？治療は？」

「・・・俺も説得したんだけどさ。。なんか自分の寿命を悟ってるみたいで。。」

「でも・・・治る見込みがわずかでもあるんなら。。」

「母さん自身はそう思っていないみたいなんだ。堅い意志でさ。俺には母さんの思いを尊重するしか。。あとは本人から聞いてくれ。」

「・・・」

「さ、ついたよ。」

目の前に海が広がる少し高台の一軒家。古い平屋で大きくはないが、こじんまりして趣がある。潮風も体にかけて心地よかった。

「母さん。いずみを連れて来たよ。」

いずみは玄関に入るとすぐに静子の待つ部屋へ通された。

そしてそこには彼女がいた。年老いた幸村静子が。

窓際に横付けされたベッドに彼女は上半身を起こしていずみの方へ顔を向けた。

「いずみさん・あなたが尚代の娘の栗山いずみさんなのね？」

静子の声は感動で震えていた。

またそれと同じく、いずみにとっても静子はとても懐かしい存在であり、時を隔てて再会できた感動に思わず涙腺が緩んだ。

「はい、いずみです。お母様・随分ご無沙汰しました。またこの世界で再会できるなんて思ってもみませんでした。私・なんか胸いっぱいで。」

年はとってはいるが、確かに静子だと確認できた。あの一大決心の元、時間のひずみの中へ自ら飛び込んだ静子。

「お母様にとっては私を見るのが初めてだと思います。あの時から随分年をとってしまいましたが。」

「いいえ、私はあなたを一瞬だけ見たことがあります。一星が誤って穴に落ちたときです。あなたのお顔はあの時私の脳裏に焼きついています。今も変わっていませんよ。」

「そんな・恥ずかしい。」

「もっとそばに来てちょうだい。いずみさん。」

「はい。。」

静子はいずみの両手をとって涙した。

「ごめんなさいね。。本当にごめんなさい。あなたをどれほど苦しめてきたことか・とても許してほしいなんて言えた義理ではありません。ただただ謝るばかりです。」

「もういいんです。そんなに謝らないで下さい。お願いですから。私はお母様のおかげで“無の存在”からこの世界に復活することが

できたんですよ。」

「でも・・・一星から聞きましたが、あなたは今までずっと苦労されてきたようで・・・私、申し訳なくて。」

「運が悪いのは自分のせいですから。決してお母様のせいなんかじゃないです。」

「ありがたいはずみさん・・・こんな罪深い年寄りに怨みごとのひとつも言わずにそんな優しい言葉を。」

握り締めていた二人の手の上に静子の涙がこぼれていた。

「お母様、まだまだ長生きして下さいね。一星のためにも。」

涙ながらに微笑む静子。彼女にとって、長年引きずっていた胸のつかえが幾分取れたような気がした瞬間だった。

やがて静子は、いずみの後ろに控えていた一星を見ておだやかに言った。

「一星、いずみさんと二人だけでお話したいから少し席を外してくれないかしら？」

「え？あ、ああ・・・わかった。」

ひとつ返事で一星が静かに部屋から出て行く。それを確認すると、静子は再びいずみに微笑みかけた。

「どうぞそのイスに座って楽にして。」

「あ、はい。ではお言葉に甘えて。」

静子の指示通りにいずみはベッドのそばのイスに浅く座った。

「いずみさん、突然でなんだけど、あなた今、好きな人はいるの？」

「・・・え？いえ別に今は・・・というか、もうこの年では。」

「じゃあ結婚する気が全くないわけではないのですね？」

「ええ・・・でも。」

「あなたを好きな人がいたら考えてくれる？」

いずみは静子は言わんとしていることにすぐ気がついた。

「一星・・・のことですね。」

「・・・ええ。私はあなたたちが以前の世界で付き合っていることな

ど夢にも思っていないませんでした。だからあなたたちを離ればなれにさせてしまった責任があります。」

「そんな・お母様のせいじゃありません。さっきも言いましたけど、お母様は私を復活させてくれました。お礼もせずに今日まで生きてきた私の方が申し訳ないくらいです。」

「ではまた一星と元に戻ってくれますか？」

「・・・それは。」

「もう一星が好きではなくなったと・・・？」

「いえ・・・そうではありません。いつまでも忘れることができません。」

「年齢差があなたにとって大きな壁になっているからですね？」

「・・・はい。」

「私は一星の気持ちのままに進んでもらって良いと考えています。」

一星は今でもずっとあなたのことを思っています。母親の私が年齢差など気にしないと云ってもダメですか？」

少しの間があつてから、いずみが話し始めた。

「この世界では一星と私は釣り合いが取れません。20歳と48歳あまりにもかけ離れすぎています。芸能界や華々しい世界でならともかく、一般社会でまわりから好奇の目にさらされながら生きてゆくのはとても厳しいと思います。」

「・・・いずみさん。あなたは世間体を気にするのですか？」

「いいえ。私は平気です。私が心配しているのは一星のことです。」
「・・・」

「彼がどんなに世間からバッシングや陰口を言われるかと思うと・・・私のせいで彼を苦しめることはできません。彼とのことは素敵な思ひ出にしたいんです。一生忘れることのできない素敵な思ひ出として胸にしまって生きて行きたいんです。一星は若いし、まだまだ人生のチャンスがあります。きっと素敵な女性も現れるでしょう。私のために彼の将来を閉ざしてしまうことは許されないことなんです。」

静子は思った。『この人は真っ直ぐすぎる。でも・・素晴らしい女性。』

「ごめんなさい。お母様。」

深々とお辞儀をするいずみ。そしてそれを微笑ましく見つめる静子がいた。

「いずみさん。」

「はい。」

「あなたは自分を犠牲にしすぎてるのではないですか？もう少しご自分のことを中心に考えてみてもバチなんか当たりませんよ。」

「は・・あ。。。」

「一星はね、見た目と体は20歳でも、心の中は以前の世界いたときの社会人です。」

「・・・」

「私はあの子を産み直したとき、彼にはもう時間のひずみの向こうの記憶なんてないものと思っていました。それが物心つくかどうかの3歳か4歳ごろ、突然大人びた子供になってしまったんです。」

「その時に記憶が蘇ったということ・・ですか？」

「忘れもしません。私と一星がショッピングセンターに買い物に出かけての帰り際だったと思います。一星が私に理由もなく走って泣きついて来たのです。」

「！！！」

いずみはそれを聞いてハッとした。

『あの時だ・・私と権現の姿を一星に見られたとき。。』

静子は更に話し続ける。

「あの時から一星は変わりました。というか元の世界の自分を取り戻したと言っていていいでしょう。」

「そうだったんですか・・」

「でもあの子の性格の一途さは全然変わっていません。いずみさんと付き合っていたことは最近になって知りましたが、そのあと一星から、この世界に生まれ直して来てからも、ずっといずみさんだけ

を繰り返し思い起こしながら生きて来たと聞きました。

「……」

「あなたが他の誰かと幸せになっているのを見て、一旦は諦めたとも聞きました。でも2年前にあなたと再会して独り身だと知ったときから、あの子の情熱は再びいずみさんに注がれるようになったようです。」

「一星……なんでこんな私になんか。」

「あの子の信念は変わりません。私が保障します。世間体に流される子でもありません。どうか一星を……一星を20歳だと思わずに、大人の男として見てはくれないうか？」

「お母様。」

「私はもう長くはありません。この私の最初で最後の頼みだと思っ
てどうか……あなたが今も一星を好いてくれているのなら、どうか
一緒になつてくれないでしょうか？」

静子は再びいずみの手を取って懇願するが、途中咳き込み始める。

「お母様……お体に悪いですから、どうかもう横になって下さい。」

「ゴホッ。ゴホッ！！……私の自己満足で言ってるわけじゃない
んです。私のした過ちによってあなたたちの人生を狂わせたことは紛
れもない事実なんです。あなたたちが結ばれなかったら私は……私
は死んでも死に切れません。」

「お母様、そんなに思いこまないで……ほら、ゆっくり横になって。」

「

いずみは静子を介助しながら言った。

「お母様、どうして病院で治療なさらないんですか？」

「自分の体は自分がよくわかるってドラマでよく言うけど、あれは
ほんとね……いずみさん、私はね、長生きだけがいいこととは思
ってないの。どれだけ一生懸命生きて来たかということの方が大事。
そして曲りなりにもそれが何とかできたから私はもう充分満足なん
です。死んだお父さんと同じ海を眺めながら最期を迎えたいのです。
……ただ一つ悔いることは一星といずみさんのことだけ。」

「お母様。。」

いずみの心は揺さぶられた。静子の思い。そして一星の気持ちと自分の思い。

『こんな人に思われ続けているなんて・・・一星。一星、あなたは私の運命の人なの？・・・もしそうなら。。』

いずみの心はついに、ある方向に向って大きくうねり出したのである。

第67話

エピローグ

静子はいずみの介助で薬を服用したあと、軽い眠りに入った。

そっと部屋から短い廊下に出るいずみ。ふとその先を見やると、一星がこちらに背を向けて窓から外をじっと眺めていた。

ゆっくりと近づくいずみ。そして彼の真後ろまで来て立ち止まる。

どうやら一星はその気配に気づいたようだ。

「なあ、いずみ。」

窓の外を見たまま、おもむろに話し出す一星。

「俺、今の年齢は20歳だけど、精神的には昔の俺そのままなんだ。いずみと毎日ネットしてた頃の俺なんだよ。」

「・・・辛かったでしょうね。子供のころから大人のときの記憶があつて。。」

「ああ・・・正直辛すぎた。そして長すぎた。」

「今までは一度も彼女はいなかったの？」

「いたよ。でも・・・やっぱりダメだった。」

「どうして？」

「いずみを忘れようとして無理に付き合った彼女なんて長く続かないだろ。」

「そう。。。」

「俺は誰も抱いてない。遠い昔に誓ったんだ。優柔不断な心そのままで安易に人を抱いてはいけないってさ。和代との一件以来、そう決めたんだ。」

一星の話す内容や言葉遣いを聞いて、いずみは完全に悟った。

「一星、あなた本当に昔のままなのね。。生まれ直す前のあなたそのもののなのね。」

「そうだよ。俺は20歳の俺じゃない。それは見た目だけの話さ。」
いずみは最後にもう一度だけ、次の質問で一星の本心を確認したいと思った。

「ねえ、こんな釣り合いの取れないオバサンでも・・・本当にいいの？」

一星はようやくいずみの方へ振り返り、ため息をつく。

「なあ、いずみ。俺たちは元々ネットの恋人だったじゃないか。」

「うん・・・そうだよね。」

「お互い見た目を気にして付き合ってたわけじゃないだろ？会わなくなったら何でも話せてわかり合えた。それだけでも毎日が楽しかった。」

「ええ・・・楽しかったわ。」

「むしろ俺の方があのときはいずみに会いたくて我慢ができなくなっちゃったくらいだ。それが余計にいずみを苦しめていたことになったんだけどさ。」

「・・・」

「でも今の気持ちはあの時の気持ちとは違うんだ・・・あの時は一目でもいいから会ってみたい好奇心が強かった。」

「今は・・・違うの？」

「全然違う。今はとにかくいずみと一緒に時を過ごして行きたい。それだけなんだ。若いだの年寄りだの、俺にとってそんな外見なんて問題外なんだよ。」

「でも私・・・もう子供産めるかどうかわからないよ。。」

「あのね、いいかいずみ。俺はいずみといつまでも一緒にいたいだけなんだ。子供は授かりものだからその延長上のこと。いないならいないで俺は構わない。」

「一星・・・」

「俺たちのここまでの軌跡、そして俺たちの精神の結びつきつてのはさ、たかが肉体程度のレベルで表現できるようなものじゃないはずだ！」

いずみは一星の言葉に光を見出したような気がした。彼は強い。そしてたくましい。自分も一星のように強くなればいけないのだと痛感した瞬間だった。

「たぶん私の方が先に死んじゃうよ？それでもいいの？もしそうやって一星が若い子を見つけても恨みはしないけど。」

「いや、いずみは絶対に長生きする。今までの不幸な境遇をこれから取り戻すのさ。」

一星は常ににプラス思考で考えるため、それを聞いてるいずみにも少しずつ勇気が沸いてくる。いや、彼にすっかり勇気を与えてもらっているのに間違いはない。

「うん。。そうしたい。私、一星と一緒に人生を取り戻したい！、一星と一緒に幸せになりたい！」

「いずみ・・・やっと言ってくれたね。その言葉。。」

「どうしても言えなかったの。。そう思ってたのに・・・ずっと思ってたのに。。」

いずみは一星の胸に顔をうずめて泣いた。優しくその頭をなでる一星。

「ありがとういずみ。俺たちはこれから死ぬまで一緒だよ。」

「うん。。うん。。」

いずみはそれ以上、言葉にならなかった。

同じ頃、部屋で仮眠している静子の閉じた目からも涙がこぼれ落ちていた。

薄い壁の小さな古い家。部屋の外の会話など、この静かな空間の中では筒抜けなのである。

その1ヵ月後、一星といずみに看取られながら、幸村静子はおだやかに永眠した。

享年71歳。。

自ら二つの世界に飛び込んで、波乱万丈な人生を繰り返しながらやり直した数奇な運命の女性、そして最期まで自分の責任をまっとうしようとした実直な女性であった。

誰の目にも映らない静子の御霊は、その肉体から離れ、天井を突き抜けて外に出ると、ふわふわとゆっくり天高く舞い上がり、遥かなたへと消えて行った。

――――半年後――――

pon suke..おーい、まだ起きてるー？

ro bin 830..あ、一星！うん。まだ起きてるよお。

pon suke..もう遅いからさっさと寝ろよ！じゃあな！

ro bin 830..（ノ―ω―）ノバタ それだけ？w

pon suke..夜勤中だからサボっているとヤバイんだw

ro bin 830..サボってたんだ？（＊＾m＾＊）ムフツ

pon suke..ちよつとなwホントは職場で勝手にネット繋いじやダメだし。

ro bin 830..それ初耳！ずっと繋いでたじゃない？

pon suke..言ってなかったっけ？

ro bin 830..全然。

pon suke..あれれ？言ったと思ったけどなあ。。

ro bin 830..そこがポンスケなのよw もうヤバイんじゃないな

い？やめたら？

ponsuke…バレやしないさ。今日は隅っこのダブルブースにいるんだ。

robin830…気をつけてね。私もそろそろPC落として寝るから。

ponsuke…俺はまだ頑張らないとな。(; 'Д、) ハァ

一星はネットカフェに勤務していた。交代制で日勤と夜勤の繰り返しの日。

いずみとは共働きで生計を立てている。

robin830…だけど不思議よね。私たち。

ponsuke；なにが？

robin830…夫婦になったのにまだこうしてお互いネットしてるw

ponsuke…そりゃあそうさ。俺たちとネットは切っても切れない縁だしな。

robin830…全てはネットから始まったんだもんね。

ponsuke…んだ。ネットの恋人さ。今は夫婦だけどなw

robin830…気分は恋人のままでもいいよね。

ponsuke…俺はそのつもりだぞ？いずみは違うのか？

robin830…そうだよ。まだまだ恋人だよw

ponsuke；それならよし！

robin830…ね、ね、クビにだけはならないでね！生活かかってるんだから。

ponsuke…いずみの方が稼ぎいいんだからアテにしてるよ。

robin830…もうっ！

ponsuke…明日の昼前には帰れるから、たまには外でランチしないか？

robin830…そうね…節約生活ばかりじゃ息詰まっちゃう

しね。

pon su ke…よし決まりっ！じゃあおやすみ。

ro bi n 8 3 0…一星は寝ちゃダメよ（m o）プ

pon su ke…アホか、お前に言っただよww

ro bi n 8 3 0…（o ^ _ ^ o）ウフツ じゃあ明日ね！

pon su ke…おう！—多サツ！

ro bi n 8 3 0…（u | u）クウウウ。o o

二つの世界を経て、やっとこの二人のゴールとも言うべき平穏な日々が訪れていた。

更に長い歳月が緩やかに過ぎて行った。

一星といずみ、そして静子が生き抜いた不可思議な世界も、この時の流れから見れば、ほんの欠片にも満たない一瞬の出来事でしかない。

人はこの世で世代交代をしてゆく。新しい生命の誕生とその成長と共に、忘れる去られる過去となる。

そんな中、遥か天空から紫色に光を帯びた御霊がひとつ、誰の目にも触れずに地上へ舞い降りて来た。

その御霊は一直線にとある場所へと向かい、一人の人間の母体へと溶け込んでゆく。

それから6年後・・・

「ほら、一真^{かずま}。ちよろちよろしてないでちゃんとお参りしなさい。」

「ママおなか空いた。」

「お墓参り終わったらみんなでごはんにしましょ。」

「ごはんよりおやつがいい！」

「とにかく先にご先祖様に手を合わせるのよ。あとはそれから!」
「そうだぞ! ママの言うこと聞かない子は、パパのゲンコのプレゼントだ。」

「そんなのプレゼントって言わないよお。」

「ほら、お姉ちゃんを見なさい。ちゃんと目をつぶってお祈りしてるだろ?」

「さおり姉ちゃん、何お願いしてるのお?」

「いろいろ。」

「????ふうん。」

帰省で訪れたお盆の墓参り。幸村^{かずひと}一仁家族4人は先祖の墓前にいた。

長女で5歳のさおりと、弟で4歳の一真。そして母親の美鈴。

「ねえパパ。こっちの何て書いてるの?」

一真が指摘したことは、石碑に刻まれた先祖の享年の年齢と没日だった。

幸村	いずみ	2062年10月3日没	享年82歳
〃	一星	2090年12月8日没	享年82歳

「ああ、これはね、ご先祖様の名前と亡くなった年が書いてあるんだよ。」

「ご先祖様の名前?」

「そう。パパのおじいちゃんとおばあちゃんのね。一真とさおりにとっては、ひいじいちゃんとひいばあちゃんかな。」

「ふうん。その上のおじいちゃんだったら、ひいひいじいちゃんになるの?」

「そうだよ。更にその上は、ひいひいひいじいちゃんさ。」

「あなたっ! 子供にいい加減なこと教えないで! (へへ;)」

「あははは (@^▽^@)」

「でもあなたのお爺様とお婆様って、同じ年齢で亡くなってるのに、没年月日があまりにもかけ離れてるわよね。今まで全然気づかなかったけど、業者さんが間違えて彫ってしまったんじゃないのかしら？」

妻からの質問を受けて一仁は軽く苦笑いをした。

「いや・それは本当なのさ。うちのじいちゃんとはあちゃんは28歳の年の差があったんだ。」

「（。○。；）ええっ！！それホントだったの？信じられない。しかもおばあちゃんの方が年上ってことよね？」

「ああ。でもびっくりするくらい仲良かったんだぜ。」

「昔の人なのにすごい恋愛してたのねえ。」

「詳しいことは知らないけど、複雑な事情も色々あったらしいよ。」

「へえ・なんか興味あるわ。」

「余計な詮索はよそう。ご先祖さんはそつとしておいて大事にしなければ。」

「でも、あなたのおじいちゃん・晩年は独りぼっちで寂しかったんじゃない？」

「うん。そういうときもあったかもしれないな。でも・・」

「でも？」

「いずみばあちゃんが死んだとき、まだ一星じいちゃんは53歳か4くらいだったんだけど、再婚とか全く頭になくてさ、毎日仏壇にお供えして墓参りも自分でしょっちゅう来てね。墓前でいつもばあちゃんと会話してたんだ。」

「そう。。」

「花を取り替えたり、ばあちゃんの好きだったお菓子を日替わりでお供えする日課が楽しみだったような気がしたな。二十三回忌の法要まできちんと取り仕切ったしね。」

「・・なんかせつないわね。。でも・・本当に素敵なお爺様だわ。」

「ああ。俺もそう思う。さ・・そろそろもう帰ろう。」

「ええ。一真、行くわよ。」

「うん。」

美鈴は一真と手を繋いで歩き出す。その後ろを一仁とさおりが・

「あれ？さおりが来てないぞ。」

すでに歩き出していた一仁が墓の方を振り返ると、さおりがまだ石碑の前にたたずんでいた。

「おい、さおり！何やってんだ？帰るぞ。早く来い！」

さおりはこちらに背を向けていたので、確認はできなかったが、確かに手で目をこすっているようなしぐさに見えた。

「おかしな奴だな。さおり、置いていくぞ！」

その言葉を聞いてやっとさおりが向き直った。目がやや赤い。

「パパ待って。すぐ行くから。」

そう言うと、さおりは駆け出して一仁の元へたどり着き、父親の手を握った。

「お前、泣いてたのか？」

「・・・泣いてなんか・・・ないよ。」

一仁に手を引かれながら墓前を後にするさおり。

歩きながら距離が遠くなってゆく幸村家の墓の方へ、ふともう一度だけ振り返る。

そしてさおりは心の中で囁いた。

「一星・・・よくいずみさんを最期まで守ったわね。偉いわ。」

(完)

第66話 エピローグ（後書き）

※ここまで時間を割いて読みに来ていただいた読者の方々には心から感謝致します。ありがとうございます。

できればほんの一言でも感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2603b/>

ネットの恋人

2010年10月11日17時17分発行